

何らかの理由で中高時代に英語を  
マスターできなかった  
あなたに捧げる

**Revenge!**

**英文法**

このまま何もしないで終わるか  
それとも…?  
それはあなた次第です。



*No. 1*  
名詞編  
動詞編

土方千春  
(ひじかたちる)

## リベンジシリーズ

何らかの理由で中高時代に英語を

マスターできなかった

あなたに捧げる

# リベンジ英文法

このまま何もしないで終わるか

それとも…？

それは、あなた次第です。

土方千春

## 表紙について

このネコは、筆者の近所の神社にいた野良猫です。そこに住んでいるのか、たまたまそこに居合わせたのかわかりませんが、この憎らしげな顔つき（しかも舌なんか出しちゃってますね）、ガリガリに痩せた身体、そして、類まれなる毛並みの悪さ——尋常ではありません。おそらく並みならぬ苦勞をしたのだらうと思われます。しかしその反面、この全身にみなぎるたくましさはどうでしょう？たいていのネコなら、カメラを向けると逃げてしまいますが、後ろを振り向きながら「撮れるもんなら撮ってみろ！」（撮ってますけどね）というすご味を感じさせます。というわけで、背景には、覚悟の象徴である不動明王を思わせる「火」をあしらってみました。やはり、何事も燃えるような「情熱」が必要だということです。そして、いったん「やるぞ！」と決めたら、必ずやり抜く「覚悟」が大事——そういう願いを込めて表紙をデザインしました。

（写真撮影：土方康明、表紙デザイン：土方千春）

## 著者紹介

1957年福岡県生まれ。旧大阪外国語大学（現大阪大学）イスパニア語（スペイン語）学科卒業後、広告制作会社にて約25年間英文コピーライティング制作に携わり、その後フリーランスとして、主にマーケティング業界における日本語英語間の翻訳に基づくクリエイティブライティングに従事、現在に至る。日本語と英語という全く文化や構造の異なる言語によっていかにパワフルで深い表現をするかにこだわり研鑽を重ねる。その他の著書に『～毎日コツコツシリーズ～ 英語表現ドリル（電子書籍）』、『こじつけ日本語で覚えるスペイン語単語（電子書籍）』、また英語学習やスペイン語学習サイト、英語・スペイン語・日本語の3か国語で日本を紹介するサイトなどを運営している。

リベンジ英文法 .....	2
表紙について .....	3
著者紹介 .....	4
はじめに .....	11
リベンジシリーズとは .....	11
英語の上達が早い人遅い人、深い人浅い人 .....	11
リベンジ英文法 .....	14
読み方表記について .....	15
Lesson 1 : リベンジ！英語の「品詞」 .....	17
1. 名詞とは .....	18
2. 代名詞とは .....	19
3. 冠詞とは .....	21
4. 形容詞とは .....	23
5. 動詞とは .....	24
6. 助動詞とは .....	25
7. 副詞とは .....	26

8. 前置詞とは.....	27
9. 接続詞とは.....	28
10. 数詞とは.....	29
11. 指示詞とは.....	29
12. 間投詞とは.....	30
<b>Lesson 2: リベンジ！英語の「人称代名詞」</b> .....	<b>32</b>
英語では名前を繰り返すのはくどい？ .....	32
人称代名詞の種類.....	33
「私」 = I (アイ) ではない.....	34
1. 主語となる人称代名詞 .....	35
2. 所有を表す人称代名詞 .....	37
3. 目的語となる人称代名詞 .....	38
「ダミー主語」としての 代名詞 it.....	39
<b>Lesson 3: リベンジ！英語の「動詞」</b> .....	<b>41</b>
主語によって形が変わる .....	41
いろんな動詞と3人称単数現在活用.....	46
現在・未来・過去によって形が違う.....	50

動詞の現在形.....	51
動詞の未来形.....	52
動詞の過去形.....	55
英語の過去形の考え方 .....	55
「過去分詞」って何? .....	56
「規則動詞」と「不規則動詞」 .....	58
英語の「規則動詞」とは? .....	58
英語の「不規則動詞」とは? .....	63
Lesson 4 : リベンジ! 英語の「be 動詞」 .....	67
be 動詞の現在形.....	67
be 動詞の未来形.....	73
be 動詞の過去形.....	74
be 動詞を使った決まり文句 .....	77
天気・気候の表現 .....	77
日付や曜日を言うときの表現.....	79
時間を言うときの表現 .....	82
「～がある・いる」という存在を表す表現.....	84

年齢を言うときの表現 .....	87
Lesson 5 : リベンジ！英語の「名詞」 .....	90
英語の単数と複数 .....	90
英語の単数名詞 .....	91
名詞の複数形 .....	95
いろいろな名詞の複数形 .....	96
腕時計 (watch)、サンドイッチ (sandwich)、箱 (box) などの複数形 .....	97
チェリー (cherry)、赤ん坊 (baby)、おもちゃ (toy) などの複数形 .....	99
ジャガイモ (potato)、トマト (tomato)、ピアノ (piano) などの複数形 .....	101
ナイフ (knife)、葉 (leaf)、屋根 (roof) などの複数形 .....	103
ガチョウ (goose)、歯 (tooth)、足 (foot) の複数形 .....	105
ネズミ (mouse)、シラミ (louse) の複数形 .....	107
男 (man)、女 (woman) の複数形 .....	109
雄牛 (ox)、子供 (child) の複数形 .....	110
fish (魚)、sheep (羊) などの複数形 .....	112
ラテン語から入った単語の複数形 .....	115
複数形まとめ .....	116



いろいろな種類の名詞 .....	118
固有名詞と普通名詞 .....	119
具象名詞と抽象名詞 .....	122
可算名詞と不可算名詞 .....	123
集合名詞.....	131
複合名詞.....	134
<b>コラム</b> .....	<b>136</b>
コラム1 : 「母音」 とか 「子音」 って何? .....	137
コラム2 : なぜ 「i」 だけ大文字なの? .....	139
コラム3 : 文法の 「格」 って何? .....	140
コラム4 : なぜ 「ダミー主語」 なんてものがあるの? .....	143
コラム5 : なぜ 3 人称単数現在の動詞だけ 「-(e)s」 をつけるの? .....	146
コラム6 : なぜ 「y」 を 「i」 に変えなきゃならないの? .....	149
コラム7 : なぜ規則動詞と不規則動詞があるの? .....	152
コラム8 : なぜ be 動詞は主語によって違うの? .....	156
コラム9 : なぜ時間の言い方には o'clock をつけるの? .....	158
コラム10 : なぜ 「o」 の後に 「-es」 をつけるの? .....	160

コラム1 1 : なぜ「-f」を「-v」に変えて「-(e)s」をつけるの? .....	161
コラム1 2 : 「1つの～」というとき「a」+名詞と「one」+名詞はどう違うの? .....	163
コラム1 3 : いろんな時間の言い方 .....	165
<b>付録</b> .....	<b>168</b>
英語の不規則動詞リスト .....	169
「子音+ -o」で終わる名詞: 「-es」をつけるもの vs 「-s」をつけるものリスト	175
「-f(e)」で終わる名詞: 「f+ -s」になるもの vs 「v+ -es」になるものリスト .....	177
日付や曜日に関する単語リスト .....	179
天気・気候に関する単語リスト .....	185
数えられない名詞の数量表現リスト .....	186
集合名詞リスト .....	187

# はじめに

## リベンジシリーズとは

あなたがこの本をお読みになっているということは、何らかの理由で、中学校、高校時代に英語を十分に身に付けることができなかったということですね。

その理由とは、英語の先生が嫌いだったとか、英語の授業でイヤな思いをしたというものもあるかもしれません。あるいは、いろんな例外もあったり正解も1つだけじゃなかったりでスッキリしない、「どうも英語っていうのは性に合わない」という人もいるかもしれませんね。

しかし、その反面、今や「英語ができて当たり前」のような時代になってきているので、「自分も英語ができたらいいのに」、「やっぱり、やらなきゃいけないよな、英語」と感じている人もいることでしょう。

「リベンジシリーズ」とは、英語が苦手だけど、なんとか今からでも英語を身に付けたいという人のためのコンテンツです。

英語が苦手になったり、嫌いになりそうな局面に焦点を当て、「とにかくこのまま覚えましょう」ではなく、「なぜそうなのか？」にギリギリまで迫った内容になっています。

ですから、「リベンジ」とは言え、ただ単に「英語がわかるようになる」という程度ではなく、英語のできる人でも知らないような深い見識やレアな知識が身に付くこともあります。

[目次に戻る](#)

## 英語の上達が早い人遅い人、深い人浅い人

人にはいろんなタイプがあります。

a) 理屈なしに決められたことをコツコツとこなせるタイプ

b) 同じことを繰り返し続けるのが苦痛なタイプ

c) 好奇心や探求心が強く問題意識を持つタイプ

など、学ぶ人の性格によって、英語の学習に対する感じ方も違います。

退屈で納得のいかない文法のルールであっても、なんら苦痛を感じることもなく、すんなり覚えられる人もいます。それとは対照的に、言われたとおりに退屈なことを坦々と覚えることに苦痛を感じる人もいます。

さらに、英語などの語学を勉強していると必ず出てくるのが

**「これは決まりごと（約束事）なのでそのまま覚えましょう」**

というセリフです。この「こう決まっているから」というのが文字通り「決まり文句」というわけですが、この一言が、英語が苦手（嫌い）になるすべての理由を否定して、「だから覚えるしかないんだよ」と言える「免罪符」になっているのかもしれませんが。

もっとも、教える側からすればこれはけっこう便利な言葉なのです。むしろ、これがないと、授業が先に進まないこともあります。

なかには好奇心が強い人もいるので、「なんでそうなんですか？」とか「この場合はどうなんですか？」とどんどん質問してきます。そう質問されても教える側はその答えを準備していないし（単なる語学学習の域を超える場合もある）、今やっている学習には関係ない（まだその段階ではない）ということもあり、こういう質問に振り回されると「教える」どころじゃなくなってくるのも事実です。

ですから、やはり、こういうタイプの人ほどどちらかと言うと語学の上達が遅いです。上のタイプ別で言えば、a) の「決められたことを理屈なしにコツコツやれるタイプ」が一番上達が早いです。疑問を持つエネルギーをすべて練習に使えるからですね。

しかし、だからと言って、教える側もこの「決まり文句」を乱発すればいいというものではありません。それを言うってしまうことで、「英語」という学問としてのチャンスの芽を摘んでいることにもなるからです。言うまでもなく、学問の面白さは「なぜ？」から始まります。ただ単に、うわべだけの英語を使えることだけをめざしていると、英語の本当の面白さや深い知識の習得への道を閉ざしてしまうことになります。

せっかく「疑問」という形で芽生えた好奇心が否定されることで、ますます英語が嫌い（苦手に）なっていくこともあるでしょう。そして結局、学校の英語が得意な人は、a) タイプの人だけということになります。

ところが、a) タイプはある程度までは（表面的な）上達が早いですが、英語に対する理解度は浅いところで留まってしまう場合が多いです。疑問や問題意識を持たないから当然ですね。英語の本質とか、深いニュアンスとか、そういうところまでの理解に至るには「なぜ？」という疑問が欠かせません。

むしろ c) のタイプのほうが（英語学習が継続できればの話ですが）、より深い知識を身に付けることができるかもしれません。また、「こんな効果的な学習法があった」など、新しいやり方にチャレンジしたり、学習アイデアを考え出したりするのは b) のタイプでしょう。日本人が国際社会でいつまでたっても英語が下手なのは、こういう人材が育たない教育だからかもしれません。

これは理想かもしれませんが、英語学習においても、a)、b)、c) のタイプの特徴を取り入れたやり方をすることが必要だと思うのです。また、学習者もそれぞれのタイプの良いところを取り入れていくことで効果的な学習ができるでしょう。もっとも、人間誰しも、「絶対にこのタイプ」というのではなく、ある程度いろんな性格的要素を持ち合わせていると思いますので、「自分はこういうタイプだからダメ」などと決めつけるのではなく、少しでも食わず嫌いをやめてみてください。

そして、一番大事なのは、「今度こそ！」という強い決意です。

さあこれから、本書で、英語にリベンジ！

## リベンジ英文法

英語ができたらいいなとは思うけど、「文法」なんてものを考えただけで頭が痛くなる。でも、英語をやり直してしっかり身に付けるには避けて通れないのが「文法」ですね。

しかし、やっぱり「文法」ってつまんないよな。学校の英文法の授業なんてのも、あまり思い出したくないような、何を習ったか覚えていないような——なんだか退屈でだるい昼下がりの時間という印象かもしれません。

確かに、「文法」は退屈です。英語が好きな人間にとっても「面白くない」テーマであることには違いがありません。「英語なんてもういやだ」とか「ついていけない」と、英語が嫌いになったり苦手意識を持ってしまったりするのは、この「文法」によるところも大きいと思われます。

ではなぜ「文法」は面白くないのか？それについてちょっと考えてみましょう。

いろんな理由があるかもしれません。たとえば、

1. 納得できないルールの押し付け
2. 規則性がない、スッキリしない
3. とにかく退屈
4. 専門用語が多すぎる
5. 発展性がない、何の役に立つ？

などなどですね。

1. や2. の理由については、長い歴史の中で培われてきた「文章の法律」であるだけに一筋縄ではいきません。言語というのは昨日や今日できたものではなく人類の歴史とともに

に歩んできています。

今ある「英語の理不尽なルールや不規則性」は、英語が歩んできた歴史の結果です。そうなったのには何らかのいきさつや理由があるからです。

「このまま覚えるしかない」とあきらめるのではなく（もちろん、なかにはそういうものもあります）、「なぜそうなの？」という視点を大事にしましょう。そして、その疑問を納得できるまで追求してください。

その結果、答えが見つからなくてもいいのです。そこまで追求した経験から何かが見えてくるはずです。

本書においても、筆者自身が疑問を抱いた内容について、調べられる範囲でとことん突き詰めた答えを紹介しています。

「なぜ」を追求するには時間も手間もかかりますが、それが「学ぶというエキサイティングな世界」への入り口です。そうして得た答えは1つの発見です。発見をすることで、退屈な営みはわくわくする世界へと変わるはずです。

4. の専門用語もあえて覚える必要はありません。しかし、探求をしていくうちに自然と覚えてしまうものもあります。

5. については言わずもがなですね。「役に立たない」どころか、きちんと英語を使いこなそうとすれば文法は必須です。「なぜ」の視点を大事にした知的探求は楽しくもあり、文法を深く理解することで英語という言葉の理解も深くなるのです。

詰まるところ、学習とは、自分で行うものであり、誰かに言われたことをそのままやることではありません。もちろん、経験者の手ほどきは必要です。しかし、学びを面白くするのは、教えてくれる人ではなく、自分なのです。だから「独学」こそ妙味があるのです。

[目次に戻る](#)

読み方表記について

本書では、英文の下に小さな文字で読み方を「ふりがな表記」していますが、実際の発音は日本語で表記することは不可能ですので、あくまでも目安です。

また、表記に際しては、以下のような簡単なルールを設けています。

## ●アクセント

英語の単語にはアクセントがあります。表記では赤のボールド書体を使っています。その箇所にある音を強調するように発音します。

### ●「ら行」

ひらがなの「ら行」の文字は「r」の音を区別しています。英語の「r」の音は舌先をどこにもつけずに、少し後ろに曲げるようにして発音する音です。

### ●「ラ行」

カタカナの「ラ行」の文字は「l」の音を区別しています。英語の「l」の音は舌先を上歯茎の裏側につけ、息を出すことで発音する音です。

### ●「さ行」

ひらがなの「さ行」の文字は、濁らない「th」の音を区別しています。濁らない「th」の音は、舌先を上下の歯にはさむようにして息を出すことで発音する音です。

### ●「ざ行」、「だ行」

ひらがなの「ざ行」や「だ行」の文字は、濁った「th」の音を区別しています。濁った「th」の音は、舌先を上下の歯にはさむようにして声を出すことで発音する音です。

[目次に戻る](#)



# Lesson 1 : リベンジ！英語の「品詞」

「文法」の話をしているとしょっちゅう登場するのが「名詞」とか「動詞」、「形容詞」といった専門用語ですね。

それでも、「名詞」や「動詞」、まあ「形容詞」くらいまでは「ま、こんなもんかな」というイメージがつかめるけど、なんかあったよな、「前置詞」とか…「え、助動詞？そんなのあったっけ」などというような品詞もあつたりで、もう「さいならー」と言いたくなってしまうことも…(?)。

というわけで、別に覚えなくてもいいと言えはいいのですが、文法的な説明をするうえでどうしても使わなければならないことがある用語もあるわけです。「名詞」のことを言うのに、いちいち「リンゴとかオレンジとかいう物の名前のこと」などと表現していたのでは、らちがあきませんね。

ということで、このセクションでは、こういった用語についてざっくり説明します。覚えなくてもかまいません。わからなくなったときにまた、このセクションに戻ってくればいいのです。そうやって何度も行ったり来たりしている間に覚えてしまう——そんな性格のものなのです。

そうそう、こういう「名詞」とか「動詞」とかのことを専門的に「**品詞** (ひんし)」と呼びます。

**ではさっそく、リベンジ！英語の「品詞」。**

「品詞」には次のようなものがあります。

1. [名詞](#)
2. [代名詞](#)
3. [冠詞](#)

#### [4. 形容詞](#)

#### [5. 動詞](#)

#### [6. 助動詞](#)

#### [7. 副詞](#)

#### [8. 前置詞](#)

#### [9. 接続詞](#)

#### [10. 数詞](#)

#### [11. 指示詞](#)

#### [12. 間投詞](#)

以下、1つずつ見てみましょう。

[目次に戻る](#)

## 1. 名詞とは

「名詞」とは一言で言えば、「人やものの名前」を表す語ということができます。

具体的にどういうものがあるかと言うと、あなたの身の回りを見渡してみましょう。まず、あなたがこれを読んでいるデバイス、スマホやパソコン、それも「名詞」です。スマホの画面、それをタップするあなたの「指」も名詞ですね。英語で言うと

### smartphone

(スマートフォン)「スマホ」

### PC

(ピー・シー)「パソコン」

## screen (display)

(スクリーン、ディスプレイ)「画面」

## finger

(フィンガー)「指」

というふうになります。

ところで、本書では、便宜上カタカナ表記を付けていますが、簡単なルールを設けています。**赤い文字**のところは「アクセント（強勢）」になるので、強めに発音してください。その他、発音の区別など、詳しい説明は [「はじめに」の「読み方表記について」](#) をご覧ください。

冒頭でも述べましたが、「人やものの名前」が「名詞」ということですね。じゃあ自分の名前はどうなるの？と言うと、これも「名詞」です。鈴木さんでも、太郎さんでも花子さんでもいいのですが、こういう名前もすべて「名詞」です。そして、こういう名詞のことを他の名詞と区別して「**固有名詞**」と呼んでいます。その人固有の名前だからですね。さらに、人の名前と同様に、国の名前や地名、会社名や団体名なども「固有名詞」となります。

英語の名詞の種類にはいろいろありますが、詳しくは[後の Lesson](#) で学ぶことにして、ここでは、英語の名詞の2つの特徴を覚えておいてください。それは

1. 英語の名詞は「単数」か「複数」にこだわる
2. 英語の名詞は「種類」によってルールが違う

ということです。

[目次に戻る](#)

## 2. 代名詞とは

「名詞」の後は「代名詞」について見てみましょう。

なんだ「名詞」に「代」がついただけか？と思われるかもしれませんが、その通りですね。つまり、「代理をする名詞」というわけです。

たとえば、自分の名前が「鈴木花子さん」だとすると、普通に自分のことを言うときに「鈴木花子が行きます」とか「鈴木花子はこの意見に賛成です」などと言う人はいませんね（何をカッコつけてんだい？と言われかねません）。「私が行きます、私は賛成です」というふうに「私」という言葉を使います。これが「代名詞」です。代名詞には、「私」以外にも、「あなた」、「彼」、「彼女」、「彼ら」などがあります。

さらに、こういった代名詞を専門的に「**人称代名詞**（にんしょうだいめいし）」と呼びます。この用語を覚える必要はありませんが、「人を表す代名詞」と覚えておいてください。

「代名詞」はそれだけではありません。年齢を重ねてくると「モノや人の名前」（まさしく名詞）がなかなか思い出せないことがよくあります。「ほら、あれよ、あれ」「ああ、あれね」とか、「あれってこれのこと？」など「あれ」や「これ」が増えてきますが、こういった語も「代名詞」です。

「あれ」とか「これ」と指し示すところから、こういう代名詞を「**指示代名詞**（しじだいめいし）」と呼びます。

さらに、「あれ」、「これ」が増えてくると、「だから、どれよ？」「あれって何？」など、意思の疎通が難しくなってきたりしますが、こういう場合の「どれ」や「何」も「代名詞」になります。

「どれ」なのか「何」なのか疑問になることから、こういう代名詞を「**疑問代名詞**（ぎもんだいめいし）」と呼んでいます。

そうして、一体「どれ」のことなのか、「何」を指しているのかがわかりにくくなると、ここはひとつ深呼吸でもして、落ち着いて、「つまり、この前買った（ところの）本のことよ」とか「一年前にプレゼントした（ところの）セーターのことだ」という説明になっ

てくるわけです。

ちなみに、この「～するところの」という言い回しに聞き覚えのある人もいるかもしれませんが、そう、この本来の日本語ではない苦しまぎれの言い回しをすることで、名詞に何らかの関連性を付けようとするわけですが、それが、「**関係代名詞**（かんけいだいめいし）」ですね。この「関係代名詞」も「代名詞」の一つなのです。

そして、最後に、適切な主語が明確でない場合など使う「**意味のない仮の主語（ダミー主語）になる代名詞**」があります。

ということで、「代名詞」の種類をまとめてみると以下ようになります。

1. **人称代名詞**——「私、あなた、彼、彼女」など、人の代わりをする語
2. **指示代名詞**——「あれ、これ」など、対象を指し示すときの語
3. **疑問代名詞**——「何」、「どれ」など疑問文で使う代名詞
4. **関係代名詞**——「昨日買った本」、「私の好きなドラマ」など名詞に関連性を付けるための代名詞
5. **ダミー主語になる代名詞**——意味のない仮の主語の役割をする代名詞

いずれも、後の Lesson で詳しく学びますので、記憶のどこかにとどめておく程度でかまいません。

[目次に戻る](#)

### 3. 冠詞とは

次に、「冠詞」について見てみましょう。

日本語にないだけに、なんでこんなものが要るのかとってしまうのが「冠詞」ですね。

歴史的に見れば、英語の祖先である「インド・ヨーロッパ語」には冠詞はありませんでし

た。しかし、英語が変化を遂げていくうちに、正確な情報が取れなくなることがあり、それを助ける意味で「冠詞」が誕生したのです。他の言語もそうです。ラテン語も昔は冠詞はありませんでしたが、そこからフランス語やスペイン語のもととなるロマンス語という言語に発展していく過程で冠詞が登場しました。

ですから、「冠詞」が必要かと言われるれば、必要だったから登場したわけです。でも、登場したその後がよくないですね。

物事は何でもそういう傾向がありますが、新しいものが登場すれば使いたくなります。言語もそうで、新しい「冠詞」というものができたらみんな使いたくなるわけです。「ここも冠詞が要るよな」、「そこにつけるんだったらここにもつけないとおかしいよ」などと言っているうちに、どんどん用法が広がり、今じゃ「冠詞」だらけで收拾がつかない(?) ような事態になっているとも言えます。そのうち、名詞にはすべて冠詞がつくようになり、「これじゃ正確な情報が取れないよ」という状況が再び訪れ、わかりやすくするために、「新しい別の冠詞」が登場するなんてことにもなりかねません(世界の古い言語のなかにはそういう例もあるようです)。

ともあれ、そんなことを言っていてもしかたがありませんので、「英語の冠詞とはこういうものだ」というイメージだけでもつかんでおきましょう。

「冠詞」とは、「名詞」の前につけて、その名詞が 1つであるという数の概念や、すでに登場した名詞であったり、聞き手にも「どれ」かわかる名詞であることを示すための語です。

英語には、以下の3種類の冠詞があります。

1. a : 「1つ」ということを表す冠詞で、「あいうえお」以外の音(子音)で始まる単数名詞につく。
2. an : 「1つ」ということを表す冠詞で、「あいうえお」の音(母音)で始まる単数名詞につく。
3. the : 一度登場した名詞や聞き手にもわかる名詞の前につける

専門的な言い方では、a や an をひとまとめにして「**不定冠詞**（ふていかんし）」と言い、the のことを「**定冠詞**（ていかんし）」と呼びます。a や an は話し手と聞き手との間で「どの名詞なのか定まっていない → **不定冠詞**」、the は「どの名詞なのか定まっている → **定冠詞**」と覚えておくとよいでしょう。

また、「子音」や「母音」について詳しく知りたいという人は[コラム1：「母音」とか「子音」って何？](#)をご覧ください。

[目次に戻る](#)

## 4. 形容詞とは

次に、「形容詞」について見てみましょう。

「形容詞」と言うと、「形容」するということから、「美しい」とか「大きい」など、様子や状態を表す語だと思ってしまうかもしれませんが、それだけではありません。

英語の形容詞の場合はむしろ

### 「名詞」を修飾する「語」

であるのとらえておいたほうがいいでしょう。

じゃあ「修飾って何？」ということになるかもしれませんね。普通に言えば「美しく見せるために飾ること」なのですが、文法で「修飾」という場合、「美しい」かどうかは関係ありません。言ってみれば

### 何も無いプレーンな単語に何らかの情報を与える語

というふうに考えることができます。

つまり、「小さな家」とか「大きな家」とか言う場合、「小さな」や「大きな」が「家」という名詞に情報を与える形容詞というわけです。

その他、「名詞に何らかの情報を与える」という役割であることから、名詞の様子や状態を表す語以外にも、次のような形容詞があります（とくに覚える必要はありません）。

1. 人称形容詞（にんしょうけいようし）——「私の本」、「あなたの家」などと言うときの「私の、あなたの、彼の、彼女の」に該当する語。人称代名詞の所有格と呼ぶことのほうが多い。
2. 指示形容詞（しじけいようし）——「この本」、「あの件」などと言うときの「あの、この」などの語
3. 疑問形容詞（ぎもんけいようし）——「どんな人」、「どの服」などと言うときの「どんな、どの」などの語
4. 関係形容詞（かんけいけいようし）——「私が選ぶべき本」、「私が探している私に似合う色」など、名詞に何らかの関連を付けるために修飾する語

[目次に戻る](#)

## 5. 動詞とは

「動詞」は「動く」という文字が入っているため、「動作を表す語」ということが言えますが、それだけではありません。「〇〇は～である」というときの「である」に相当する「状態を表す動詞」もあります（これを専門的に「**be 動詞**（びーどうし）」と呼びます）。それ以外にも、「～になる」、「～が起こる」といった意味の動詞もあります。

具体的にどんな動詞があるかはそのつど覚えていけばいいのですが、ここでは、英語の動詞の一般的な特徴について把握しておきましょう。それをまとめてみると次のようになります。

1. 動詞は主語によって形が変化する
2. 動詞は、現在・過去・未来によって形が変化する

まず、最初の特徴についてですが、幸い、英語の場合、変化のパターンは実にシンプルです。[後の Lesson](#) で詳しく説明しますが、2種類しかありません。



そして、2番目の特徴である「現在・過去・未来」の変化ですが、これも[後の Lesson](#) で詳しく学びますので、ここでは、「現在・過去・未来」という変化をするのだということだけ頭に入れておいてください。

[目次に戻る](#)

## 6. 助動詞とは

次は「助動詞」について見てみましょう。

「助動詞」とは文字通り、「助けるための動詞」あるいは「動詞を助けるもの」という意味で、動詞といっしょに使われることで、その動詞で表現される動作を補助する役割をします。

具体的にどんなものが「助動詞」なのかと言うと、ありましたよね、オバマ大統領のキャッチフレーズである「Yes, we **can!**」。このフレーズの can (**キャン**) は「～できる」という意味ですが、「助動詞」の代表的な例と言えるでしょう。

その他、「～すべきだ」というときの should (**シュッド**)、「～しなければならない」というときの must (**マスト**)、「～するだろう」というときの will (**ウィル**) も「助動詞」です。

では、どのように動詞を助けるのかと言うと、下記のような役割があります。ここでは、ざっと記憶にとどめる程度でかまいません。

1. (動詞の) 現在、過去、未来を表す
2. (動詞が) 完結しているのか、継続・反復されるのかを表す
3. (動詞の内容の) 必要性、可能性の度合いを表す
4. (動詞が) 能動態であるか受動態であるかを表す
5. 疑問文、否定文に登場して (動詞) の補佐をする (do, does, did)

## 6. (動詞の) 強調を表す

[目次に戻る](#)

## 7. 副詞とは

次に、「副詞」について簡単に説明します。

「形容詞」が「名詞」を修飾する品詞であったのに対して、「副詞」は次のようないろいろなものを修飾します。

1. 動詞
2. 形容詞
3. 別の副詞
4. 「限定詞」と呼ばれる名詞を修飾する語
5. 前置詞
6. 節や文章

こういった要素を修飾することで、

- a) 方法
- b) 時間
- c) 場所
- d) 頻度
- e) 程度
- f) 確かさのレベル

などを表現します。

具体的に「副詞」の例を挙げてみると

注意深く見る

速く走る

そこに見える

しゅつちゆう来る

とても美しい

確かにそう思う

などの下線の部分に該当するものが「副詞」となります。

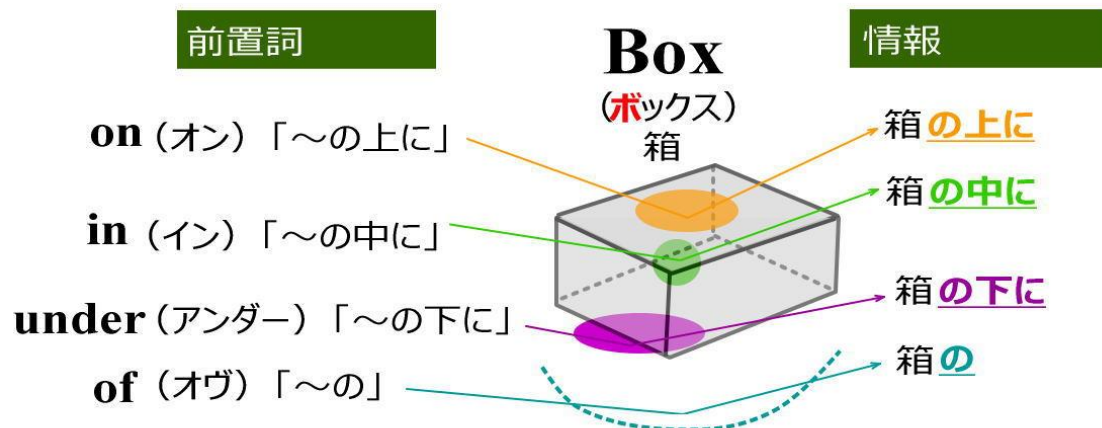
[目次に戻る](#)

## 8. 前置詞とは

次に、「前置詞」について見てみましょう。

文字通り、「前に置く詞（ことば）」ということですが、名詞の前にこれを持ってくことで、その名詞に時間的・空間的な情報を付け加える役割をします。

たとえば、ここに「箱」(box : **ボ**ックス) という名詞があるとします。それに前置詞をつけることで、「箱の中」、「上」や「下」という情報を付け加えることができるわけです。



前置詞の種類をざっくりまとめてみると、以下のようになります。

1. 「～に、で」などの場所的な情報をつける前置詞
2. 「～に」などの時間的な情報をつける前置詞
3. 「～から～へ」などの起点・終点の情報をつける前置詞
4. 「～を通じて、～を用いて、～に沿って」などの特別な意味を持たせる前置詞

[目次に戻る](#)

## 9. 接続詞とは

次に、「接続詞」です。

「接続する詞 (ことば)」ということから、「しかし、したがって、だから、そして」など、単語やフレーズ、文章をつなぐ役割をする語のことを言います。

英語の接続詞には

but	しかし	バット
and	そして、～と	アンド

などがあります。

[目次に戻る](#)

## 10. 数詞とは

「数詞」とは文字通り、「数」を表す言葉のことですね。

誰でも知っている「ワン、ツー、スリー…」というのが英語の数ですが、英語の「数詞」には次の2種類があります。

1. 基数詞 (きすうし) : 「ワン、ツー、スリー…」というときの数字
2. 序数詞 (じょすうし) : 「ファースト、セカンド、サード…」など、何番目であるかという順番を表す数字

英語では、日本語のように「番目」などの語尾をつければいいというわけにはいきませんね。基数詞と序数詞では別々の単語があり、それぞれ、どういう場合に使うのかが決まっています。

これも後の Lesson で詳しく学びますので、ここでは、ざっくりこういうものだということだけ頭に入れておいてください。

[目次に戻る](#)

## 11. 指示詞とは

2. [代名詞とは](#)のセクションでも紹介しましたが、「ほら、あれよ」、「ああ、これのこと？」というような「ものを指し示す」ときに使う語のことを専門用語で「指示詞（しじし）」と呼んだりしますが、いわゆる「こそあど言葉」のことですね。

英語の指示詞には、次の2種類があります。

1. 指示代名詞（しじだimeiし）：「あれ、これ」などというときの語

2. 指示形容詞（しじけいようし）：「あの本、この服」などというときの「あの、この」に該当する語

指示詞についても、後の Lesson で詳しく学びますので、ここでは、ざっくりこういうものだけということだけ頭に入れておいてください。

[目次に戻る](#)

## 12. 間投詞とは

最後に「間投詞（かんとうし）」です。

「間投」という言葉がなんとなく耳慣れないのですが、要は、感情を表すときに使う語だと考えればいいでしょう。

英語の間投詞には

oh!	おお、ああ	オウ
wow!	わーっ、うおーっ	ワウ

のようなものがあります。

[目次に戻る](#)

# Lesson 2: リベンジ！英語の「人称代名詞」

Lesson 1 で文法の品詞について見てきましたが、これから「英語の文法」を学習するんだという心構えができたでしょうか？

この Lesson 2 では、名詞を言い換えるときの「[代名詞](#)」のうち、「人を表す代名詞」である「人称代名詞」について学んでみましょう。

たとえば、「自分」という人間の代理であれば「私」、目の前にいる「相手」であれば「あなた」、自分と相手以外の「第三者」であれば、女性なら「彼女」、男性なら「彼」ということになります。

本来日本語では、相手のことを言うときに「〇〇さん」という名前や肩書で呼ぶことが多く、「あなた」という呼び方もほとんど使いません。「キミ、オマエ」といった代名詞もよほど親しい仲でなければ使うことは少ないですね。また、「彼」や「彼女」といった言い方で第三者のことを言及することも、日本語本来の言い方ではなく近代になってから取り入れられた言い方なので、どこことなく「日本語らしさに欠ける」とか、「奇をてらっている」という印象を受けることもあるかもしれません。

[目次に戻る](#)

## 英語では名前を繰り返すのはくどい？

ところが、英語では、何度も同じ名前や呼び方を繰り返すのは「くどい」とか「芸がない」という印象があります（ヨーロッパ系の言語はほとんどこの傾向があると言えます）。そういうことから、いったん登場した人物を指す場合、人称代名詞を使って代用するのが普通です。たとえば、以下のような文章があるとします。



a) ジョンが部屋に入ってきた。(ジョンは) うれしそうだった。

b) ジョンが部屋に入ってきた。彼はうれしそうだった。

日本語では、a) のように名前を繰り返すというよりもむしろ省いてしまうことが多いですね。しかし、英語では、主語を省くことはできません。かといって「ジョンは」と繰り返すとくどい感じがあります。そこで、b) のように「彼」という代名詞に置き換えて表現するのです。

[目次に戻る](#)

## 人称代名詞の種類

そういうことから、英語では「人称代名詞」が重要になってくるのですが、その「人称代名詞」にもいくつか種類があります。

### 1. 主語となる人称代名詞

### 2. 所有を表す人称代名詞

### 3. 目的語となる人称代名詞

なんだかちょっと複雑になってきましたね。

「人称代名詞」になぜ「所有」とか「目的」とかいった概念が出てくるのかというところがなんだかしっくりしません。

日本語には「てにをは」というものがあり、名詞に「てにをは」をつけることで、その名詞の文章中での役割がわかります。

ところが、英語には「てにをは」に該当するものがありません。そこで、代名詞に「所有」や「目的」といった概念を持たせ、それに相当する語形を用いることで、文章中の代名詞の役割を明確にし、意味が正確に通じるようにしているのです。それが英語の文章の組み立ての仕組みですね。

具体的な例を挙げてみましょう。たとえば、ここに「私」、「あなた」、「贈る」、「プレゼント」という4つの単語があったとします。

**私** **あなた** **贈る** **プレゼント**

でも、このままでは、お互いの単語の関係性がわかりません。勝手に想像してみると

1. 私はあなたにプレゼントを贈る
2. あなたは私にプレゼントを贈る
3. あなたは私をプレゼントに贈る
4. 私はあなたをプレゼントに贈る

などの解釈が成り立ちます。さすがに 3、4 はないにしても、

5. 私のプレゼントをあなたに贈る
6. あなたのプレゼントを私に贈る

という表現も成り立ちますね。

日本語では名詞の後に「てにをは」の助詞をつければいいのですが、英語では違う考え方をされていて、「てにをは」の部分をすでに組み込んだ短い語でその意味を表現しているのです。

[目次に戻る](#)

**「私」 = I (アイ) ではない**

つまり、「私」 = I (アイ) とか「あなた」 = you (ユー) ではないということなのです。

「I」はあくまでも「私は／が」であり、「you」は「あなたは／が」であるということです。

じゃあ「私の」という場合はどうなるかと言うと、後ほど説明しますが、「my」という一語を使い、「私に／を」という代わりに「me」という語を使うわけです。

まとめてみると、

## 「私」＝「I」ではない

主語になる「私」 → 「私 は／が」＝「I」

所有を表す「私」 → 「私 の」＝「my」

目的語になる「私」 → 「私 を／に」＝「me」

ということになります。

これが、「私」や「あなた」以外の人称代名詞にもすべて展開されるわけです。

言い換えれば、「人称代名詞」には、「主語」となるバージョン（私は／が）、「所有」を表すバージョン（私の）、「目的語」となるバージョン（私に／を）があるわけです。

[目次に戻る](#)

### 1. 主語となる人称代名詞

それではまず、その1つである「私は／が」などの「主語となる人称代名詞」を覚えましょう。表の項目の「単数」とは一人だけの場合、「複数」とは「私たち」のように二人以上いる場合という意味です。

	人称	単数	複数
自分のこと	<b>1人称</b> (私・私たちは／が)	<b>I</b> (アイ)	<b>we</b> (ウイ)
相手のこと	<b>2人称</b> (あなた・あなたたちは／が)	<b>you</b> (ユー)	<b>you</b> (ユー)
第三者男性	<b>3人称</b> (彼・彼らは／が)	<b>he</b> (ヒー)	<b>they</b> (ゼイ)
第三者女性	<b>3人称</b> (彼女・彼女らは／が)	<b>she</b> (シー)	<b>they</b> (ゼイ)
第三者人間以外	<b>3人称</b> (それ・それらは／が)	<b>it</b> (イット)	<b>they</b> (ゼイ)

というふうになります。

というわけで、まじまじと表をながめているうちに、注意深い人なら気づくかもしれないのが、「なぜ I だけ大文字になってるの？」ということです。他の代名詞に合わせて「i」じゃないの？という疑問ですね。

これも、決まりなのでそのまま覚えるしかないのですが、どうしても気になるという人は、[コラム2：なぜ「I」だけ大文字なの？](#)をご覧ください。

もう一つ、ちょっと耳慣れないのは「1人称」とか「2人称」といった言い方かもしれません。

これは、文法の解説ではよく登場する用語なので覚えておきましょう。理屈は簡単です。自分に一番近いのが「1人称」で、当然「私」ということになりますね。それが複数なら「私たち」となります。自分の次に近いのが「2人称」で、話をしている相手「あなた」（複数なら「あなたたち」）、最も遠いのが「3人称」で「彼／彼女」（複数なら彼ら／彼女ら）というわけです。

ところで、表の最後の項目に、「第三者人間以外」という欄がありますね。これは、便宜

上付け加えているのですが、少し説明したほうがいいでしょう。

人称代名詞と言いながら「なぜ人間以外？」という疑問がわいてくるかもしれません。これは、人間以外であっても「動作主」となりうる名詞があるからです。たとえば、人間であっても、性別のわからない（問題にしない）「赤ん坊」は it で置き換えるのが普通ですし、動物に対しても it を使います。

ですから、「3人称」と言った場合、「彼や彼女」（およびその複数）だけでなく、赤ん坊や動物、「もの」を表す名詞すべてが含まれるということです。

つまり、太郎さんや花子さんはもちろん、スマホもPCもテレビも机も、部屋も家もすべて「3人称」というわけです。

[目次に戻る](#)

## 2. 所有を表す人称代名詞

以上、人称代名詞の「主語」バージョンについて学習しましたが、次に、「私の」、「あなたの」といった人称代名詞の「所有」バージョンについて見てみましょう。

人称	単数	複数
1人称（私・私たちの）	my (マイ)	our (アウア)
2人称（あなた・あなたたちの）	your (ユア)	your (ユア)
3人称（彼・彼らの）	his (ヒズ)	their (ゼア)
3人称（彼女・彼女らの）	her (ハー)	their (ゼア)
3人称（それ・それらの）	its (イツ)	their (ゼア)

となります。

ところで、学校の英語の授業などで「所有格」という言葉聞いたことがあると思いますが、この「所有格」というのがこの人称代名詞の「所有」バージョンというわけです。

「所有格」以外にも「主格」とか「目的格」という言葉聞くこともあるでしょう。

ここで、気になるのは「格」という言葉ですね。きちんと「格」という概念を説明してからであればいいのですが、いきなり「所有格」などと言われても「『格』って何？」という疑問を持つこともあると思います。

ここでは簡単に説明しておきましょう。「格」とは、一言で言えば、「単語同士の関係」のことを言います。

言い換えれば、「主格」は「主語となる名詞」のことで、「目的格」というのは「目的語となる名詞」のことです。

「格について詳しく知りたい」という人は[コラム3：文法の「格」って何？](#)をご覧ください。

[目次に戻る](#)

### 3. 目的語となる人称代名詞

これまでに、「主語」となる人称代名詞と「所有」を表す人称代名詞を見てきました。ここでは、「私に／を」のような「目的語」となる人称代名詞について覚えましょう。

人称	単数	複数
1人称 (私・私たちに/を)	me (ミー)	us (アス)
2人称 (あなた・あなたたちに/を)	you (ユー)	you (ユー)
3人称 (彼・彼らに/を)	him (ヒム)	them (ゼム)
3人称 (彼女・彼女らに/を)	her (ハー)	them (ゼム)
3人称 (それ・それらに/を)	it (イット)	them (ゼム)

以上、主語となる人称代名詞（主格）、所有を表す人称代名詞（所有格）、目的語となる人称代名詞（目的格）について見てきました。

一度に覚えようとする大変ですので、後のセクションで、実際にいろんな文章を作っていきながら少しずつ慣れていきましょう。

[目次に戻る](#)

## 「ダミー主語」としての 代名詞 it

これまでのセクションでは、主格、所有格、目的格となる人称代名詞について学びましたが、ここでは、そのなかでも「it」に焦点を当ててみたいと思います。

なぜ焦点を当てるのかと言うと、実はこの it、「物」や赤ん坊、動物などを指すという働きの他に、ちょっと変わった役割があるのです。それは

### ダミー主語になる

ということです。

じゃあいったい「ダミー主語」の「ダミー」とは何かと言うと、英語で書くと dummy となり、「本物の替わり」ということになります。言い換えれば、「本物の主語」の替わりに it を使って「主語」にするということです。

「やっぱ、めんどくさいな、英語って」とか「なんでそんなことするの?」と思うかもしれませんね。そこが気になるという人は「[コラム4：なぜ『ダミー主語』なんてものがあるの?」](#)をご覧ください。

では、実際に、どういう場合に「ダミー主語」の it を使うのでしょうか?それは

1. **天気・天候を表現するとき**
2. **日付・曜日を表現するとき**
3. **時間を表現するとき**
4. **that 節や to 不定詞を使った構文で使われる**

というような場合です（ここでは覚える必要はありません）。

1. では「今日は寒い」というような天気の表現、2. では「今日は月曜日だ」といった日付や曜日の表現、3. では「今3時です」といった時間の表現ですね。こういう場合に it を主語として使うわけです。

また、4. では、「これを作ったのは私だとか、「英語を学習することは良いことだ」といった「～なのは～である」、「～することは～である」という「it is ... that ...」、「it is ... to ...」の構文で主語の替わりに使われます。

いずれにしろ、後のセクションで詳しく学びますので、ここでは「そういうものがあるのだ」とざっくり覚えておいてください。

[目次に戻る](#)



# Lesson 3 : リベンジ！英語の「動詞」

さて、この Lesson からはよいよ英語の文章を作っていきます。

英語の文章を作るためには「動詞」が必要です。そこで、ここでは、動詞について学んでみたいと思います。

[Lesson 1 のリベンジ！英語の「品詞」の「5. 動詞とは」](#)で、以下のような動詞の特徴を挙げました。

1. 動詞は主語によって形が変化する
2. 動詞は、現在・過去・未来によって形が変化する

[目次に戻る](#)

## 主語によって形が変わる

まず、「動詞は主語によって形が変化する」という特徴について見てみましょう。動詞を使いこなすためには、実際にどのように変化するかをつかむ必要があります。

一番手っ取り早いのは、実際に文章を作ってみることですね。[Lesson 2 で学んだ人称代名詞](#)を使って

**私は眠る。**

という文章を作ってみましょう。「私は」については[主語となる人称代名詞](#)のところから「I」を選べばいいですね。次に「眠る」という動詞ですが、そう、「**sleep**（スリープ）」という単語がありましたね。この「I」と「sleep」を組み合わせると

**「主語」 + 「動詞」**

の順番で単語を並べます。すると

## I sleep.

(アイ・スリープ)「私は眠る。」

となります。簡単ですね。では

**あなたは眠る。**

はどうでしょう？上と同じように、「あなた**は**」という主語となる人称代名詞を選びばいいですね。「you」を選びます。文章の頭は大文字になりますので、you の y を大文字にして You とします。

## You sleep.

(ユー・スリープ)「あなたは眠る。」

シンプルですね。同じように

## We sleep.

(ウィ・スリープ)

**私たちは眠る。**

## They sleep.

(ゼイ・スリープ)

**彼らは眠る。**

とどんどん文章が作れます。簡単ですね。これじゃまさにどんどん「英語リベンジ」できそうです。ついでに、「彼は眠る」、「彼女は眠る」、「それは眠る」も…

## He sleep.—

**She sleep.**

**It sleep.**

といきたいところですが、英語もそこまで甘くはありません。そのまま sleep を使うというわけにはいかないのです。

正解は

**He sleeps.**

(ヒー・スリープス)

彼は眠る。

**She sleeps.**

(シー・スリープス)

彼女は眠る。

**It sleeps.**

(イット・スリープス)

それは眠る。

となります。

そう、I や you、we、they は「sleep」なのに、he、she、it は「sleeps」と最後に「s」がつくのです。

記憶にある人もいると思いますが、学校の英語ではこれを「サンタンゲンのエス」などと呼んでいましたよね。どこかの国の料理の名前にあったような（サムゲタン？）言葉です

が、「サントゲン」とは「三単現」と書き、「3人称単数現在形」の略なのです。

つまり、he、she、it は「3人称単数」の人称代名詞であり、それが主語になる場合の動詞の現在形には「s」の語尾がつくということなのです。

また、he、she、it に置き換えられる名詞はすべて「3人称単数」の名詞となるので、その名詞を主語にした場合も同じ変化をします。

## Tom sleeps.

(トム・スリープス)

トムは眠る。

## The dog sleeps.

(ざ・ドッグ・スリープス)

その犬は眠る。

こういった「変化」のことを専門的には「活用」と呼びます。その「活用」を表にまとめてみましょう。

動詞「sleep」の活用			
1人称	単数	(私は/が) : I (アイ)	sleep
	複数	(私たちは/が) : we (ウイ)	sleep
2人称	単数	(あなたは/が) : you (ユー)	sleep
	複数	(あなたたちは/が) : you (ユー)	sleep
3人称	単数	(彼は/が) : he (ヒー) (彼女は/が) : she (シー) (それは/が) : it (イット)	sleeps
	複数	(彼らは/が) : they (ゼイ) (彼女らは/が) : they (ゼイ) (それらは/が) : they (ゼイ)	sleep

となります。

いかがでしょうか？主語に応じて形が変化するとは言え、わずか2種類ですね。慣れれば問題ない程度と言えるでしょう。

しかし、なかには、「慣れ」とかそういう問題ではなく、**なぜ3人称単数現在だけが変化するのか**納得できないという人もいるかもしれません。第一、3人称単数現在だけ違うものを使う意味がありませんね。同感です。興味のある人は、[コラム5：なぜ3人称単数現在の動詞だけ「s」をつけるの？](#)をご覧ください。

[目次に戻る](#)

## いろんな動詞と3人称単数現在活用

前のセクションでは、sleep という動詞を使って文章を作りました。sleep は主語が3人称単数であれば sleeps というふうに語尾に「s」がつくということでしたね。

では、それ以外の動詞ではどうなのでしょう？もちろん、動詞は sleep 以外にもたくさんありますから、いろんな動詞を使って文章を作ってみたいですね。

今度は

**私は観る。彼は観る。**

という文章を作りましょう。「観る」って何を観るんですか？という疑問もあるかと思いますが、ここでは目的語となる「何？」は置いておいて、とにかく「観る」ということで納得しておきましょう。「観る」には「**watch (ウォッチ)**」という動詞を使います。

主語となる人称代名詞から「私**は**」、「彼**は**」の代名詞を選んで

**I watch. He ~~watehs~~.**

としたいところですが、残念ながら、「watehs」は間違いです。

「え？he は3人称単数現在だから語尾に『-s』でしょ？」と思うかもしれませんが、やはり、そこまで単純ではありません。正解は

**I watch. He watches.**

(アイ・ウォッチ。ヒー・ウォッチイズ。)**「私は観る。彼は観る。」**

と語尾に「-es」がつくのです。

「なんだかなー」と思いますよね。実はこういうルールがあるのです。

**-ch, -s, -sh, -x, -z で終わる動詞には、語尾に「-es」をつける**

「え？なぜ？」と思うかもしれません。ではちょっと発音してみてください。

**He watchs.**

**「ヒー・ウオツチス」**

まあ、発音できなくはないですが、「チ」と「ス」の間がちょっと忙しいですね。それに対して

**He watches.**

**「ヒー・ウオツチズ」**

「チス」よりも「チズ」のほうが落ち着いた感じがありませんか？発音しやすいからですね。「-es」の語尾で終わったときは、発音も「ス」ではなく「ズ」と濁ります。

では、別の動詞を見てみましょう。次のような文章を作ります。

**あなたはトライする。彼女はトライする。**

主語となる人称代名詞から「あなたは」、「彼女は」の代名詞を選んで、「トライする」には try (トライ) という単語を使います。

**You try. She ~~trys~~.**

としたいところですが、残念ながら「trys」は間違いです。

「やっぱりね、そんなことだろうと思った」という声も聞こえてきそうですが、正解は

**You try. She tries.**

(ユー・トライ。シー・トライズ。)  
「あなたはトライする。彼女はトライする。」

となります。つまり

### 子音 + -y で終わる動詞は「y」を「i」に変えて「-es」をつける

というルールがあるのです。

めんどくさいですね。そう言えば学校の先生が口癖のように「『y』を『i』に変えて『-es』」と言っていたのを思い出します。「覚えているけど、何のことだったかはよく覚えていない」という人もいるかもしれません。

ではついでに、これはどうでしょう？

### 私はプレーする。彼はプレーする。

ここの「プレー」はゲームなどをやったり、楽器を演奏したりするときの「プレー」だと考えてください。play (プレイ) という動詞がありましたね。ということで、

### I play. He plaies.

としたいところですが、またしても、「plaies」は間違いです。正解は

### I play. He plays.

(アイ・プレイ。ヒー・プレイズ。)  
「私はプレーする。彼はプレーする。」

と「s」をつけるだけなのです。

### 母音 + -y で終わる動詞には「-s」をつける

というルールなのです。

「やっぱり英語、もうダメ、さいなら～」と言いたい気持ち、よくわかります。「さいなら」してしまう前に、よかったら、[コラム6：なぜ「y」を「i」に変えなきゃならないの？](#)をご覧ください。



というわけで、いろんな3人称単数現在形を見てきましたが、最後に、この文章を作ってみましょう。

**私たちは持っている。彼女は持っている。**

ここでも「何を」持っているのかは置いておいて、とにかく「〇〇は持っている」という文章を作りましょう。「持っている」には have (**ハヴ**) という単語を使います。

**We have. She haves.**

「え？また？」と言われそうですが、have という動詞の3人称単数現在形は「例外」で、has (**ハズ**) という変化をします。

**We have. She has.**

(ウィ・**ハヴ**。シー・**ハズ**。)  
「私たちは持っている。彼女は持っている。」

have はよく使う単語なので「理屈抜き」で覚えている人も多いと思いますが、「なぜhavesじゃなくてhasなのか」という簡単な説明を加えておきましょう。

[コラム5：なぜ3人称単数現在の動詞だけ「s」をつけるの？](#)でも触れていますが、昔の英語には人称ごとに異なる動詞の語尾変化があったのです。have はかつてhaven という形をしていましたが、その3人称はhaveth またはhath で、それが変化してhas になったと考えることができます。

では、3人称単数現在の動詞活用のルールをまとめておきましょう。

ルール	語尾の発音
1. <b>-ch, -s, -sh, -x, -z</b> で終わる動詞には、語尾に「-es」をつける	<b>[-iz]</b> (-イズ)
2. 子音+ <b>-y</b> で終わる動詞は「y」を「i」に変えて「-es」をつける	<b>[-z]</b> (-ズ)
3. 母音+ <b>-y</b> で終わる動詞には「-s」をつける	<b>[-z]</b> (-ズ)
4. <b>have</b> の場合は <b>has</b> になる	<b>[-z]</b> (-ズ)
5. 上記以外の動詞には「 <u>-s</u> 」をつける	
1) <b>p, k, f, t</b> の発音で終わる単語	<b>[-s]</b> (-ス)
2) それ以外の発音で終わる単語	<b>[-z]</b> (-ズ)

というわけですね。

後は、実際に、いろんな動詞で練習して覚えるだけです。

[目次に戻る](#)

## 現在・未来・過去によって形が違う

前のセクションでは、「主語によって形が変わる」という動詞の特徴について見てきました。

ここでは、2つ目の特徴である、「現在、未来、過去に応じて形が変わる」という特徴について学んでいきたいと思います。

言い換えれば、英語の動詞には、「現在形」、「過去形」、「未来形」があるということなのですが、現在のことを話す場合は「現在形」を使い、過去のことになれば「過去形」、未

来のことは「未来形」を使うというわけですね。

なんだか、「わかったような、わからないような」説明ですが、要は、現在、過去、未来をどう表現するかということです。

日本語なら動詞に「～する」、「～した」、「～するだろう」などの語尾をつけることで「現在」、「過去」、「未来」を表すことができるのですが、英語の場合、動詞そのものの形が変化することでそれを表現するのです。

ちなみに、文法では、「現在」、「過去」、「未来」といった時間的な種類のことを「時制（じせい）」と言いますが、ここでは、そういった時制によって動詞がどう変化するのかを勉強していきましょう。

[目次に戻る](#)

## 動詞の現在形

現在のことを語るときに使う動詞が「現在形」ですが、別にむずかしく考える必要はありません。前のセクションで作った文章を思い出してみましょう。

**I/You/We/They sleep.**

私／あなた／私たち／彼らは眠る。

**He/She/It/Tom/The dog sleeps.**

彼／彼女／それ／トム／その犬は眠る。

**I watch. He watches.**

私は観る。彼は観る。

**You try. She tries.**

あなたはトライする。彼女はトライする。

**I play. He plays.**

私はプレーする。彼はプレーする。

これらの文章すべてが「現在」という時制を表す文章であり、使われている動詞はすべて「現在形」です。そして、下線は「3人称単数現在形」を表すということでしたね。

このように、英語の「現在」という時制は、主語に応じて

### 1. 動詞の原形（辞書に載っている形）

### 2. 3人称単数現在形の活用

を使って表す形であると言えます。

上の「**原形**（げんけい）」という言葉もよく出てきますが、3人称単数現在形の「-s」をつけたりしていない**プレーンな状態（デフォルト）**の動詞という意味です。英語の辞書を引いたときに「見出し」として出てくる形のことですね。

[目次に戻る](#)

## 動詞の未来形

次に「未来」という時制について見てみましょう。

英語では「未来形」は非常に簡単です。未来を表す**助動詞** will (**ウィル**) を使って

### will + 動詞の原形

で表すことができます。

現在形のように「3人称単数」だけ語尾を変えるといたためんなような手続きもありません。どんどん文章が作れます。

試しにいくつかやってみましょう。

**彼は来るだろう。**

**彼らは来るだろう。**

「来る」には come (**カム**) という動詞を使います。 主語となる人称代名詞から「彼は」、  
「彼らは」の代名詞を選んで

**He will come.**

(**ヒー**・**ウィル**・**カム**。)「彼は来るだろう。」

**They will come.**

(**ゼイ**・**ウィル**・**カム**。)「彼らは来るだろう。」

簡単ですね。では今度は

**私は行くだろう。**

**彼女は行くだろう。**

「行く」には go (**ゴウ**) を使います。同様に代名詞を選んで

**I will go.**

(**アイ**・**ウィル**・**ゴウ**。)「私は行くだろう。」

**She will go.**

(**シー**・**ウィル**・**ゴウ**。)「彼女は行くだろう。」

簡単すぎますね。では今度は連発花火で行きます。

あなたは話すだろう。

彼女は食べるだろう。

彼らは飲むだろう。

私は勉強するだろう。

彼は歩くだろう。

私たちは走るだろう。

「話す」には speak (スピーク)、「食べる」は eat (イート)、「飲む」は drink (ドリンク)、「勉強する」は study (スタディ)、「歩く」は walk (ウォーク)、「走る」は run (ラン) を使しましょう。

## You will speak.

(ユー・ウィル・スピーク。)「あなたは話すだろう。」

## She will eat.

(シー・ウィル・イート。)「彼女は食べるだろう。」

## They will drink.

(ゼイ・ウィル・ドリンク。)「彼らは飲むだろう。」

## I will study.

(アイ・ウィル・スタディ。)「私は勉強するだろう。」

## He will walk.

(ヒー・ウィル・ウォーク。)「彼は歩くだろう。」

## We will run.

(ウィ・ウィル・ラン。)  
「私たちは走るだろう。」

やめられませんね。もう、未来形は完全制覇ですね。

[目次に戻る](#)

### 動詞の過去形

さて、ちょっとめんどろな「現在形」、単純明快な「未来形」でしたが、「過去」ともなると、やはりちょっと複雑だったりします（まあ、人生そんなものなのかもしれませんが…）。

ではさっそく、どう複雑なのかをざっとまとめてみると次のようになります。

1. 動詞の形が変化して過去形を作る
2. 単純な「過去形」の他に「過去分詞」がある
3. 動詞の過去形の変化には2種類ある

1つずつ説明していきましょう。

[目次に戻る](#)

### 英語の過去形の考え方

まず、「1. 動詞の形が変化して過去形を作る」というのは、日本語のように

#### 動詞+「した、しました」という語尾

をつけて過去であることを表すのではなく

#### 「動詞の意味+過去の意味が合体した」1つの単語

を使うことで過去形を作るのです。

たとえば、「行く」という意味の動詞があります。

**「行く」という現在形（原形） → go**

**「行った」という過去形 → went**

つまり、「行く」という意味には go (ゴウ) を使い、「行った」という過去には went (ウエント) という変化形を使うわけです。

そう言えば、「人称代名詞」のところでもありましたよね。

日本語では「私」などの代名詞に「てにをは」の語尾をつけて「私は、私の」などを表現しますが、英語では、「私」 = I ではなく、「私は」が「I」、「私の」は「my」というふう

**日本語は単語 + 語尾 → 英語では丸ごと込みで1つの単語**

を使うという違いがあるのです。

[目次に戻る](#)

## 「過去分詞」って何？

次に、2. の「単純な『過去形』の他に『過去分詞』がある」について学んでみましょう。「え、過去分詞？そんなのあったっけ？」という人もいるかもしれませんが、大丈夫です。ここで覚えればいいのです。

「過去形」はわかるけど、「過去分詞」って何？という疑問がわきますね。文字面にとらわれる必要はありません。「過去分詞」とはどういうことかということ

**「過去に行った動作が完了している」**

ということを表す動詞の形なのです。



たとえば、1. のところで「行く」という動詞を取り上げました。「現在形」は go、「過去形」は went という形になりましたが、ここに「過去分詞」を付け加えてみましょう。「過去分詞」は gone (gone) となります。

**「行く」という現在形（原形） → go**

**「行った」という過去形 → went**

**「行ってしまった」という過去分詞形 → gone**

「行った」というのは単純にその過去の事実を述べるだけの意味ですが、「行ってしまった」となると「その動作が完了している」ことを表しているのです。

英語などのヨーロッパ系言語は、「過去」にこだわる言語です。それが単純に過去の事実を表すだけの過去なのか、継続している過去なのか、完了している過去なのかといったことを大事にするのです。英語はまだ単純なほうですが、シンプルな「過去」と完了を表す「過去分詞」があると覚えておきましょう。

でも、実はこの「過去分詞」、けっこう便利なヤツなんです。どう便利かと言うと、これを使って

**a) 現在完了形の文章を作れる**

**b) 受け身の文章が作れる**

**c) 形容詞の意味を表す**

ということができるようです。

a) の「現在完了形」とは、後の Lesson で学びますが、「今の時点からみて動作が完了している」ことを表します。たとえば、「私はもう宿題は終えた」というような場合ですね。ただ単純に「宿題をやった」という過去の事実ではなく、「宿題を終えた状態である」というわけです。

次に b) の「受け身」です。これも後の Lesson で学びますが、「この絵はゴッホによって

書かれた」というような「～された」という言い回しのことです。

c) の「形容詞として使える」というのは、b) にも関連していますが、「～された〇〇」というときの「～された」という部分がそうです。たとえば、「料理された卵」という場合、a cooked egg (ア・クックト・エッグ) と表現しますが、このときの cooked というのが動詞 cook の過去分詞形なのです。「なぜ形容詞なのか？」というと、こういった「～された」という意味の語は、英語の文法では「形容詞」という扱いになるからです。

[目次に戻る](#)

## 「規則動詞」と「不規則動詞」

次の 3. の「動詞の過去形の変化には2種類ある」ですが、この2種類というのは、「規則動詞」と「不規則動詞」と呼ばれるものがあるということです。

**規則動詞：過去形・過去分詞の変化が規則的（ルールに沿って変化）**

**不規則動詞：過去形・過去分詞の変化が規則的ではない（ルールがない）**

「規則動詞」とは、一定のルールに基づいて、過去・過去分詞の語形が変化する動詞のことで、「不規則動詞」とは、その語形の変化がルールに基づいていない動詞のことです。

どの動詞が規則動詞で、どの動詞が不規則動詞かということはすでに決まっていて、上の例で取り上げた go と went、gone は、「不規則動詞」になります。

[目次に戻る](#)

## 英語の「規則動詞」とは？

ではまず、「規則動詞」について説明しましょう。

規則動詞とは、一定のルールによって過去形、過去分詞形が作れるような動詞のことでしたね。そのルールとは、以下のようなルールです。

## 動詞の原形 + -ed

そんな動詞にはどんなものがあるのか、実際に例を挙げましょう。

たとえば start (スタート)「始める、開始する」という単語がそうです。これを「過去」、「過去分詞」の順に活用させてみます。

### start -- started -- started

(スタート -- スターティド -- スターティド)

となります。kill (キル)「殺す」という単語もそうです。

### kill -- killed -- killed

(キル -- キルド -- キルド)

なるほど、簡単ですね。

次に jump (ジャンプ)「ジャンプする」という規則動詞です。

### jump -- jumped -- jumped

(ジャンプ -- ジャンプト -- ジャンプト)

実にシンプルです。単語の後ろに -ed をつけるだけですね。

しかし… そうです、目ざとい人は気づいたかもしれませんが、「-ed」の発音が微妙に違いますよね。

「なんだ、ちっとも規則的じゃないじゃないか」ということになってしましますが、実際に発音してみると、その理由が納得できるかもしれません。

たとえば、started なら「スタートティド」が一番発音しやすいんですね。これを「ド」や「ト」で発音すると、「スタートド」、「スタートト」なんてことになり、なんだか「おっ

とつと」みたいな響きになります。

同様に、killed を「**キ**リイド」とか「**キ**ルト」というのも別の単語のように聞こえてしまいます。jumped も「**ジャン**ピイド」や「**ジャン**ブド」より「**ジャン**プト」としたほうがスムーズな感じがします。

とは言え、そのつど、発音して決めるわけにもいきませんので、まとめてみると次のようになります。

規則動詞の語尾の発音	
t, d の発音で終わる動詞	[-id] (-イド) / started
l, v, n, m, r, b, v, g, w, y, z の発音または母音で終わる動詞	[-d] (-ド) / killed
p, k, s, ch, sh, f, x, h の発音で終わる動詞	[-t] (-ト) / jumped

というわけです。

上の例を当てはめてみると、たとえば、start は最後の発音が [t] で終わっていますので（文字ではなく「発音」が [t] で終わるという意味）、[-id] の発音になるわけです。

発音がわかったところで、もう少し活用を続けてみましょう。

今度は、agree (アグ**リ**ー)「賛成する」、like (ラ**イ**ク)「好む」という規則動詞です。

**agree -- agreed -- agreed**

(アグ**リ**ー -- アグ**リ**ード -- アグ**リ**ード)

**like -- liked -- liked**

(ライク -- ライクト -- ライクト)

発音的にも「**リ** (r+ イー)」で終わっている agree は「- ド」になり、「ク (k)」で終わっている like は「- ト」になるわけです。

ところが… よく見ると、「-ed」をつけるはずなのに「-d」しかついていない!ということに気づいた人もいますね。

「どこが規則的なんだ!」という気持ちはよくわかります。なぜ「-d」しかついていないのか?と言うと、そうです、語尾がすでに「-e」で終わっているからです。やはり物事は「節約」が望ましいように、英語でも、すでについているものにわざわざつける必要がないわけです。

もう少し動詞の活用をやってみましょう。「まだ例外があるのか?」と思った人はなかなか鋭いですね。その通りです。今度は、stop (ス**ト**ップ)「止まる」、plan (プ**ラ**ン)「計画する」という規則動詞です。

## stop -- stopped -- stopped

(ス**ト**ップ -- ス**ト**ップト -- ス**ト**ップト)

## plan -- planned -- planned

(プ**ラ**ン -- プ**ラ**ンド -- プ**ラ**ンド)

-ed だけでなく、-ped とか -ned とか、「それって何?」ということになりますね。「やっぱ、英語ダメだ。さいなら～」という前にちょっと深呼吸。実はこういうルールなのです。

### 「母音」 + 「子音」で終わる動詞には「子音」を重ねて「-ed」をつける

stop では、母音の文字「o」 + 子音の文字「p」で終わっているのもう一度子音の文字「p」を重ねてから「-ed」をつけ、plan では、母音の文字「a」 + 子音の文字「n」で終わっているのもう一度子音の文字「n」を重ねてから「-ed」をつけるわけなのです。

その理由はと言うと、やはり発音しやすいからですね。「ストップ」というより「ストップ」トと言ったほうが歯切れも良くスムーズです。「ブランド」ドというより「ブランド」ッドというほうがメリハリが効いている感じがします。

確かに、一度に覚えようとすれば大変なのですが、そのつど辞書などで確認しながら使っていくうちにだんだん身についてきますので、焦らずあきらめずに学習を続けていきましょう。

最後にもう一つ、規則動詞の活用をやってみましょう。「まだあるのか？」と思うかもしれませんが、これはちょっとなじみがあるかもしれません。try (トライ)「トライする」、play (プレイ)「プレーする」という2つの規則動詞を変化させてみます。

## try -- tried -- tried

(トライ -- トライド -- トライド)

## play -- played -- played

(プレイ -- プレイド -- プレイド)

あれ？どっかで見たような… そうです、ありましたね。「[3人称単数現在](#)」の語尾「-s」をつけるときのルールと似ていますね。つまり

**子音 + -y で終わる動詞は「y」を「i」に変えて「-ed」をつける**

**母音 + -y で終わる動詞はそのまま「-ed」をつける**

というわけです。

では、まとめとして、語尾スペルの変化についてのルールをまとめておきましょう。

## 規則動詞の語尾のつけ方

語尾が「-e」で終わる動詞	「-d」をつける
「母音」 + 「子音」で終わる動詞	子音を重ねて「-ed」をつける
子音 + -y で終わる動詞	「y」を「i」に変えて「-ed」をつける
母音 + -y で終わる動詞	そのまま「-ed」をつける
それ以外の動詞	そのまま「-ed」をつける

ということになります。

[目次に戻る](#)

## 英語の「不規則動詞」とは？

前のセクションでは、規則的な変化をする動詞について見てきました。「規則動詞」と言いながらかなり複雑だったなという印象もあるかもしれませんね。

そういう意味では、「不規則動詞」はそのまま覚えるしかないのが、単純かもしれません。もちろん覚えるのは大変ですが…。

ここでは、いくつか不規則動詞の例を挙げてみましょう。

まず、現在形から過去、過去分詞形まですべて同じという「うれしい動詞」もあります。

**cut -- cut -- cut**

(**カ**ット -- **カ**ット -- **カ**ット)「切る、カットする」

## hit -- hit -- hit

(ヒット -- ヒット -- ヒット) 「打つ、ヒットする」

## put -- put -- put

(プット -- プット -- プット) 「置く」

## set -- set -- set

(セット -- セット -- セット) 「セットする、設定する」

みんなこうだったらいいのですが、残念ながらそういうわけにはいきません。大半の不規則動詞はそのつど覚える必要があります。

前のほうで挙げた go (ゴウ) 「行く」もそうでしたね。

## go -- went -- gone

(ゴウ -- ウェント -- ゴーン)

それ以外にも、「未来形」のところでも取り上げた speak (スピーク) 「話す」、eat (イート) 「食べる」、drink (ドリンク) 「飲む」、run (ラン) 「走る」も不規則動詞です。

## speak -- spoke -- spoken

(スピーク -- スポーク -- スポウクン)

## eat -- ate -- eaten

(イート -- エイト -- イートン)

## drink -- drank -- drunk

(ドリンク -- ドランク -- ドランク)



## run -- ran -- run

(ラン -- ラン -- ラン)

というわけですね。

このセクションでは、不規則動詞について学びました。

英語の不規則動詞は上で紹介した以外にもたくさんあります。巻末の[付録](#)のところで、[主な不規則動詞のリスト](#)を挙げています。一度に覚える必要はありませんので、必要なときにこのリストで確認してください。

それでは、せっかく過去形を学んだのですから、前のセクションで覚えた規則動詞も含めて、過去形の文章を作ってみましょう。

**私はトライした。**

**あなたは食べた。**

**彼女は走った。**

**彼らは飲んだ。**

**私たちは話した。**

**彼はプレーした。**

では、以下答です。

**I tried.**

(アイ・トライド。)  
「私はトライした。」

**You ate.**

(ユー・**E**イト。)「あなたは食べた。」

## She ran.

(シー・**R**ン。)「彼女は走った。」

## They drank.

(ゼイ・**D**ランク。)「彼らは飲んだ。」

## We spoke.

(ウィ・**S**ポウク。)「私たちは話した。」

## He played.

(ヒー・**P**レイド。)「彼はプレーした。」

ということになりますね。

いかがでしたか？「現在形」のように「3人称単数現在」といった活用もないので、過去形の形さえ覚えてしまえば、どんな主語が来ても同じ使う動詞の形は同じです。

それでも、みんな規則動詞にしたらいいいのに、なぜ不規則動詞なんてものがあるの？という疑問もわいてくるかもしれません。そんな人は[コラム7：なぜ規則動詞と不規則動詞があるの？](#)をご覧ください。

最後に、ある動詞が規則動詞か不規則動詞かというのはどうやって確認するかですね。それは、残念ながら辞書を引くしかありません。各動詞の始めのところに、その活用形が書かれていますので、覚えるまでは辞書を引いて確認するようにしましょう。

[目次に戻る](#)

# Lesson 4 : リベンジ！英語の「be 動詞」

さて、前のセクションでは「〇〇する」というときに使ういろんな動詞について学んできました。

しかし、動詞には、名詞の動作を表すものばかりでなく、「A=B」、「〇〇は～である・いる・存在する」という状態を表すときに使う特別な動詞があります。そんな動詞のことを「**be 動詞**（びーどうし）」と呼んでいます。

ところが、この「be 動詞」、他の動詞に比べるとちょっとクセがあります。どんなクセかと言うと、主語によって姿を変えるわけです。

これまで学んだ一般動詞では、形が変わるのは「3人称単数現在」だけでしたが、be 動詞ではそれよりも若干複雑になります。

こういった変化を文法では「活用」と言うんですね。そこで、どう活用するかを詳しく見ていきましょう。

[目次に戻る](#)

## be 動詞の現在形

ではまず、be 動詞の現在形について学習しましょう。

be 動詞の現在形活用

	原形	be (ビー)
1人称単数	主語が <b>I</b> 「私」の場合	<b>am</b> (アム)
1人称複数	主語が <b>we</b> 「私たち」の場合	<b>are</b> (アー)
2人称単数・複数	主語が <b>you</b> 「あなた(たち)」の場合	<b>are</b> (アー)
3人称単数	主語が <b>he/she/it</b> 「彼/彼女/それ」もしくは <b>he/she/it</b> で置き換えられる名詞	<b>is</b> (イズ)
3人称複数	主語が <b>they</b> 「彼・彼女ら/それら」もしくは <b>they</b> で置き換えられる名詞	<b>are</b> (アー)

というふうに、何を主語に持ってくるかによって、原形である「be」が変化していくのです。

「あ、そうですか」とすんなり納得できる人はいいのですが、「なぜそこまで変化させる必要があるの?」という疑問がわいてくる人もいるかもしれません。

「言語だから仕方ない」と言ってしまうかもしれませんが、その不ぞろい感が気になる人は、[「コラム8：なぜ be 動詞は主語によって違うの?」](#)をご覧ください。

では、実際に be 動詞を使ってどんな表現ができるのかを見てみましょう。

まず次の文章です。

**私は背が高い。**

上の活用表から「私は」が主語になる場合の be 動詞の活用形を選びます。「am」という

語になりますね。「背が高い」という部分には、tall（**トール**）という**形容詞**を使います。

## **I am tall.**

(**アイ**・**アム**・**トール**)「私は背が高い。」

となりますね。

ここで、この「I am」ですが、何か特別な効果を出そうとするときをのぞいて、「**I'm**」というふうに「'」を使って短縮形で表記するのが普通です。この「上からのコンマ」のような記号を「**アポストロフィ**」と言います。

## **I'm tall.**

(**アイム**・**トール**)「私は背が高い。」

というわけですね。

次の例文です。

### **私はここにいる。**

「ここに」というのは here (**ヒア**) という**副詞**を使います。

## **I'm here.**

(**アイム**・**ヒア**)「私はここにいる。」

となりますね。

次の文章はこれです。

### **あなたは美しい。**

上の活用表から「あなたは」が主語になる場合の be 動詞の活用形を選びます。「are」という語になりますね。「美しい」には、beautiful (ビューティフル) という形容詞を使います。

## You are beautiful.

(ユー・アー・ビューティフル)「あなたは美しい。」

となりますね。

ここでも、上の「I am」と同じように「アポストロフィ」を使って「You're (ユアー)」と短縮形にすることができますが、「I'm」ほどは一般的ではありません。くだけた文章や会話を表記するときなどに使います。

次の文章です。

### 彼は親切だ。

同じく、上の活用表から「彼は」が主語になる場合の be 動詞の活用形を選びます。「is」という語になりますね。「親切だ」には、kind (カインド) という形容詞を使います。

## He is kind.

(ヒー・イズ・カインド)「彼は親切だ。」

ということですね。

この「He is」も「アポストロフィ」を使って「He's (ヒーズ)」と短縮形にすることができますが、「I'm」ほどは一般的ではありません。

では連発花火で行きます。

### 私たちは若い。

彼女は正しい。

それは古い。

彼らは意地悪だ。

あなたたちは間違っている。

それらは新しい。

「若い」は young (ヤング)、「正しい」は right (ライト)、「古い」は old (オールド)、「意地悪だ」は mean (ミーン)、「間違っている」は wrong (rong)、「新しい」は new (ニュー) を使しましょう。

**We are young.**

(ウィ・アー・ヤング)「私たちは若い。」

**She is right.**

(シー・イズ・ライト)「彼女は正しい。」

**It is old.**

(イティイズ・オールド)「それは古い。」

**They are mean.**

(ゼイ・アー・ミーン)「彼らは意地悪だ。」

**You are wrong.**

(ユー・アー・rong)「あなたたちは間違っている。」

**They are new.**

(ゼイ・アー・ニュー)「それらは新しい。」

となりますね。正しく be 動詞の活用を使えたでしょうか？

また、ここでも、「アポストロフィ」を使って、それぞれ

**We're young.**

(ウィアー・ヤング)「私たちは若い。」

**She's right.**

(シーズ・ライト)「彼女は正しい。」

**It's old.**

(イツ・オールド)「それは古い。」

**They're mean.**

(ゼイアー・ミーン)「彼らは意地悪だ。」

**You're wrong.**

(ユアー・wrong)「あなたたちは間違っている。」

**They're new.**

(ゼイアー・ニュー)「それらは新しい。」

と短縮形にすることができますが、「I'm」ほどは一般的ではありません。会話的な文章を表記するときに使います。

[目次に戻る](#)



## be 動詞の未来形

次に、be 動詞の未来形について見てみましょう。

先のセクションの[動詞の未来形](#)の内容を思い出してください。英語の「未来形」は未来を表す[助動詞](#) will (ウィル) を使って

### will + 動詞の原形

で表すことができましたね。

be 動詞にもこの図式をそのまま当てはめることができます。つまり、be 動詞の原形は文字通り「be」ですから

### will + be = will be

となり、どんな主語が来てもすべて「will be」(ウィルビー) で表現できるわけですね。

さっそく、次の文章を作ってみましょう。

私たちは遅くなるだろう。

**We will be late.**

(ウィ・ウィルビー・レイト)

次はこれです。

彼はそこにいるだろう。

「そこに」には、there (ゼア) という[副詞](#)を使います。

**He will be there.**

(ヒー・ウィルビー・ゼア)

となります。

be 動詞の未来形も簡単ですね。

[目次に戻る](#)

## be 動詞の過去形

次に、be 動詞の過去形を見てみましょう。

さすがに、過去形は未来形ほど単純ではありませんが、現在形に比べるとシンプルになっています。

その活用形は以下のようになります。

be 動詞の過去形活用		
原形 : <b>be</b>	現在形	過去形
1 人称単数 : <b>I</b>	<b>am</b>	<b>was</b> (ワズ)
1 人称複数 : <b>we</b>	<b>are</b>	<b>were</b> (ワー)
2 人称単数・複数 : <b>you</b>	<b>are</b>	<b>were</b> (ワー)
3 人称単数 : <b>he/she/it</b> もしくは <b>he/she/it</b> で置き換えられる名詞	<b>is</b>	<b>was</b> (ワズ)
3 人称複数 : <b>they</b> もしくは <b>they</b> で置き換えられる名詞	<b>are</b>	<b>were</b> (ワー)

ではさっそく、文章を作ってみましょう。

**私たちはみんな若かった。**

「みんな」には all (オール) という単語を使い、「若かった」には先に登場した young (ヤング) を使います。

**We all were young.**

(ウィ・オール・ワー・ヤング)「私たちはみんな若かった。」

となります。

では次の文章です。

**彼はひとりだった。**

「ひとりである」には alone (アローン) という形容詞を使います。

**He was alone.**

(ヒーワズ・アローン)「彼はひとりだった。」

ですね。

では例によって連発花火を上げてみましょう。

**あなたたちは優しかった。**

**彼女らは強かった。**

**それは(値段が)高かった。**

**私はうれしかった。**

あなたは怒っていた。

それらは新鮮だった。

「優しい」には gentle (ジエントル)、「強い」には strong (スト**ロ**ング)、「値段が高い」は expensive (エクスペンスイヴ)、「うれしい」は glad (グ**ラ**ッド)、「怒っている」は angry (ア**ン**グリィ)、「新鮮である」は fresh (フレ**ッ**シュ) を使いましょう。

**You were gentle.**

(ユーワー・ジエントル)「あなたたちは優しくかった。」

**They were strong.**

(ゼイワー・スト**ロ**ング)「彼女らは強かった。」

**It was expensive.**

(イットワズ・エクスペンスイヴ)「それは(値段が)高かった。」

**I was glad.**

(アイワズ・グ**ラ**ッド)「私はうれしかった。」

**You were angry.**

(ユーワー・ア**ン**グリィ)「あなたは怒っていた。」

**They were fresh.**

(ゼイワー・フレ**ッ**シュ)「それらは新鮮だった。」

となりますね。be 動詞の過去形を正しく使うことができましたか？

[目次に戻る](#)

## be 動詞を使った決まり文句

以上、be 動詞の現在、未来、過去形について学んできましたが、実はこの be 動詞を使っている便利な表現ができるのです。

たとえば、「寒い（暑い）」とか、「何月何日、何曜日だ」、「何時何分だ」、「私は何歳だ」といった決まり文句を覚えることで、いろんな文章が作れるようになります。まさに、日常会話ができるようになる一歩なのです。

一度に覚えようとする必要はありません。少しずつ、実際に文章を作ることで慣れていくうちにいつの間にか身につけていきます。

では、さっそく見てみましょう。

[目次に戻る](#)

## 天気・気候の表現

ここでは、be 動詞を使って天気や気候の言い方を学んでみましょう。

さっそく次の文章を作ってみましょう。

**寒い。**

ちょっとそっけない日本語ですが、説明をシンプルにするために短くしておきましょう。「寒い」は cold (コールド) という形容詞を使います。

**Cold.**

…だけではちょっと文章としては不完全ですね。第一主語がありません。

英語はやはり「主語」がないと困ります。でも、そう言われても、「何を主語にしたらいいの？」という疑問がわいてきますね。sky (スカイ)「空」なのか、それとも weather

(**ウエ**ぎー)「天気」か、いや、やっぱり air (**エア**)「空気」だろ?—などと、悩んでしまいます。

このように、主語になりうるような具体的な人間や動物、モノなどが存在しない(あるいは明確でない)という場合、仮の主語とし「it」という**意味のない主語を入れる**わけです。[人称名詞の「ダミー主語」としての it](#)のところでも触れましたが、天気・気候の表現には、こういった意味のない**代名詞**「it」を使います。

## It is cold.

(**イ**ティイズ・**コ**ウルド)「寒い。」

となります。

ちなみに、be 動詞は使いませんが、「雨が降る」、「雪が降る」という場合も、it を主語にして

## It rains.

(**イ**ト・**レ**インズ)「雨が降る。」

## It snows.

(**イ**ト・**ス**ノウズ)「雪が降る。」

という言い方をします。意味のない it を主語にして rain と snow を「雨が降る」、「雪が降る」という**動詞**として使っているわけです。

話を戻しましょう。

be 動詞を使って天気や気候の言い方ができるわけですが、その構成をまとめると、下記のようになります。

**天気・気候 : It + be 動詞の3人称単数 + 「天気・気候を表す形容詞」**

もう少し、文章を作ってみましょう。

**暑かった。**

「暑い」は hot (**ホ**ット) を使いましょう。「~かった」ということなので**時制**は過去形です。

**It was hot.**

(**イ**トゥワズ・**ホ**ット)「暑かった。」

is の過去形も正しく使えたでしょうか？

では、これはどうでしょう？

**暖かいだろう。**

「暖かい」は warm (**ウ**ォーム) を使います。「~だろう」なので時制は未来形です。

**It will be warm.**

(**イ**トゥィルビー・**ウ**ォーム)「暖かいだろう。」

となりますね。is の未来形も正しく使えましたか？

以上、「意味のない it」と be 動詞を使って天気・気候を表す言い方をみてきました。[付録](#)のところに「[天気・気候に関する単語リスト](#)」を挙げていますので、それを参考に、いろんな文章を作ってみてください。

[目次に戻る](#)

## 日付や曜日を言うときの表現

このセクションでは、be 動詞を使って、「何曜日です」、「何月何日です」といった「日付

や曜日」を表すときの言い方を学んでみましょう。

まず次の文章を作ってみましょう。

**木曜日です。**

ここも、説明をシンプルにするために、短い文章にしておきます。「木曜日」は Thursday (ㇰーズデイ) を使います。

**Thursday.**

…だけでは完全な文章にならないので、主語を入れてやる必要がありますね。さて、その主語とは？——そうです、前のセクションにも出てきた「意味のない主語 it」ですね。

**It is Thursday.**

(イティイズ・ㇰーズデイ)「木曜日です。」

というわけです。

その構成をまとめると

**○曜日 : It + be 動詞の3人称単数 + 「曜日の表現」**

となります。

また、曜日の表記は、Thursday のように**必ず単語の頭が大文字**になります。

では、今度は、次の文章を作ってみましょう。

**12月1日です。**

「12月」は December (ディㇰェンバー)、「1日」は one (ワン) ではなく 1st (フースト) を使います。



「何日」という言い方には、「ワン、トゥー…」という普通の数字ではなく、「ファースト、セカンド…」という順番を表す数字を使い、1st, 2nd のように数字と語尾をくっつけて表記するのが普通です。

英語の「月」についても、曜日と同じように、**D**ecember のように**必ず単語の頭が大文字**になります。

## It is December 1st.

(イティイズ・ディ**セ**ンバー・**フ**ァースト)「12月1日です。」

というわけですね。

その構成をまとめると

**〇月〇日 : It + be 動詞の3人称単数 + 「月の名前」 + 「日 (何番目の意味の数字)」**

ということになります。

では、これはどうでしょう？

**11月30日、水曜日でした。**

「11月」は November (ノウ**ヴ**ェンバー)、「30日」は 30th (**サ**ーティエス)、「水曜日」は Wednesday (**ウ**ェンズデイ) を使います。また、「～でした」なので**時制**は過去形になります。

## It was Wednesday, November 30th.

(イトゥワズ・**ウ**ェンズデイ・ノウ**ヴ**ェンバー・**サ**ーティエス)「11月30日、水曜日でした。」

となりますね。

以上、「意味のない it」と be 動詞を使って天気・気候を表す言い方をみてきました。[付録](#)のところで、[英語の曜日と月のリスト](#)を挙げておきます。上の文章を参考にして「○月○日、○曜日」などの部分を言い換えて文章を作る練習をしてみてください。

[目次に戻る](#)

## 時間を言うときの表現

前のセクションでは、「意味のない主語 it」と be 動詞を使って曜日や日付を言うときの表現について学びました。ここでは、「何時何分です」というような時間の言い方を覚えましょう。

さっそく、次の文章を作ってみましょう。

### 3時です。

「3時」は「時」に相当する英語を持って来る必要はありません。数字の「3」を意味する three (すりー) だけでいいのです。ということで

## Three.

…だけでは完全な文章になりませんね。そう、主語を入れてやる必要があるのです。では、何を主語にしたらいいのか、clock (クロック)「時計」なのか、それとも time (タイム)「時間」か… というのではなく、そうですね、前のセクションにも出てきた「意味のない主語 it」です。

## It is three.

(イティイズ・すりー)「3時です。」

となります。

ちなみに、o'clock (オクロック) という単語を使って

## It is three o'clock.

(イティイズ・スリー・オクロック)「3時です。」

と言うこともできます。

この o'clock というのは、1～12時までの「〇時きっかり」のときにつけることができる単語ですが、「13時」とか「3時5分」など、1時から12時を超えた時間（24時間方式）や、1時から12時までであっても、1分でも超えると、使えません。

「なんだ、ややこしいな。そうまでして使わないよ」というのも、確かに選択肢の1つですが、正式な文書などで「〇時ちょうど」と言いたい場合は、使っておいたほうがいいでしょう。

「でもこの o'clock っていったい何？」とちょっと気になる人は [「コラム9：なぜ時間の言い方には o'clock をつけるの？」](#) をご覧ください。

もう少し時間の言い方をみてみましょう。

### 午前6時55分です。

「午前」は in the morning (イン・ざ・モーニング) というフレーズを使います。「6時」は数字の six (シックス)、「55分」も数字をそのまま使って fifty-five (ファイフティ・ファイヴ) を使います。

## It is six fifty-five in the morning.

(イティイズ・シックス・ファイフティ・ファイヴ・イン・ざ・モーニング)「午前6時55分です。」

となります。

その構成をまとめると

**〇時〇分** : It + be 動詞の3人称単数 + 「時間の数字」 + 「分の数字」 (+ 「午

## 前・午後などを表す語)

というわけですね。

もう少しみてみましょう。

### 午後5時13分だった。

「午前」は in the afternoon (イン・でい・アフタヌーン) というフレーズを使います。「5時」は数字の five (ファイヴ)、「13分」は thirteen (サーティーン) を使います。また「～だった」で終わっていますので、時制は「過去形」になりますね。

## It was five thirteen in the afternoon.

(イト・ワズ・ファイヴ・サーティーン・イン・でい・アフタヌーン) 「午後5時13分だった。」

となります。

is の過去形 was も正しく言えたでしょうか？

以上、基本的な時間の言い方として、意味のない it という主語と be 動詞の is に数字を持ってきて表現する方法を見ましたが、英語の時間の表現はこれ以外にもいろいろあります。興味のある人は、「[コラム13：いろんな時間の言い方](#)」をご覧ください。

[目次に戻る](#)

## 「～がある・いる」という存在を表す表現

次に、be 動詞と「そこ」を意味する there (ゼア) を使った「～がある (いる)」という表現について学びましょう。

まず、次の文章を作ってみましょう。

**本が1冊ある。**

「本」は book (ブック)、「1冊」は不定冠詞の a を使いましょう。

## ~~Is a book.~~

…だけでは文章になりませんね。そうです、主語がありません。では、何を主語にすればいいのでしょうか？「本でしょ」というわけで

## ~~A book is.~~

としても、文章が成り立ちません。

では、どうするかと言うと、これまでのセクションでもありましたが、「意味のない主語」を入れるわけです。しかし、今度は it ではありません。it を入れると

## It is a book.

(イティイザ・ブック)「それは本である。」

となり、意味が違ってきますね。

そこで、どうするかと言うと、冒頭でも挙げた there を使うのです。

前のセクションでは「意味のない主語 it」を取り上げましたが、「～がある」といった存在を表現する場合は、「意味のない主語 there」を使うというわけです。

よって正解は

## There is a book.

(ゼアリザ・ブック)「本が1冊ある。」

となります。

その構成をまとめると

～がある（存在を表す）：there + be 動詞の3人称

となります。

では、次の文章です。

**2匹の猫がいる。**

「2匹」は two（**トゥー**）、「猫」は cat（**キャット**）の複数形 cats（**キャッツ**）を使います。

**There is two cats.**

というのは間違いですね。

be 動詞の現在形活用のところで学びましたが、ここは「2匹」の猫なので「複数」になり、be 動詞も「3人称現在の複数形」を使う必要があるのです。こういったルールを「**文法的一致**」と言います。

よって正解は

**There are two cats.**

(**ゼ**アラー・**トゥー**・**キャッツ**)「2匹の猫がいる。」

ということになります。

もう少し文章を作ってみましょう。

**何冊かの本があった。**

**多くの人がいるだろう。**

「何冊か」は「いくつかの・いくらかの」という意味の some（**サム**）を使います。「本」

は book を複数形にして books (ブックス)、「多くの」は many (マニイ) を使い、「人々」は people (ピープル) を使いましょう。

また、「～あった」は過去形、「～だろう」は未来形になりますね。

## There were some books.

(ゼアワー・サム・ブックス)「何冊かの本があった。」

## There will be many people.

(ゼアウィルビー・マニイ・ピープル)「多くの人がいるだろう。」

となります。

過去形や未来形の活用も正しく言えたでしょうか？

未来形は単数・複数の変化はしませんが、過去形では、books が複数なので、be 動詞も複数の過去形を使う必要があります。

以上、be 動詞と「意味のない代名詞 there」を使って「～がある・いる」という言い方を学習しました。

[目次に戻る](#)

## 年齢を言うときの表現

ここでは、be 動詞を使って「何歳である」という年齢を言うときの表現をみてみましょう。

これまでのような「意味のないダミー主語」なども出てこないのが非常にシンプルです。

その構成をまとめると

**〇歳である：主語 + be 動詞 + 数字 + year(s) old**

となります。

year (**イ**ヤー) は「年」という意味の単語で、1歳なら year という単数のまま使いますが、2歳以上になると years (**イ**ヤーズ) と複数にして、その後に「年を取った」という意味の形容詞 old (**オ**ウルド) をつけます。

では「1歳未満」の場合はどうするかというと、「月」を意味する month (**マ**ンス) を使います。month の複数形は months (**マ**ンスス) です。

では、さっそく以下の文章を作ってみましょう。

**私は35歳である。**

**あなたは24歳である。**

**彼は57歳だった。**

**その赤ん坊は3か月である。**

**彼女の父は80歳になるだろう。**

「35」は thirty-five (**サ**ーティ・**フ**ァイヴ)、「24」は twenty-four (トウ**エ**ンティ・**フ**ォー)、「57」は fifty-seven (**フ**ィフティ・**セ**ヴン)、「赤ん坊」は baby (**ベ**イビー)、「3か月」は three months (ス**リ**ー・**マ**ンスス)、「父」は father (**フ**ァーザー)、「80」は eighty (**エ**イティ) を使います。

また、「～だった」や「～だろう」という時制にも注意してください。

**I'm thirty-five years old.**

(**ア**イム・**サ**ーティ・**フ**ァイヴ・**イ**ヤーズ・**オ**ウルド)「私は35歳である。」



## You are twenty-four years old.

(ユ-アー・トゥエンティ・フォー・イヤーズ・オールド)「あなたは24歳である。」

## He was fifty-seven years old.

(ヒ-ワズ・フィフティ・セヴン・イヤーズ・オールド)「彼は57歳だった。」

## The baby is three months old.

(ざ・ベイビーイズ・スリー・マンズ・オールド)「その赤ん坊は3か月である。」

## Her father will be eighty years old.

(ハー・ファーザー・ウィルビー・エイティ・イヤーズ・オールド)「彼女の父は80歳になるだろう。」

というわけですね。

以上、be 動詞を使った年齢の言い方について学びました。

[目次に戻る](#)

# Lesson 5 : リベンジ ! 英語の「名詞」

これまでのセクションでは、[人称代名詞](#)や[動詞](#)について学び、「OOが～する」や「OOは～である」といった短いセンテンスが作れるようになりましたね。

ここでは、さらに、「OOが××を～する」のような少し長い文章を作るために、「名詞」について詳しく勉強してみます。

[Lesson 1 のリベンジ ! 英語の「品詞」の「1. 名詞とは」](#)で、名詞とは「人やものの名前」を表す言葉だという話をしました。そして、英語の名詞の特徴として2つ挙げました。

## 1. 英語の名詞は「単数」か「複数」にこだわる

## 2. 英語の名詞は「種類」によってルールが違う

この2つを頭に置きながら、学習を進めていきましょう。

[目次に戻る](#)

### 英語の単数と複数

まず、英語の名詞の「単数」とか「複数」についての考え方をおさえておきましょう。

言ってみれば、どの言語も同じなのですが、「単数」というのは1つしかないことで、「複数」は2つ以上あるということですね。ほとんどの場合、この理解で問題はないのですが、統計などの話になると、小数点とかマイナスの数字が出てきます。たとえば

#### 女性 1 人に対して 0. 5 人の子供

というような場合ですね。

このときの「0. 5人」は単数なのか複数なのか？つまり「子供」という単語を単数形にするのか複数形にするのかという問題が出てきます。どちらだと思いますか？「1人」より少ないから「単数」？それとも…？

正解は「**複数**」なのです。

つまり、英文法の世界では

**単数**：「1」であること。正の数、負の数に関係なく「1 (-1)」は単数

**複数**：「1」でないこと。「1」より小さい数、「1」より大きい数は複数。また「0 (ゼロ)」も複数

というわけなのです。

ちょっと意外ですね。これが、英文法の「単数」、「複数」の考え方です。

[目次に戻る](#)

## 英語の単数名詞

英語の「単数」、「複数」の考え方を頭に置いたうえで、名詞の「単数」について学んでみましょう。まず、「単数形」を使った文章を作ってみましょう。

最初の文章はこれです。

**私はパソコンを持っている。**

もう慣れたとは思いますが、「私**は**」は主語となる人称代名詞のところから「I」を選び、「持っている」はいろんな動詞と3人称単数現在活用にも登場した have (**ハヴ**)「持っている」という動詞を使います。そして、「パソコン」には PC (**ピースィー**) という名詞を使いましょう。PC とは **P**ersonal **C**omputer (**パ**ーソナル・コン**ピ**ュータ) を略したもので、「パソコン」と言うときにはこれが最も適切ですね。

さて、「I」、「have」、「PC」という3つの単語がそろったところで、これを

### 「主語」 + 「動詞」 + 「目的語」

の順番に並べます。ここでは「パソコンを」という部分が目的語になります。

## I have a PC.

(アイ・ハヴァ・ピースィー。)  
「私はパソコンを持っている。」

となりますね。「I」が主語、「have」が動詞、「a PC」が目的語です。

ちょっと解説をしておくと、PCの前に「a」という文字が1つ入っていますが、これは[「リベンジ！英語の品詞」の「冠詞とは」](#)で簡単に説明した「不定冠詞」というもので

### 単数の名詞が来る場合にその前につける

わけです。

ここでは「私はパソコンを持っている」という文章ですが、日本語では「パソコンを持っている」というときは「1台」持っている（つまり単数）のが普通なので、「a PC」として

厳密には「私はパソコンを1台持っている」と言えばいいのですが、日本語ではそんなくどい言い方はしませんね。あまり数にはこだわらないのです。普通の会話では、「パソコン持っています」と言われて「何台持っていますか？」と聞く人はあまりいません（IT関連の話などをしている場合は何台持っているかは重要になってきますが）。

ところが、英語などのヨーロッパ系言語では、「1つだけなのか」、「1つより多いのか」にこだわる言語なのです。「a (an)」という冠詞（不定冠詞）も「1つ」かどうかを表すために登場したようなものです。ですから、名詞を使う場合には、**冠詞のことも忘れないように**しましょう。

また、発音の表記で「ハヴ・ア」ではなく「ハヴァ」としているのは、「have a」のところ

は一気に読むという意味です。「ハヴ・ア」などと話して発音すると、つい余計な母音が入ったりして通じませんので、「ハヴァ」と発音します。

では、今度はこの文章を作りましょう。

**彼女はピアノを持っている。**

主語となる人称代名詞から「彼女は」に該当するものを選び、「持っている」はいろんな動詞と3人称単数現在活用で確認してください。「ピアノ」には piano (ピアノウ) という単語を使います。

**She has a piano.**

(シー・ハザ・ピアノウ。)  
「彼女はピアノを持っている。」

となります。

「have」ではなく「has」を使えましたか？have の3人称単数現在形は has でしたね。そして、「ピアノ」も、売れっ子のピアニストなどではない限り普通は「1台」なので「a piano」となります。

それでは、例によっていくつか文章を作ってみましょう。

**彼には考えがある。**

**彼女にはボーイフレンドがいる。**

**私たちは犬を飼っている。**

**その家には庭がある。**

**彼らは飛行機を持っている。**

「考え」には idea (アイディア)、「ボーイフレンド」は boyfriend (ボイフレンド)、

「犬」は dog (ドッグ)、「その家」は the house (ざ・ハウス)、「庭」は garden (ガーデン)、「飛行機」は airplane (エアプレーン) を使いましょう。また、「～には～がいる」、「～を飼っている」はいずれも have が使えます。

では、答えです。

### He has an idea.

(ヒー・ハザ・ナイディア。)  
「彼には考えがある。」

### She has a boyfriend.

(シー・ハザ・ボイフレンド。)  
「彼女にはボーイフレンドがいる。」

### We have a dog.

(ウィ・ハヴァ・ドッグ。)  
「私たちは犬を飼っている。」

### The house has a garden.

(ざ・ハウス・ハザ・ガーデン。)  
「その家には庭がある。」

### They have an airplane.

(ゼイ・ハヴァ・ネアプレーン。)  
「彼らは飛行機を持っている。」

となります。

have の3人称単数や名詞につける冠詞なども正しく使えたでしょうか？

最初と最後の文章では、名詞が母音で始まっていますね。母音で始まる名詞の前につく冠詞は an なので、ここはそれぞれ an idea、an airplane となるわけです。そして発音も、「ハズ・アン・アイディア」、「ハヴ・アン・エアプレーン」と区切るのではなく「ハザン アイディア」(早く読むと「ハザナイディア」になります)、「ハヴァン エアプレーン」(早

く読むと「ハヴァ**ネ**アプレイン」)と続けて読むようにします。

[目次に戻る](#)

## 名詞の複数形

前のセクションでは、単数名詞を使って文章を作ってみました。単数名詞には正しく「冠詞」を使うこともポイントでしたね。

ここでは、名詞の複数形について学びます。

[前のセクション](#)の最初の例文を思い出してみましょう。

### I have a PC.

(アイ・ハヴァ・ピーシー)。「私はパソコンを持っている。」

普通は1台で十分なのですが、パソコンを使った仕事環境の話などになると、1台だけでなく複数のパソコンを持っていることも必要になってきます。そこで

**私は（複数の）パソコンを持っている。**

という文章を作ってみましょう。

### I have PCs.

(アイ・ハヴ・ピーシーズ)「私は（複数の）パソコンを持っている。」

というふうに、名詞の後に語尾「-s」をつけます。「1つ」であることを表す冠詞の「a」もなくなり、発音も「ハヴ・ピーシーズ」となっています。

同じようにして、前のセクションに登場した単語を使って、以下の文章を作ってみましょう。

私は（複数の）車を持っている。

私は（複数の）ギターを持っている。

私は（複数の）家を持っている。

## I have cars.

(アイ・ハヴ・カーズ。)  
「私は（複数の）車を持っている。」

## I have guitars.

(アイ・ハヴ・ギターズ。)  
「私は（複数の）ギターを持っている。」

## I have houses.

(アイ・ハヴ・ハウスイズ。)  
「私は（複数の）家を持っている。」

となります。シンプルですね。

ところで、最後の houses だけは発音が「ハウスイズ」とちょっと長くなっています。これは、単純に発音しやすいからです。たとえば、他の単語のように「ハウスズ」とか「ハウスス」などと発音するとなめらかさがなく、英語のリズムらしくないからです。こちら辺は、いろんな例を見ているうちになんとなく身に付いてきますのであまり神経質になる必要はないでしょう。

[目次に戻る](#)

### いろいろな名詞の複数形

さて、複数形も語尾に「-s」をつけるだけですべての名詞に対応できればいいのですが、悲しいかな、言葉というものはそれほど生易しいものではありません。

ちなみに、日本語をみてもわかりますね。人間は1人、2人、3人… と数えますが、動



物なら1匹、2匹、3匹… あるいは1頭、2頭、3頭…、魚は1匹、2匹、3匹… または1尾、2尾、3尾…、鳥は1羽、2羽、3羽…、タコ焼きなら1舟、2舟、3舟…  
もう気が遠くなるほどです。

こんなことを言っても「気休め」にしかありませんが、日本語に比べたら英語なんて簡単なものなのです（だから共通語になっています）。ともかく、いろんな例外もありますが、一度に覚える必要はありません。いろんな文章を作りながら、少しずつ覚えていきましょう。

[目次に戻る](#)

## 腕時計 (watch)、サンドイッチ (sandwich)、箱 (box) などの複数形

ということで、まず次の文章を作ってみましょう。

**私は（複数の）腕時計を持っている。**

「持っている」は何度も登場したのでわかりますね。「腕時計」は watch (**ウォッチ**) という単語を使いましょう。

**I have ~~watches~~.**

としたいところですが、間違いです。正解は

**I have watches.**

(**アイ・ハヴ・ウォッチィズ**。)**「私は（複数の）腕時計を持っている。」**

です。

ここで、めざとい人は気づいたかもしれませんが、なんだか「[デジャブ](#)」ですよね。

そう、[いろんな動詞と3人称単数現在活用](#)で紹介した動詞 watch 「観る」の活用と同じで

す。つまり

### **-ch, -s, -sh, -x, -z で終わる名詞には、語尾に「-es」をつける**

というわけです。ちなみに、watch という単語には「観る」という動詞の意味と「腕時計」名詞の意味があります。

もう少し文章を作ってみましょう。

#### **彼女は（複数の）サンドイッチを作る。**

「サンドイッチ」は sandwich（**サ**ンドウィッチ）、「作る」は make（**メ**イク）を使います。

### **She makes sandwiches.**

（シー・**メ**イクス・**サ**ンドウィッチ**ズ**。）「彼女は（複数の）サンドイッチを作る。」

sandwich という名詞が「-ch」で終わっているので「-es」をつけるわけです。また、3人称単数現在形も正しく使えたでしょうか？

もう1つ作ってみましょう。

#### **彼は（複数の）箱を用意する。**

「箱」は box（**ボ**ックス）、「用意する」は prepare（プリ**ペ**ア）という単語を使います。

### **He prepares boxes.**

（ヒー・プリ**ペ**アズ・**ボ**クス**ズ**。）「彼は（複数の）箱を用意する。」

box という名詞が「-x」で終わっている所以「-es」をつけますね。また、3人称単数現在形も正しく使えたでしょうか？

[目次に戻る](#)

## チェリー (cherry)、赤ん坊 (baby)、おもちゃ (toy) などの複数形

では、次の文章はどうでしょう。

**私はチェリーを食べる。**

「食べる」という動詞は eat (**イ**ート)、「チェリー」は cherry (**チェ**リイ) という単語を使います。

**I eat a cherry.**

というのも間違いではないのですが、チェリーともなると、apple (**ア**プル)「リンゴ」や orange (**オ**レンジ)「オレンジ」のように1個のサイズが大きくありません。「個」というより「粒」になってしまいますね。そこで、普通に「食べる」というときは1粒だけではないと解釈して複数形を使います。grape (グ**レ**イブ)「ブドウ」や strawberry (スト**ロ**ベリー)「イチゴ」なども同様です。そこで

**I eat cherrys.**

としたいところですが、間違いです。正解は

**I eat cherries.**

(**アイ**・**イ**ート・**チェ**リ**ズ**。)**「私はチェリーを食べる。」**

となります。

そう、[いろんな動詞と3人称単数現在活用](#)でもあったルールですね。「y」を「i」に変えて「-es」をつけるのでした。このルールが名詞の複数形でも適用されるのです。つまり

**子音 + -y で終わる名詞は 「y」を「i」に変えて「-es」をつける**

というわけです。

次の文章はこれです。

**彼女は（彼女の）（複数の）赤ん坊にミルクをやる。**

赤ん坊は baby（ベイビー）、「ミルクをやる」は feed（フイード）（食べさせる）という単語を使いましょう。また、他人の赤ん坊にミルクをやるのもヘンなので「彼女の」という人称代名詞所有形を入れておきましょう。「彼女の」は her（ハー）でしたね。

**She feeds her babies.**

（シー・フーズ・ハー・ベイビズ。）「彼女は（彼女の）（複数の）赤ん坊にミルクをやる。」

baby は子音 +y で終わっているので「y」を「i」に変えて「-es」をつけます。feeds という3人称単数現在も正しく使えましたか？

ではこの文章はどうでしょう？

**彼は（複数の）おもちゃを持っている。**

「持っている」は何度も登場したのでわかりますね。「おもちゃ」は toy（トイ）という単語を使いましょう。

**He has ~~toies~~.**

とやってしまうと間違いですね。

toy という単語は「母音 + -y」で終わっています。正解は

**He has toys.**

（ヒー・ハズ・トイズ。）「彼は（複数の）おもちゃを持っている。」

となります。3人称単数現在の has も正しく使えましたか？

ここでのルールは

**母音 + -y で終わる名詞はそのまま「-s」をつける**

ということですね。

これも、[いろんな動詞と3人称単数現在活用](#)で見えてきたルールと同じです。

[目次に戻る](#)

## ジャガイモ (potato)、トマト (tomato)、ピアノ (piano) などの複数形

次の文章です。

**彼らは (複数の) ジャガイモを食べる。**

「彼らは」は[主語となる人称代名詞](#)から they (ゼイ) という人称代名詞を選びます。「ジャガイモ」は potato (ポテイトウ) を使います。

**They eat potatoes.**

残念ながらこれは間違いです。正解は

**They eat potatoes.**

(ゼイ・イート・ポテイトウズ。)「彼らは (複数の) ジャガイモを食べる。」

となります。

「また例外か」ということになりましたが

**子音 + -o で終わる名詞は「-es」をつける**

というルールがあるのです。それで納得できる人はそのまま覚えましょう。「いや、やっぱり気になる」という人は、[コラム10：なぜ「o」の後に「-es」をつけるの？](#)をご覧ください

ださい。

では、次の文章です。

**私たちは（複数の）トマトを食べる。**

「トマト」は tomato (ト~~メ~~イトウ) を使います。

**We eat tomatoes.**

(ウィ・~~イ~~ート・ト~~メ~~イトウズ。)「私たちは（複数の）トマトを食べる。」

前述のルール通りですね。子音 + 「-o」で終わっているので「-es」をつけます。

では、次のセンテンスです。

**彼女は（複数の）ピアノを持っている。**

前のセクションで出てきた文章の複数形ですね。「ピアノ」は piano (ピ~~ア~~ノウ) でした。

**She has pianoes.**

としたいところですが、残念です。え？だって「子音+ -o」のあとは「-es」でしょ？ ざっともです。でも間違いです。正解は

**She has pianos.**

(シー・~~ハ~~ズ・ピ~~ア~~ノウズ。)「彼女は（複数の）ピアノを持っている。」

となります。「なぜ、なぜ、なぜ？」と言いたくなる気持ち、よくわかります。その理由は

**外来語ルーツの子音 + -o で終わる名詞は「-s」をつける**

というルールがあるからです。

piano はイタリア語から英語に入ってきた外来語なので、「子音 + -o」で終わっていても「-s」をつけるだけなのです。その他、日本語から入った kimono もそうです。「子音 + -o」で終わっているのですが、外来語なので kimonos と「-s」がつくだけになります。

## She has kimonos.

(シー・ハズ・キモノズ。)

彼女は（複数の）着物を持っている

というわけです。

ただし、「外来語」と言っても、英語には古代から外来語だらけですので、厳密には「近代に入ってきた外来語にその傾向が強い」としておいたほうがいいでしょう。

ええい！もうめんどくさいから、「子音 + -o」で終わる名詞のうち、どれが「+ -es」でどれが「+ -s」なのかははっきりしてよ！という人のために、巻末の[付録](#)に「[子音 + -o](#)」で終わる名詞：「-es」をつけるもの vs 「-s」をつけるものリストを載せていますので、そちらをご覧ください。

[目次に戻る](#)

## ナイフ (knife)、葉 (leaf)、屋根 (roof) などの複数形

では、次の文章です。

彼は（複数の）ナイフを持っている。

ちょっと物騒な話になってきましたが、「ナイフ」は knife（**ナ**イフ）という単語を使います。もちろん

## He has knifes.

ではありませんね。正解は

## He has knives.

(ヒー・ハズ・ナイヴズ。)  
「彼は(複数の)ナイフを持っている。」

となります。その理由は

### **-f(e) で終わる名詞は「-f」を「-v」に変えて「-(e)s」をつける**

というルールがあるからです。それで納得できる人はこのまま覚えましょう。「いや、やっぱり気になる」という人は、[コラム 1 1 : なぜ「-f」を「-v」に変えて「-\(e\)s」をつけるの?](#)をご覧ください。

では、次のセンテンスです。

### **彼は紅葉を楽しむ。**

「紅葉」は red leaf (**レ**ッド・**リ**ーフ)「赤い葉っぱ」というフレーズを使いましょう。普通に「紅葉」という場合、葉っぱ1枚だけを指すことはないので leaf という単語を複数にします。「楽しむ」は enjoy (エン**ジ**ョイ) という動詞を使いましょう。

## He enjoys red leaves.

(ヒー・エン**ジ**ョイズ・**レ**ッド・**リ**ーフズ。)  
「彼は紅葉を楽しむ。」

前述のルールより、leaf の「-f」を「-v」に変えて「-es」をつけます。enjoys の3人称単数現在も正しく使えましたか？

では次の文章はどうでしょう？

### **彼は(複数の)屋根を修理する。**

「屋根」は roof (**ル**ーフ) という単語を使います。また、「修理する」には fix (**フ**ィックス) という動詞を使いましょう。



## He fixes rooves.

となるのが理にかなっていませんよね。でも、rooves は間違いなのです。正解は

## He fixes roofs.

(ヒー・フィックスイズ・**る**ーフ (ヴ) ズ。)「彼は(複数の)屋根を修理する。」

となります。fixes の3人称単数現在では正しく使うことができましたか？

それにしても、気になるのはこの roofs ですよね。残念ながら、いろいろ調べてみても、この例外に関する説明は見当たりません。結局は、このまま覚えるしかありませんね(発音は「**る**ーフス」でも「**る**ーフス」でもかまいません)。ちなみに、1100~1500年の中英語と呼ばれる時期には rooves が使われていたようです。

ということで、例によって、ええい！もうめんどくさいから、どれが「f+ -s」でどれが「v+ -es」なのかははっきりしてよ！という人のために、巻末の[付録に「-f\(e\)」で終わる名詞：「f+ -s」になるもの vs 「v+ -es」になるものリスト](#)を載せていますので、そちらをご覧ください。

[目次に戻る](#)

### ガチョウ (goose)、歯 (tooth)、足 (foot) の複数形

引き続き、名詞の複数形を使った文章を作っていきましょう。これまで現在形のみを使ってきましたが、ここからは、[Lesson 3：リベンジ！英語の「動詞」](#)で学んだ過去形も使ってみましょう。

さっそく最初の文章です。

**私の父は(複数の)ガチョウを捕まえた。**

「父」は father (**フ**ァーザー) という単語を使い、「私の」は[人称代名詞所有形](#)から my

(マイ) を選びます。「ガチョウ」は goose (グース) という名詞を使い、「捕まえる」は catch (キャッチ) という動詞を使います。catch の過去形については、[英語の不規則動詞リスト](#)をみると caught (コート) となっていますね。

## My father caught geese.

としたいところですが、goose の複数形が間違いです。正解は

## My father caught geese.

(マイ・ファーザー・コート・ギース。)  
「私の父は(複数の)ガチョウを捕まえた。」

というふうに、goose の「-oo-」が「-ee-」に変わるという変化をします。

「なんだこりゃ？」と言いたくなるような変わりようですが、これは、古い英語の時代に見られた複数形への変化パターンの「名残」なのです。これまで使ってきた語尾「-(e)s」の姿は跡形もありませんね。当時は、このように、母音の発音が変化する名詞がたくさんあったようです。

次の文章はどうでしょうか。

### 私は歯を磨いた。

「歯」は tooth (トゥース) という単語を使いますが、普通「歯を磨く」ときは1本だけじゃないので「複数形」にします。「磨く」は brush (ブラッシュ) 「ブラシをかける」という動詞を使いましょう。brush は[規則動詞](#)なので、過去形は brushed (ブラッシュト) になりますね。また、通常「歯を磨く」というときは、親が子供の歯を磨いてあげたりする以外は自分の歯になりますので、「私の」という[人称代名詞所有形](#)を使います。

## I brushed my teeth.

(アイ・ブラッシュト・マイ・テイーす。)  
「私は歯を磨いた。」

ですね。「何か引っ掛け」があるんじゃないかと思った人もいるかもしれませんが、素直

に、先に挙げた例の通り、「-oo-」が「-ee-」に変わる「名残パターン」です。

次の文章です。

**彼は足を洗った。**

「足」は foot (フット) という名詞を使いますが、ここも、わざわざ片足だけ洗うというのはあまりないので両足洗うということにします。また、「誰の足」かと言うと、普通は自分の足なので、「彼の足」という意味の人称代名詞所有形を使います（「彼は彼の足を洗う」という日本語にすればいいのかもしれませんが、そんな不自然な日本語は受験英語だけにしておきましょう）。また、「洗う」には wash (ウォッシュ) という動詞を使います。wash は規則動詞なので、過去形は washed (ウォッシュト) になります。

**He washed his feet.**

(ヒ-・ウォッシュト・ヒズ・フイ-ト。)  
「彼は足を洗った。」

ということで、foot も「-oo-」を「-ee-」に変えて複数形を作ります。

以上、複数形になると「-oo-」が「-ee-」変わる「名残パターン」の名詞について見てきました。このパターンの変化をする単語は、ほぼ goose、tooth、foot の3つだけです。

[目次に戻る](#)

## ネズミ (mouse)、シラミ (louse) の複数形

それではもう少し、古い英語の「名残」パターンについて見てみましょう。

例文は次の文章です。

**彼女はネズミが嫌いだ。**

ミッキーマウスなどのキャラクターでもない限り、「ネズミ」を好きな人はあまりいませんが、「ネズミ」は mouse (マウス)、「嫌い」は hate (ヘイト)「嫌う」という動詞を使い

ます。また、「好き嫌い」を表すときは、対象となるのは1つの個体だけではないので、通常、複数形にします。

## She hates ~~mouses~~.

とやってしまうと間違いですね。

これも「名残パターン」の1つで、「-ouse」が「-ice」に変わるので。よって、正解は

## She hates mice.

(シー・ヘイツ・マイス。)  
「彼女はネズミが嫌いだ。」

となります。hates の3人称単数現在形も大丈夫ですね。

次はこの文章です。

## 彼のネコにはシラミがいる。

「彼の」に該当する人称代名詞所有形を選び、ネコは cat (**キ**ャット) ですね。シラミは louse (**ラ**ウス) ですが、当然、「単数」で存在しているとは思えないので「複数」にする必要がありますね。また、「～がいる」は動詞の have (**ハ**ヴ) を使います。

## His cat has ~~louses~~.

ではありませんね。正解は

## His cat has lice.

(**ヒ**ズ・**キ**ャット・**ハ**ズ・ライス。)  
「彼のネコにはシラミがいる。」

となりますね。mouse と同じく「-ouse」が「-ice」に変わる「名残パターン」です。3人称単数現在形の has も大丈夫ですね。

この「-ouse」が「-ice」に変わるパターンは、実質上、この mouse と louse の2つだけです。このまま覚えましょう。

ついでに、もう1つ文章を作ってみましょう。

**私は昨日（複数の）マウスを買った。**

「昨日」は yesterday (イエスタデイ) という副詞があるので、それを文章の一番後に持ってきます。「買う」は英語の不規則動詞リストを見ると bought (ボート) となっていますね。「マウス」は「ネズミ」と同じ単語を使います。

**I bought mice (mouses) yesterday.**

(アイ・ボート・マウス (マウスイズ)・イエスタデイ。)「私は昨日（複数の）マウスを買った。」

というふうに、コンピュータに使う「マウス」の場合の複数形は、mice を使っても正解ですが、mouse に単純に「-s」をつけて mouses としても正解です。

[目次に戻る](#)

## 男 (man)、女 (woman) の複数形

これも、母音が変化する「名残パターン」の1つですが、この変化をするのは実質的に man と woman のみです。

さっそく例文です。

**多くの男女が来た。**

「多くの」は many (マニイ) という形容詞を使いましょう。「男女」は「男」と「女」ということですので、それぞれ man (マン)、woman (ウーマン) を使いますが、「〜と」の部分はどうするかですね。ここには、and (アンド)「そして」という接続詞を使いましょう。「来た」は英語の不規則動詞リストから come (カム)「来る」という動詞の過去形を

探します。came (ケイム) となっています。

## Many mans and womans came.

とすると間違いですね。man と woman の複数形は「-a-」の母音が変化して

## Many men and women came.

(~~メ~~ニイ・~~メン~~・~~ア~~ンド・~~ウイ~~ミン・ケイム。)「多くの男女が来た。」

というふうに、それぞれ「men」と「women」に変わります。さらに、「women」の発音も「ウーメン」ではなく「~~ウイ~~ミン」に変わっているのに注意してください。

前述のように、この変化をするのはこの2つの名詞だけですが、この単語を含む superman (スーパーマン)「超人」や snowman (スノウマン)「雪だるま」などの語も同じ変化をします。

[目次に戻る](#)

### 雄牛 (ox)、子供 (child) の複数形

これも、語尾「-(e)s」を使わない「名残パターン」の複数形ですが、ox (オックス)「雄牛」と child (チャイルド)「子供」という例のみ覚えておけばいいでしょう。

例文です。

#### 私の祖父は多くの雄牛を飼っていた。

「祖父」は grandfather (グランドファーザー) という名詞がありましたね。「多くの」は先のセクションで使った many (~~メ~~ニイ) を使います。「雄牛」は ox、「飼っていた」は「飼っている」の意味を持つ動詞 have (ハヴ) の過去形を使います。[英語の不規則動詞リスト](#)から見つけてください。

## My grandfather had many ~~oxes~~.

そうですね、ox の複数形が間違っています。oxes ではなく

## My grandfather had many oxen.

(マイ・グランドファーザー・ハド・メニィ・オクセン。)  
「私の祖父は多くの雄牛を飼っていた。」

のように、oxen と「-en」の語尾がつくのです。

これも、古い英語の時代の「名残」で、語尾の「-en」をつけて複数形にするという単語があり、それが現代にも残っているわけです。

では、次の文章です。

### 私の祖母には多くの子供がいた。

「祖母」は grandmother (グランドマザー)、「多くの」はもう覚えましたね。子供は child (チャイルド) ですが、「多くの」があるので「複数形」になりますね。「子供がいた」の「いた」は have という動詞を使うことができますね。前の例文と同様に、過去形になります。

## My grandmother had many ~~childs~~.

お察しの通り、childs は間違いですね。前の例からむしろ

## My grandmother had many children.

ではないかと思った人もいるかもしれません。なかなか勘がいいと言えますが、惜しいですね。正解は

## My grandmother had many children.

(マイ・グランドマザー・ハド・メニィ・チルドレン。)  
「私の祖母には多くの子供がいた。」

となります。

「じゃあこの ren って何？」と思ってしまいますね。実はこれは、「二重複数」という現象で、古い英語の時代の child の複数形は childer という形だったのですが、「なんだか弱くない？複数形ってわかってもらえるかな」といった不安があったのか、ごていねいにもうひとつ、当時の「複数形を表す語尾 -en」をつけて **children** になったということなのです。

この children という複数形は、lice や oxen などよりも非常に多く登場しますので、このまま覚えてしまいましょう（と言うより、使っているうちに覚えてしまいます）。

[目次に戻る](#)

## fish（魚）、sheep（羊）などの複数形

これまで、いろんな複数形のパターンを見てきましたが、中には、単数形と複数形が同じという名詞もあります。

うれしいような、かえってややこしいような、複雑な心境ですが、実際に文章を作ってみましょう。

### 私の伯父はたくさんの魚を捕った。

「伯父」は uncle（**ア**ンクル）という単語を使います。英語では伯父（自分の親の兄）と叔父（自分の親の弟）の区別はしませんので、どちらでも uncle になります。「たくさんの」はすでに前のセクションで出てきましたね。「魚」は fish（**フイ**ッシュ）、「捕った」は catch（**キヤ**ッチ）の過去形を使います。[英語の不規則動詞リスト](#)からつけてください。

## My uncle caught many fish.

(マイ・**ア**ンクル・**コ**ート・**メ**ニィ・**フイ**ッシュ。)  
「私の伯父はたくさんの魚を捕った。」



となるわけです。fish には語尾「-(e)s」はついていませんね。

では次の文章を作ってみましょう。

### **私の母は魚を一匹買った。**

「母」は mother (マザー) ですね。「買った」は buy (バイ) という動詞の過去形を使います。[英語の不規則動詞リスト](#)から見つけてください。

## **My mother bought a fish.**

(マイ・マザー・ボータ・フィッシュ。)  
「私の母は魚を一匹買った。」

となりますね。単数でも fish です。でも、「1匹」ということなので[不定冠詞](#)の「a」を忘れずにつけます。

ここで、「1匹」は one fish (ワン・フィッシュ) ではダメなの？という人もいるかもしれませんがね。特に「数」を強調するとき以外は冠詞の「a」をつけるのが普通です。これについて、もう少し詳しい説明が欲しいという人は[コラム12 : 「1つの～」](#)というとき「a」+名詞と「one」+名詞はどう違うの？をご覧ください。

というわけで、fish は単数も複数も形が同じ（変化しない）わけですが、それでも、fishes という複数形を使う場合もあります。それはどういうときかと言うと、「いろんな魚の種類」を言うときです。

たとえば、次のような文章があります。

### **私の伯父はいろんな（種類の）魚を捕った。**

ここでは、魚が単数か複数かと言うより、その種類を問題にしています。言い換えれば、その種類が単数ではなく複数であるわけですね。「サバ（鯖）」だけでなく「タイ（鯛）」も釣ったし、「キス」なんかも釣った… というような場合ですね。そのように、いろんな種類を問題にする場合は

## My uncle caught various fishes.

(マイ・アंकル・コート・ヴェアリアス・フィッシュイズ。)  
「私の伯父はいろんな(種類の)魚を捕った。」

となるわけです。ちなみに、various (ヴェアリアス) は「いろいろな」という意味の形容詞です。

このように、単なる単数・複数ではなく、種類が1種類だけでなく2種類以上あったといふときは fish も fishes と複数になります。

では次の文章を作ってみましょう。

**私の叔母は羊を(一匹)飼っている。**

**私の叔母は羊を何匹か飼っていた。**

「叔母(伯母)」は aunt (アアント) を使います。「羊」は sheep (シープ)、「飼っている」は、これまで使ってきた have でもかまいませんが、あまりワンパターンになりたくないの、ここでは keep (キープ)「保つ、維持する」という動詞を使いましょう。「飼っていた」は過去形になっていますから、[英語の不規則動詞リスト](#)から過去形を探します。「何匹か」の部分には some (サム)「いくらかの」という形容詞を使いましょう。

## My aunt keeps a sheep.

(マイ・アアント・キープサ・シープ。)  
「私の叔母は羊を(一匹)飼っている。」

## My aunt kept some sheep.

(マイ・アアント・ケプト・サム・シープ。)  
「私の叔母は羊を何匹か飼っていた。」

となり、「1匹」のときも、「何匹か」のときも sheep という単語の形は変わっていませんね。3人称単数現在形や冠詞の「a」、過去形も正しく使えましたか？

その他にも、単数形と複数形が同じ単語としては以下のようなものがあります。

単数	複数	意味
<b>carp</b> (カープ)	<b>carp</b> (カープ)	鯉 (こい)
<b>deer</b> (ディア)	<b>deer</b> (ディア)	鹿 (しか)
<b>salmon</b> (サーモン)	<b>salmon</b> (サーモン)	鮭 (さけ)

[目次に戻る](#)

## ラテン語から入った単語の複数形

これまで、名詞のいろんな複数形について見てきましたが、「複数形コーナー」もいよいよ大詰め、最後のパターンになりました。

ここでは、ラテン語から入った単語の複数形について見てみましょう。

そもそもラテン語から入った単語には、小難しいものが多いので、そうそう日常生活で使うことはないかもしれません。それでも、仕事や研究の世界ではけっこう登場するので、「全く無視」というわけにはいきませんね。

そこで、そういった単語のうち、よく登場するものを以下に挙げておきます。

単数	複数	意味
<b>axis</b> (アク <u>シ</u> ス)	<b>axes</b> (アク <u>シ</u> ーズ)	軸
<b>crisis</b> (ク <u>リ</u> シス)	<b>crises</b> (ク <u>リ</u> シーズ)	危機
<b>datum</b> (デ <u>イ</u> タム)	<b>data</b> (デ <u>イ</u> タ)	データ
<b>medium</b> (ミ <u>ー</u> ディアム)	<b>media</b> (ミ <u>ー</u> ディア)	メディア
<b>thesis</b> (シ <u>ー</u> シス)	<b>theses</b> (シ <u>ー</u> シーズ)	論文

[目次に戻る](#)

## 複数形まとめ

以上、いろんな単語の複数形について見てきました。そのルールをまとめると次のようになります。

英語の名詞の複数形ルール		例
1. -ch, -s, -sh, -x, -z で終わる動詞には、語尾に「-es」をつける		wat <u>ch</u> es, sandw <u>ic</u> hes
2. 子音+ -y で終わる動詞は「y」を「i」に変えて「-es」をつける		cherri <u>e</u> s, babi <u>e</u> s
3. 母音+ -y で終わる動詞には「-s」をつける		<u>to</u> ys
4. 子音+ -o で終わる名詞は「-es」をつける		potat <u>o</u> es, tomat <u>o</u> es
5. 外来語ルーツの子音+ -o で終わる名詞は「-s」をつける		kimon <u>o</u> s, pian <u>o</u> s
6. -f(e) で終わる名詞は「-f」を「-v」に変えて「-(e)s」をつける		kniv <u>e</u> s, leav <u>e</u> s 例外 : roof <u>s</u>
7. 古い時代の「名残パターン」		
1)	ガチョウ (goose)、歯 (tooth)、足 (foot) の複数形	ge <u>e</u> se, te <u>e</u> th, fe <u>e</u> t
2)	ネズミ (mouse)、シラミ (louse) の複数形	m <u>i</u> ce, l <u>i</u> ce
3)	男 (man)、女 (woman) の複数形	m <u>e</u> n, wom <u>e</u> n
4)	雄牛 (ox)、子供 (child) の複数形	ox <u>e</u> n, childr <u>e</u> n
8. 単数・複数形が同じ単語		fish, carp, deer, salmon, sheep

## いろいろな種類の名詞

これまでのセクションでは、具体的に例を挙げながら、英語の名詞の複数形について学びました。

ここからは、[冒頭](#)にも述べた、英語の名詞のもう1つの特徴である「英語の名詞は『種類』によってルールが違う」というポイントについてみていきましょう。

「種類によってルールが違う」とはどういうことかと言うと、たとえば、「普通名詞」で「数えられる名詞」であれば、文章を作るときに、単数が複数かを明確にしなければなりません。そして、単数のときには、「a」か「an」の不定冠詞をつける必要があります。

さらに、主語となる名詞が単数である場合、現在のことを言うのなら、動詞にも単数形を使ってあげなければなりません。これが「**3人称単数現在形**」でしたね。

このように、主語である名詞に合わせて、冠詞や動詞を一致させることを「文法的一致」と呼んでいます。

ところで、英語の名詞は「数えられる名詞」ばかりではありません。粉末状のものとか、液体状の名詞など、「数えられない名詞」だってあります（もちろん、日本語でもそうですね）。

しかし、数えられないからと言って、まったく数量を表現することができなければ困りますよね。そこで、「カップ1杯のコーヒー」とか「グラス1杯の水」など、その名詞を入れる容器や、「1切れのケーキ」などのように名詞をどのような形にするかを基準にして表現するわけです。

つまり、めんどくさいのですが、英語の名詞ってちょっと「手がかかる」のです。そんな手がかかる名詞を使いこなすためにも、その名詞がどんな種類の名詞なのかを理解しておく必要があるのです。

でも、別にむずかしく考える必要はありません。文章をたくさん作っているうちに覚えていきます。

ということで、いろんな名詞の種類について学んでみましょう。

[目次に戻る](#)

## 固有名詞と普通名詞

英語の名詞には「**固有名詞**」と「**普通名詞**」があります。

「[固有名詞](#)」については、[Lesson 1 : リベンジ！英語の「品詞」の「1. 名詞とは」](#)でも触れていますが、人の名前や国の名前、地名、会社名や団体名など、特定の対象だけを表す「固有の名詞」のことを言います。

そして、それ以外の名詞を「普通名詞」と言います。

たとえば、シェイクスピアとかピカソ、ソニー、トヨタといった有名な名前から、「鈴木花子」さんや「山田次郎」さん、「ABC株式会社」、「サロン・ド・ビューティ」（すべて仮名）といった無名の個人名や会社名、組織名、お店の名前などもすべて「固有名詞」ですね。

それに対して、「山、川、道、家、父、母、テーブル、椅子（…以下略…）」などの「固有名詞」以外の名詞がすべて「普通名詞」というわけです。

では、「普通名詞」と「固有名詞」の使い方のルールの違いは何でしょうか？

「普通名詞」の場合は、それが「数えられる名詞」であれば、前述のように単数か複数を明確にすることが求められ、単数であれば不定冠詞をつけ、主語になれば動詞も単数か複数に応じて「一致」させなければなりません。

まとめてみると

1. 単数か複数を明確にする
2. 単数であれば不定冠詞 (a または an) をつける
3. 主語であれば動詞を一致させる

となりますね。

では、次に「固有名詞」についてみてみましょう。まず、以下のようなルールがあります。

1. 大文字で表記される
2. 3人称単数の扱いになる
3. 冠詞はつかない
4. 普通名詞として使う用法がある

1つずつ説明すると、「普通名詞」が小文字で表記されるのに対して、「固有名詞」は単語の最初が大文字で表記されます。そうすることで、その名詞が普通名詞か固有名詞かわかるからです。

さらに、1つの「固有名詞」で表される対象は1つなので単数扱いになり、それが主語になる場合は「3人称単数現在形」の動詞を使います。

また、「固有名詞」は「普通名詞」ではないため「数えられる名詞」でもありません。よって、不定冠詞の「a」や「an」もつきませんし、定冠詞の「the」もつきません。

しかし、ルール4にあるように、「普通名詞」のような使い方をすることがあります。ちょっとややこしい話になってきましたね。

実際の例を挙げてみましょう。

**昨日トヨタを買ったよ。**



というような場合ですね。

つまり、ここでの「トヨタ」は「トヨタの製品（車）」ということで、固有名詞がまるで数えられる普通名詞のような働きをしているわけです。

英語の文章を作ってみると

## **I bought a Toyota yesterday.**

(アイ・ボータ・トヨタ・イエスタデイ。)「昨日トヨタを買ったよ。」

となります。

「Toyota」にも不定冠詞の「a」がついています。「Toyota」の車を1台買ったという意味になるからで、ここでは「Toyota」は普通名詞の扱いになっているわけです。ちなみに

### **トヨタを2台持っている。**

という文章なら

## **I have two Toyotas.**

(アイ・ハヴ・トゥー・トヨタズ。)「トヨタを2台持っている。」

となるわけです。「Toyota」の語尾に複数を表す「-s」がついて、普通名詞の複数形と同じ使い方をしていますね。

もう1つ例文を見てみましょう。

### **彼は日本のピカソだ。**

ここも、「ピカソのような（天才的な絵を描く）人」といった名詞の代わりに「ピカソ」という固有名詞を用いて、それを普通名詞のように使っています。

## He is the Picasso of Japan.

(ヒー・イぎ・ピカーソウ・オヴ・ジャパン。)「彼は日本のピカソだ。」

というわけですね。

ちなみに、ここの「of」は [Lesson 1 : リベンジ！英語の「品詞」の「8. 前置詞とは」](#)でも触れていますが、「～の」という意味の前置詞です。「of Japan」で「日本の」という意味になりますね。

以上、「固有名詞」と「普通名詞」について学習しました。

[目次に戻る](#)

### 具象名詞と抽象名詞

前のセクションでは、「固有名詞」と「普通名詞」について学びました。

ここでは、英語の「**具象名詞**（ぐしょうめいし）」と「**抽象名詞**（ちゅうしょうめいし）」についてみてみましょう。

「具象名詞」とは文字通り、「具体的な姿・形のあるもの」ということになります。実際に、目で見ても手で触れることのできる「名詞」のことです。身の周りにある「机」、「テーブル」、「本」、「パソコン」、「コップ」、「水」などみんなそうですね。

「抽象名詞」とは、「抽象的なもの」、つまり、物理的に目で見ても手で触れることのできないものを言います。たとえば、「幸福」、「愛」、「悲しみ」、「決意」などの名詞がそうです。

そして、「具象名詞」で「数えられる名詞」であれば、[不定冠詞](#)の「a」か「an」をつけたり、複数形に変えたりして単数や複数を表現しますが、「抽象名詞」であれば**具体的な形がない**ので、通常は、冠詞をつけたり、単数や複数の概念を表すことはしません。

例を挙げてみましょう。

**私は本を持っている。**

**彼女には強さがある。**

「本」には book (ブック)、「強さ」には strength (ストレングス) という単語を使います。

**I have a book.**

(アイ・ハヴァ・ブック。)  
「私は本を持っている。」

**She has strength.**

(シー・ハズ・ストレングス。)  
「彼女には強さがある。」

というふうに、上の文章の book は具象名詞なので不定冠詞「a」がついていますが、下の文章の strength は抽象名詞なので冠詞はついていません。もちろん、I have a book. の文章では book を複数形にすることもできますが、She has strength. では strength を複数形にすることもできません。次のセクションで学びますが、数えることができない名詞だからです。

以上が「具象名詞」と「抽象名詞」の違いです。

[目次に戻る](#)

## 可算名詞と不可算名詞

前のセクションでは、「具象名詞」と「抽象名詞」の分けについて勉強しました。

英語の名詞では、単数と複数を明確にすることが大事だという話をしましたが、そこに大きく関わってくるのが、その名詞は「数えられるか」、「数えられないか」ということですね。

そういうことから、英語の名詞には「数えられる名詞」と「数えられない名詞」があり、専門的に、それぞれ「**可算名詞**（かさんめいし）」と「**不可算名詞**（ふかさんめいし）」と呼びます。

「可算名詞」であれば、前述のように、単数か複数かを明確にする必要があり、単数であれば不定冠詞をつけ、それが主語であれば3人称単数形を使うというのがルールでした。また、複数の場合であれば、複数形の動詞を使うということでしたね。

実際に、例を挙げてみましょう。

**雑誌が1冊ある。**

「雑誌」は magazine（マガ**ズイ**ーン）ですね。be 動詞のところで学んだ「~がある」という表現を使ってみましょう。

**There is a magazine.**

(ゼアリザ・マガ**ズイ**ーン。)「雑誌が1冊ある。」

magazine は可算名詞なので、不定冠詞の a をつけますね。

では、「雑誌」を複数形にして

**雑誌が3冊ある。**

という文章を作りましょう。「3冊」は three（す**リ**ー）を使います。

**There are three magazines.**

(ゼアラー・す**リ**ー・マガ**ズイ**ーンズ。)「雑誌が3冊ある。」

となりますね。be 動詞の複数形、magazine の複数形を一致させることができましたか？

magazine のような可算名詞では、単純に、単数か複数かに合わせて、動詞と名詞の形をそ

れに合わせていいわけです。

では、「不可算名詞」の場合はどうなるのでしょうか？

次の文章を作ってみましょう。

**紙が 1 枚ある。**

「紙」は paper (ペーパー)、「1 枚」は不定冠詞の a を使いましょう。

**There is a paper.**

というわけにはいきませんね。そうです。paper は数えることができないからです。

「え？でも紙を数えることはできるじゃないか。ほら、1 枚、2 枚…」とそこら辺にあるコピー用紙などを数えてみたくなりますね。

確かに、日本語の感覚では、「紙」というものはすでに薄いシート状になった製品のイメージがあるのですが、英語では、パピルス草から紙を製造するごとくに、「紙」は「材料」というイメージが強いのです。そのため、paper のような名詞を「物質名詞」と呼びますが、数えることのできる対象ではないわけです。

では、どうするかというと、「[いろんな種類の名詞](#)」のところでも触れたように、数えられない名詞に何らかの数の概念を持たせようとするれば、**数えられる方法**を与えてやらなければなりません。

paper の場合は、「かけら、片」を意味する piece (ピース) や「シート状のもの」を意味する sheet (シート) という単語を使います。

正解は

**There is a piece (sheet) of paper.**

(ゼアリス・ピース (シート) オヴ・ペーパー。)「紙が 1 枚ある。」

となります。

ついでに、これを複数にするとどうなるかと言うと

## There are pieces (sheets) of paper.

(ゼアラー・ピースズ (シート) オヴ・ペーパー。)(「複数の) 紙がある。」

というふうに、前につく piece や sheet が複数になるわけです。

考えようによっては、「材料」として形のない「紙」というものが（製造工程の途中のパルプから）最終的にシートやロールになっていくわけですから、「紙」を数えられない材料として認識する英語の発想のほうが理にかなっていると言えるかもしれません。

ところで、paper という単語には「論文」という意味もあり、その意味で使う場合は、具象名詞のように数えられる名詞として扱います。

たとえば

## I write a paper.

(アイ・ライタ・ペーパー。)(「私は論文を書く。」

## He wrote two papers.

(ヒー・ラウト・トゥー・ペーパーズ。)(「彼は論文を2本書いた。」

ということですね。

では、次の文章を作りましょう。

**彼女はミルクを飲んだ。**

**私たちはコーヒーを飲んだ。**

「ミルク」は milk (ミルク)、「飲んだ」は drink (ドリンク) の過去形を使いましょう。  
コーヒーは coffee (コーヒー)、ここでの「飲む」は、同じ単語ばかりでは芸がないので、  
have (ハヴ) の過去形を使ってみましょう。

## She drank milk.

(シー・ドランク・ミルク。)  
「彼女はミルクを飲んだ。」

## We had coffee.

(ウィ・ハド・コーヒー。)  
「私たちはコーヒーを飲んだ。」

というのが最もシンプルな形ですが、ちょっと英語的には物足りないかもしれません。

このままでは、「何を飲んだのか？」の答えに対して「ミルクです」、「コーヒーです」など、文字通り、何を飲んだかという「物質」しか伝えていないからです。もっと英語として自然な文章にするには、数量の概念を入れてやることです。

「紙」と同様に、ミルクやコーヒーも数えることはできない「物質名詞」ですが、piece や sheet は使えませんね。そこで、ミルクは a glass of milk (ア・グラス・オヴ・ミルク) 「ガラスコップ (グラス) 1杯のミルク」、コーヒーは a cup of coffee (ア・カップ・オヴ・コーヒー) 「カップ1杯のコーヒー」を使いましょう。

## She drank a glass of milk.

(シー・ドランク・グラス・オヴ・ミルク。)  
「彼女は (グラス1杯の) ミルクを飲んだ。」

## We had a cup of coffee.

(ウィ・ハド・カップ・オヴ・コーヒー。)  
「私たちは (カップ1杯の) コーヒーを飲んだ。」

というふうになります。

しかし、「カップ1杯」とか「グラス1杯」のような堅苦しい言い方じゃなく、もっとざ

っくりと言えないのかということもあるはずですね。そんな場合に手っ取り早いのが、「少しだけ」、「いくらか」、「たくさん」というこの3つの表現を使うことですね。

たとえば

**彼女は少しのミルクを飲んだ。**

**私たちはたくさんのコーヒーを飲んだ。**

としてみましょう（日本語が不自然ですが便宜上の表現です）。

「少しの」には a little（ア・**リ**トル）、「たくさんの」は much（**マ**ッチ）という語を使います。

**She drank a little milk.**

（**シー**・ド**ラ**ンカ・**リ**トル・**ミ**ルク。）「彼女は少しのミルクを飲んだ。」

**We had much coffee.**

（**ウィ**・**ハ**ド・**マ**ッチ・**コ**フィー。）「私たちはたくさんのコーヒーを飲んだ。」

となるわけです。

[最初のほう](#)で挙げた「紙」の例ですが、ここでも、紙が何枚あるかは実際に数えてみなければわからないこともありますね。そんなとき、「ちょっと待ってくださいね。1枚、2枚…」などといちいち数えていただけません。ざっくりと

**紙がいくらがある。**

と言ってしまったほうが早いし現実的です。そこで

**There is some paper.**



(ゼアリズ・サム・ペーパー。)「紙がいくらある。」

と言えはいいのです。

数えられない名詞なので、be 動詞は、複数形ではなく単数形になるので注意しましょう。

というわけで、正確な数量を表す必要のない場合は、a little、some、much といったざっくりと量を表す単語やフレーズを使うのが普通だと言えます。

では、こういう場合はどうでしょう？（カフェなどで注文するときの表現です。）

**紅茶ください。**

「紅茶」は tea (ティー) ですね。最後には「お願いします」という意味の please (プリーズ) をつけると印象が良くなりますね。

**Some tea, please.**

(サム・ティー・プリーズ。)

ではお店の人もちっと困りますね。やはり注文は「ざっくり」ではいけないわけで、「うちはそんな出し方してません」と言われてしまいます。

では

**A cup of tea, please.**

(ア・カップ・ティー・プリーズ。)

まあ、正確でいいのかもしれませんが、わざわざ a cup of と言うと「じゃあなんですかい？うちの店ではバケツでお出しするとでも…？」などと皮肉を言われることはないでしょうが… たとえば、もっと複雑な注文になり

**コーヒー2つと紅茶3つ、ミルク2つ…**

などということになると

## Two cups of coffee, three cups of tea, and two glasses of milk...

(トゥー・カップソヴ・コフィー・すりー・カップソヴ・ティー・アンド・トゥー・グラスヴ・ミルク・プリーズ。)

となると、「早よせんかい！」と思われてしまうかもしれませんね。

というわけで、ずばり、レストランなどのお店での注文は、**数えてもいいのです**。メニューの1項目として、お店で出す量はあらかじめ決まっているので、数えられる形になっているというわけです。

よって

## Two coffees, three teas, and two milks, please.

(トゥー・コフィーズ・すりー・ティーズ・アンド・トゥー・ミルクス・プリーズ。)  
「コーヒー2つと紅茶3つ、ミルク2つください。」

と言えばいいのです。

もう少しみてみましょう。

コーヒーなどの飲み物が出れば、次に欲しいのは「ケーキ」ですね。しかし、この「ケーキ」ですが、可算か不可算かというところちょっと微妙です。

たとえば

**私はケーキを食べた。**

という文章があるとします。「ケーキ」は cake (ケイク)、「食べた」は eat (イート) の 過去形を使いましょう。

## I ate a cake.

(アイ・エイト・ケイク。)  
「私はケーキを（丸ごと）食べた。」

と言う場合は、cake は数えられる名詞として使われていますが、焼いたときそのままのケーキ丸ごとの（まだ切っていない）状態を言います。

ケーキの大きさにもよりますが、大きく焼いて小さく切って分けて食べるのが普通ですね。つまり、「丸ごと」以外の「ケーキ」は不可算名詞の扱いです。

よって

## I ate some cake.

(アイ・エイト・サム・ケイク。)  
「私はケーキを（いくらか）食べた。」

でもいいですし、「切り分けた」という感じを出すなら、「薄切り」という意味の slice（スライス）をよく使います。

## I ate a slice of cake.

(アイ・エイト・スライソヴ・ケイク。)  
「私はケーキを（1切れ）食べた。」

ということになるわけです。

以上、数えられない名詞の数量の表し方を学びましたが、ここで紹介した以外にも、いろんな不可算名詞の数量を表す表現があります。巻末の[付録](#)のところで、「[数えられない名詞の数量表現リスト](#)」をつけていますので、参考にしてください。

[目次に戻る](#)

### 集合名詞

前のセクションでは、「数えられる名詞」と「数えられない名詞」についてみてきまし

た。

ここでは、「**集合名詞**」という種類の名詞について学んでみましょう。

これまでも、いろんな種類の名詞が出てきて、ただでさえややこしいのに、またこんな名詞があるのか？と、ちょっとうんざりしている人もいるかもしれませんね。

しかし、この「集合名詞」、けっこう便利なのです。

そもそも、「集合名詞」とは、「集合住宅」などのように、複数の同種のものが集合して「1つ」のものを成しているような名詞のことを言うのですが、どう便利かと言うと

### **父、母、兄、姉、私、弟、妹はヨーロッパを訪れる。**

という文章があるとします。

「父」は father (**フ**ァーザー)、「母」は mother (**マ**ザー)、「兄」は older brother (**オ**ウルダー・**ブラ**ザー)、「姉」は older sister (**オ**ウルダー・**ス**ィスター)、「弟」は younger brother (**ヤ**ンガー・**ブラ**ザー)、「妹」は younger sister (**ヤ**ンガー・**ス**ィスター)、「ヨーロッパ」は Europe (**ユ**アロプ)、「訪れる」は visit (**ヴィ**ジット) を使い、「私」を表す I (**アイ**) は「~と」という意味の**接続詞** and (**ア**ンド) の後に持ってきます。

こうしてできた文章は

## **My father, mother, older brother, older sister, younger brother, younger sister, and I visit Europe.**

(**マイ・フ**ァーザー・**マ**ザー・**オ**ウルダー・**ブラ**ザー・**オ**ウルダー・**ス**ィスター・**ヤ**ンガー・**ブラ**ザー・**ヤ**ンガー・**ス**ィスター・**ア**ンド・**アイ**・**ヴィ**ジット・**ユ**アロプ。)「父、母、兄、姉、私、弟、妹はヨーロッパを訪れる。」

となり、ずいぶんと長たらしい文章になります。下線部分の主語が長すぎるからですね（これじゃ、なかなかヨーロッパには到着しませんね）。

これを何とか1つの名詞で済ませられないか？というのが「集合名詞」で、ここでは、family (ファミリイ)「家族」という単語を使えばいいわけです（日本語でも同じですね）。

## My family visits Europe.

(マイ・ファミリイ・ヴィズィツ・ユアロッパ。)「私の家族はヨーロッパを訪れた。」

ということになります。

「1つ」のまとまったユニットとしてとらえるため、動詞は、3人称単数の扱いになっていますね。

もう1つ例を挙げてみましょう。

### **山田、鈴木、田中、佐藤、加藤は新製品を開発する。**

「新製品」は new product (ニュー・プロダクト)、「開発した」は develop (デヴェロプ) という動詞を使って

## Mr. Yamada, Mr. Suzuki, Mr. Tanaka, Mr. Sato, and Mr. Kato develop a new product.

(ミスター・ヤマダ・ミスター・スズキ・ミスター・タナカ・ミスター・サトウ・アンド・ミスター・カトウ・デヴェロパ・ニュー・プロダクト。)「山田、鈴木、田中、佐藤、加藤は新製品を開発する。」

となり、メンバーの数が増えると大変になってきますね。

これを1語で済ませるためには、team (チーム) という単語を使えばいいわけです。

## The team develops a new product.

(ザ・チーム・デヴェロプサ・ニュー・プロダクト。)「そのチームは新製品を開発する。」

ここでも、「1つ」のまとまったユニットとしてとらえるため、develop という動詞は、3人称単数の扱いになっています。

このように、集合名詞を単数として扱って、動詞にも3人称単数を使うというのが、ルールになっていますが、実はこれは、アメリカ英語のルールです。イギリス英語では単数ではなく複数としてとらえることも多いようです。ここでは、そういうこともあるということだけ記憶にとどめておいてください。

以上、「集合名詞」について学習しましたが、巻末の[付録](#)のところで、集合名詞にはどんなものがあるのかという「[集合名詞リスト](#)」をつけています。

[目次に戻る](#)

## 複合名詞

前のセクションでは、集合名詞について学びました。

ここでは、「**複合名詞**」という種類の名詞についてみていきましょう。

「複合名詞」とは、2つ以上の単語が1つになって新しい名詞を形成しているものを指します。

どういう名詞があるかというと

1. **単純に2つ以上の単語を並べたもの**
2. **2つ以上の単語をハイフンでつないだもの**
3. **2つ以上の単語が結合し1語になったもの**

があります。

いくつか具体的な例を挙げてみると次のようになります。

### 1. 単純に2つ以上の単語を並べた複合名詞

<b>bus stop</b> (バス・ストップ)	バス停	bus (バス) + stop (留まる)
<b>dining room</b> (ダイニング・ルーム)	食堂	dining (食べること) + room (部屋)
<b>full moon</b> (フル・ムーン)	満月	full (満ちた) + moon (月)

### 2. 2つ以上の単語をハイフオンでつないだ複合名詞

<b>check-in</b> (チェック・イン)	チェックイン	check (確認する) + in (入る)
<b>mother-in-law</b> (マザー・イン・ロー)	義理の母	mother (母) + in (~上の) + law (法律)

### 3. 2つ以上の単語が結合し1語になった複合名詞

<b>breakfast</b> (ブレイクファスト)	朝食	break (破る) + fast (断食)
<b>greenhouse</b> (グリーンハウス)	温室	green (緑) + house (家)
<b>sunset</b> (サンセット)	日没	sun (太陽) + set (沈む)

以上、この Lesson では名詞について学びました。

[目次に戻る](#)

# コラム

[コラム1 : 「母音」とか「子音」って何？](#)

[コラム2 : なぜ「I」だけ大文字なの？](#)

[コラム3 : 文法の「格」って何？](#)

[コラム4 : なぜ「ダミー主語」なんてものがあるの？](#)

[コラム5 : なぜ3人称単数現在の動詞だけ「-\(e\)s」をつけるの？](#)

[コラム6 : なぜ「y」を「i」に変えなきゃならないの？](#)

[コラム7 : なぜ規則動詞と不規則動詞があるの？](#)

[コラム8 : なぜ be 動詞は主語によって違うの？](#)

[コラム9 : なぜ時間の言い方には o'clock をつけるの？](#)

[コラム11 : なぜ「o」の後に「-es」をつけるの？](#)

[コラム12 : なぜ「-f」を「-v」に変えて「-\(e\)s」をつけるの？](#)

[コラム13 : 「1つの～」というとき「a」+名詞と「one」+名詞はどう違うの？](#)

[コラム14 : いろんな時間の言い方](#)

[目次に戻る](#)



## コラム1 : 「母音」とか「子音」って何？

まず、母なる音と書いて母音（ぼいん）、子供の音と書いて子音（しいん）と読みます。

「音に親子の区別があるの？」とってしまいますが、「母音」とは、日本語で言う「あいうえお」にあたる音のことです。母音が入ることで安定した音になりますが、人間も同じですね。小さな子供にとっては「お母さん」は安心の存在。最近の日本では大きくなった子供も不安定なのか、入社式などにも現れたりする存在です。

それはさておき、「母音」が「あいうえお」なら「子音」は「かきくけこ」や「さしすせそ」といった「あ行以外の音」かと言うと、そう簡単に説明できないのが悩ましいところなのです。

言い換えれば、日本語の文字で母音は文字で表記することができても、子音はできません。子音を表す文字が日本語にはないからです。たとえば、「か」という文字は、「k」という子音と「a」という母音が合体した文字なのです。強引に分解してみると以下ようになります。



ということで、子音はアルファベットで表記するしかありません。

「母音」と「子音」を挙げると次のような表になります。

母音	アルファベットの <b>a, e, i, o, u</b> で表される音
子音	アルファベットの <b>b, c, d, f, g, h, j, k, l, m, n, p, q, r, s, t, v, w, x, y, z</b> で表される音

しかし、この「子音」だけを発音するというのはけっこう難しいのです。すべての音が母音と組み合わせられる日本語を母国語とする日本人にとってはとくにそうです。

たとえば「b」の音だけを発音しているつもりでも「ビー」(bi)などと知らず知らずのう

ちに「母音」が入ってしまうことがありがちです。「b」の音だけだと明瞭に聞こえる音にならないためよけいにそうってしまうのだと思いますが、そのために「日本人の英語は聞き取りにくい」ということになります。また、リスニングのときも「子音」のみを聞き取るということが苦手になります。聴きながらつい「母音」を探してしまい、結果的に、日本人はリスニングが弱いということになるのかもしれませんが。

[コラムトップに戻る](#) | [目次に戻る](#)

## コラム2 : なぜ「I」だけ大文字なの？

「あなたは」は you だし、「彼は」は he、「彼女は」は she というふうに、他の**人称代名詞**が小文字で表記されるのに対して、なぜ「私は」の I だけが**大文字**なのでしょう？

もちろん、you も he も she も、文章の頭に来るときは**大文字**になります。他の英単語もそうですね。でも「I」は文章の先頭に来て途中に来ても**常に大文字**なのです。なぜ「I」も小文字にして「i」と表記しないのでしょうか？ なんと不思議な現象ですね。

この謎を解くために、古い時代の英語を見てみましょう。古英語（こえいご）と呼ばれる450～1100年ごろから中英語（ちゅうえいご）と呼ばれる1100～1500年ごろには、「私は」に該当する人称代名詞は ich という語でした。ドイツ語に似ていますね。ich は ic とも書かれることがあり、やがて、語尾の c が落ちて「i」という語になっていきます。最初はおそらく小文字のままだったと思われます。

でもこの「i」という表記ですが、これが文章中にこのまま使われているとしたらどんな印象を受けますか？ 見ての通り小文字の「i」というのは小さな文字です。他の文字の中に混ざっていたら思わず見過ごしてしまうかもしれません。あまりにもぞんさいな扱いですよ。

「私は」という1人称主格を表す大事な語です。こんな扱いでいいのか？ と思わざるを得ませんね。実際にそういう意見があったことだと思いますが、文章中で「私は」を意味するこの「i」だけ、他の単語の「i」よりも少し縦長に表記するようになってきたのです。そしてさらに、この長めの「i」の代わりに大文字の「I」が使われるようになったと言われています。

ちなみに、最近のチャットなどのテキストメッセージでは「I」を「i」で表記する人も多いようです。大文字にしよとすればキーボードなら Shift キーを押す必要があるのもそれがめんどろなのかもしれませんが、そのうち、「私は」という語も「i」になってしまう日も遠くないのかもしれませんが。

[コラムトップに戻る](#) | [目次に戻る](#)

### コラム3 : 文法の「格」って何？

「[人称代名詞の種類](#)」のセクションで挙げた例を思い出してみましょう。

**私** **あなた** **贈る** **プレゼント**

という4つの単語を挙げて説明しましたが、このままでは、どの語が主語になり、目的語になるのかわかりません。

「格」とは、そういった[お互いの関係を表すために貼るラベル](#)だと考えることができます。[文章の中の機能・役割](#)と言い換えてもいいでしょう。

たとえば、「私」が主語になるのであれば、それが「**主格**」になります。そして、「私」を意味する英単語の中から[「主格」バージョン](#)のものを選びます。つまり、「I」ですね。

次に、「あなた」ですが、「あなた**に**」という目的になるのであれば、「**目的格**」となります。また、「プレゼント」が「プレゼント**を**」という目的語になるとすれば、これも「**目的格**」ということになります。

厳密には、目的語には、**間接目的語**（かんせつもくてきご）、**直接目的語**（ちよくせつもくてきご）という2種類の目的語があります。「あなた**に**」などの「～に」を表す目的語が間接目的語で、「あなた**を**」などの「～を」表す目的語が直接目的語になります。さらに、間接目的語の「目的格」を「**与格**（よかく）」、直接目的語の「目的格」を「**対格**（たいかく）」とも呼びます。もっと簡単に、それぞれ「**に格**」、「**を格**」と呼ぶこともできます。

これらの目的語についても、[「目的格」バージョン](#)の語を使います。「あなた**に**」であれば you、「プレゼント**を**」であれば present という名詞の「目的語（を格）」バージョンを使うというのがルールなのです。ただし、現代英語では、普通名詞の「格バージョン」はないため present は present のままになります。

また、この「プレゼント」に「**私**のプレゼント」と所有を表す「私の」という語を付け加える場合は、「私」の「[所有格バージョン](#)」を使い my present となるわけです。

ちなみに、文法では、「主格」、「所有格」、「目的格」など、名詞がいろんな格バージョンを持っていることを「格変化をする」とか「格に合わせて活用する」という言い方をします。

先ほど「現代英語では普通名詞の格バージョンはない」ということを言いましたが、「じゃあ、昔は普通名詞も格に合わせて格変化していたの？」という疑問を持つ人もいるかもしれません。その答は「Yes」です。

そもそも、「格」には、「主格」、「対格」、「与格」、「属格（ぞっかく）（＝所有格）」の他にも、「奪格（だっかく）」、「処格（しよかく）」といった格もあります。しかし、英語の格変化は、せいぜい最初の4つくらい（「主格」、「対格」、「与格」、「属格」）です。そして、普通名詞にも格変化があったのは「古英語（こえいご）」と呼ばれる時代（450年～1100年ごろ）のことでした。

たとえば、古英語で「人間」を意味する mann（マン）という単語を例に挙げてみると

格	単数	複数
主格	mann（マン）	men（メン）
属格（所有格）	mannes（マンネス）	manna（マンナ）
与格（に格）	menn（メン）	mannum（マンヌム）
対格（を格）	mann（マン）	menn（メン）

のように変化していたのです。

つまり、「人間が」というときは mann になり、「人間に」というときは menn になり、「人間の」というときは mannes となり、「人間を」というときは mann になるわけです。しかも複数形になるとまた違ってきますね。

こういった変化にはいくつかのパターンがあり、単語ごとにそれぞれ異なる変化をしていました。日本語の「てにをは」が単語によってそれぞれ微妙に変化していたと考えることもできます（「もういいです！さいなら～」と言いたくならないような「ややこしさ」ですね）。

こんなことをやってどんなメリットがあったのか？と問わずにいられませんが、これは、英語をはじめ多くの言語の祖先である「インド・ヨーロッパ言語」に共通する特徴でもあります。ラテン語もゲルマン語もすべてそうでした。

そして、そのメリットとは、ずばり、どんな語順で単語を並べ替えても正確に意味が通じるということだったのです。

しかし、英語の場合、人称代名詞などの一部を除いて、この格変化を失ってしまいます。そのため語順に頼らざるを得なくなり、「①主語、②動詞、③間接目的語（～に目的語）、④直接目的語（～を目的語）」といった固定された語順で文章を作らなければならなくなりました。③の目的語と④の目的語を入れ替えるだけで全く意味が異なる文章になってしまうのはこういうわけなのです。

[コラムトップに戻る](#) | [目次に戻る](#)

## コラム4 : なぜ「ダミー主語」なんてものがあるの？

「主語」とか「動詞」だとかいうだけでもややこしいのに、「ダミー主語」ってそれ何？って感じですね。「ダミー主語」があるなら「本物の主語」もあるのか？ だいたい、主語に本物も偽物もあるのか？ などと理屈をこねてみたくもなります。

というわけで、「なぜ『ダミー主語』なるものが必要なのか？」というミステリーに迫ってみたいと思います。

まず前提として、日本語には主語は必ずしも必要ではありませんが、英語は必ず主語が必要な言語なのです。それが英語の文法の約束事です。

ところが、いろんな状況を表現する場合に、明確な主語がないという場合が出てきます。

でも、前述のように、英語は必ず主語が必要な言語なので、そこに何らかの主語を入れてやらなければならない。それがダミーの主語というわけなのです。

わかったような、わからないような話かもしれませんね。では、「明確な主語がない」とはどういう場合なのか、例を挙げてみましょう。

### 雨が降る

というような天気を表す場合がそうです。

日本語の感覚で考えると「雨が」が主語で、「降る」が動詞なので、雨 = rain (れイン)、降る = fall (フール) という単語を使って

### Rain falls.

でいいんじゃないの？と思うかもしれません。

確かに、こういう言い方は全くないわけではなく、文法的に間違いではありません。

ただ、普通に「雨が降る」とか「雪が降る」という場合、こういう言い方をしません。それは、古英語（450年～1100年ごろ）の時代から続いている表現の傾向があるのですが、どういう言い方をすると

### rain を動詞として使う

のです。

rain や snow には「雨」、「雪」という名詞の意味もありますが、それぞれ、「雨が降る・雨を降らせる」、「雪が降る・雪で覆う」という動詞の意味もあり、「雨が降る」とか「雪が降る」という場合、その動詞の意味を使って表現しようとするクセがあるのです。

さて、rain や snow を動詞として使うとなると、主語を何にするかということになります。rain や snow には「雨」や「雪」の名詞の意味もあり、動詞にも「雨が降る」「雪が降る」という意味が入っているので、「雨」や「雪」を主語にして Rain rains とか Snow snows とすると、日本語で言う「馬から落馬」や「頭痛が痛い」よりひどいことになってしまいます。

そこで、それ自身は何も意味のない「空（から）の主語」として It を入れて

## It rains.

(イト・**レ**インズ)「雨が降る。」

## It snows.

(イト・ス**ノ**ウズ)「雪が降る。」

とするわけです。

こういった「ダミーの it」は、雨や雪が降る以外にも

## It is (It's) sunny.

(イトイズ (イツ)・**サ**ニー)「日当たりが良い、晴れた。」

## It is (It's) cold.

(イトイズ (イツ)・**コ**ールド)「寒い。」

など、天気・気候全般を表す場合に使われます。

ちなみに、時間や日付を表す場合も it を使って



## It is Monday.

(イティイズ・マンデイ・トゥデイ)「(今日は) 月曜日だ。」

## It is three.

(イティイズ・スリー)「(今) 3 時だ。」

などと言いますが、こういう場合の「it」についても「ダミー主語」と呼ぶことがあります。

「呼ぶことがある」というのは、文法学者のなかでも意見が分かれているからで、日付や時間の「it」はそれぞれ、「date (日付)」、「time (時間)」を指しているので「ダミー主語」ではないという人もいます (本書では、大半の文法説明資料に準じて、「ダミー主語」と同等の扱いをしています)。

ちなみに、天候・天気「it」すら、「何かを指しているものがある (あった) はずで、ダミー主語とは言えない」と考える文法学者もいるようです。

確かに、そのほうが話はシンプルですよね。たとえば、It rains の it は sky (空) を指しているとか、It is cold の it は air を指していると考えてもいいわけです。

ただ、悲しいかな、古代に戻って、最初にこの表現を使った人に、「すみません、その it は何を指しているんですか？」と聞くわけにはいかないのが、本当のところはわかりません。

言語の研究とは、こういった調べようのないミステリーを、現存する (少ない) 文献などをもとに探求していく世界だと言えるでしょう。

[コラムトップに戻る](#) | [目次に戻る](#)

## コラム5：なぜ3人称単数現在の動詞だけ「-(e)s」をつけるの？

特別な理由もないのに（なさそうなのに）「なぜこれだけ？」といった例外は、気持ちの上でもすっきりしないものです。

しかし、言語の場合、それが歴史的な変化の「名残」であったりすることもよくあります。たとえば、人間には「尻尾」がないのになぜ「尾てい骨」があるのかというと同じです（進化の名残だからですね）。

なにしろ言語というものは、人々が毎日使っているわけで、変化するときも、使いながらの進行形で徐々に変化していきます。つまり、「みなさん、もうすぐ英語が大きく変わります。何月何日以降は新しい英語を使ってください」という統制はできません。生き物のように勝手に変わっていき、変わり始めたら誰も止めることはできません（逆戻りもできません）。結果として、何世紀も経ってその変化が定着してから、初めて「このように変わった」と言えるわけです。

前置きはこれくらいにしておきましょう。さっそく、「3人称単数現在のみ変化」について考えてみましょう。確かに、ルールとしては中途半端だと言わねばなりませんね。

考えてもみてください。どうせ変化させるのなら、いっそのこと1～3人称のすべてにおいて変化させるべきですよ。人称代名詞に合わせてそれぞれ変化するから意味があるのです。その変化の形を見ることで、その人称（誰が主語なのか）がわかるからです。その特性を利用すれば、主語を省略することだってできるからです。

つまり、この「3人称単数現在のみ変化」については、最初からそう決まっていたのではなく、途中でルールが変わっていったのに、**そこだけ残ってしまった**ということが言えるかもしれません。

ちなみに、昔の英語はどうだったかを調べてみると、やはりその当時の動詞は3人称単数だけでなく、1人称や2人称もそれぞれ違う変化をしていました。

たとえば、中英語（1100～1500年）と呼ばれる時代の動詞の活用を見てみましょう。現代英語の make（**メイ**ク）「作る」という動詞のルーツである maken（**マー**ケン）という動詞の現在形活用です。

## maken (マーケン)「作る」の活用 (現在形)

1 人称単数 (私は／が) <b>ic, ich, I</b>	<b>make</b> <u>e</u> (マーケ)
2 人称単数 (君・お前は／が) <b>thou</b>	<b>make</b> <u>est</u> (マーケスト)
3 人称単数 (彼／彼女／それが) <b>he/she</b>	<b>make</b> <u>eth</u> (マーケス)
1～3 人称複数 <b>we/ye/thei</b>	<b>maken</b> (マーケン)

となります。

ちょっと補足しておく、当時の英語は「共通語」として統一されたものではなく、地域ごとにバラツキがありました (それが統一されていくのは印刷が普及してからのことです)。

ここで、3 人称単数の活用形を見てみると「**makeeth**」となっていますね。この「-eth」と言う語尾は、もともと南部イングランドのバリエーションでしたが、16～17 世紀になると、北部イングランドの方言である「-(e)s」に置き換えられるようになります。「**makeeth**」が「**makes**」に変化していったわけです。これが、「3 人称単数現在」のルーツなのです。

そして、その後、1 人称や複数形の活用はなくなっていきます。もともと「-e」や「-en」の語尾なので音としても弱くインパクトがありません。その語尾が落ちて活用しなくなったというのも納得できますね。しかし、3 人称単数の「-(e)s」はそのまま残っていったのです。

これが、3 人称単数現在形だけに語尾「-s」がつくようになったいきさつと言えるでしょう。

「なるほど」と納得できる人はここで終わりにしていただいてもかまいません。しかし、なかには、探求心の強い人もいるかもしれません。

上の活用表をながめていると、「2 人称」が「**makeest**」になっているが、なぜ、3 人称の「**makes**」がそのまま残って「2 人称」の「**makeest**」は残らなかったのか？音としては「-s」よりも「-st」のほうがインパクトがあるのでは？ということですね。

鋭い指摘ですね。ごもっともです。

これは、一言で言うと、当時の「2人称」と現代の「2人称」が異なるからです。

表の中で「(君・お前は／が) **thou**」と表記していますが、この **thou** という代名詞は英語以外のドイツ語やフランス語などにある「親しい間柄で使う2人称」と同じです。しかし英語の場合、近代になるとこの種類の人称代名詞は使われなくなり、代わりに **you** が使われるようになります。

では、現代英語の2人称代名詞である **you** はどこから来たのかというと、表の一番下の欄に「1～3人称複数 **we/ye/they**」と書かれていますが、その真ん中にある「**ye**」がそのルーツです。つまり、活用としてはもともと「複数形」なので、その語尾はなかったというわけです。

「-st」の語尾を持つ2人称 **thou** がなくなったため、結果的に「-s」だけが残ったというわけですね。

[コラムトップに戻る](#) | [目次に戻る](#)

## コラム6 : なぜ「y」を「i」に変えなきゃならないの？

せっかく英語の「動詞」を覚えようとしているのに、「y」を「i」に変えて云々とか、わけもわからないめんどろな手順があるだけでイヤになりますね。そもそも、なぜ「y」を「i」に変えなければならないのか、そこからして納得できないという人もいるかもしれません。

そこで、ここでは、その理由を追跡してみましょう。

実は、「y」を「i」に変えて何かをするというのは、英語のクセとも言えるのです。それが証拠に、**「y」を「i」に変えるのは、動詞の3人称単数現在形を作るときだけじゃない**からです。動詞の過去形を作るときも、名詞の複数形を作るときも、まず、**「y」を「i」に変える必要がある**のです。

1. **動詞の3人称単数現在形**：子音 + **-y** で終わる動詞は **「y」を「i」に変えて「-es」をつける**
2. **動詞（規則動詞）の過去形**：子音 + **-y** で終わる動詞は **「y」を「i」に変えて「-ed」をつける**
3. **名詞の複数形**：子音 + **-y** で終わる名詞は **「y」を「i」に変えて「-es」をつける**

こうしてみると、この2つのアルファベットである「y」と「i」に何か関連性がありそうですね。

その昔（1100～1500年ごろの「中英語」と呼ばれた時代）、「y」と「i」は同じ音を表していて、「y」は「i」のバリエーションとして使われることもありました。とは言え、いちおう使い分けのようなものはあり

- ・「i」は単語の**最初や途中**の音
- ・「y」は単語の**最後**（「i」よりも長い音）

という区別がされていたようです。

「y」のほうが「i」よりも長い音を表すというルールもあったようで、そこから単語の最後の文字として使われていたのかもしれない。

このルールをもとに考えてみましょう。ここからは、この事例に該当する歴史的資料がないため、一部推測になります。

たとえば、try という単語に 3 人称単数現在の「-s」をつけるとします。

**try → try + -s → trys**

さて、こうなると、「s」という文字が単語の最後に来ることになるので、「y」は最後の文字ではなく途中の文字になってしまいます。そうなると、発音も、**長めの音にならなくなってしまいます**（上のルールから、長めに発音するのは最後の「y」だからですね）。「トライズ」ではなくて「トリス」と発音される可能性も出てくるでしょう。

それはちょっと困りますよね。やっぱり「トライズ」と発音させたいわけです。

そこで、何らかの方法が必要になってきます。

try という単語の活用形であることを示すには、「トライ」の「イ」という音をキープしたい。そのためには、「y」を「i」に変えて、その後続く「-s」との間に**何か母音を入れて切り離して**やればいいわけです。つまり、長めの音である「y」の音を維持するために「e」を余分に入れたということです。そういう意味では、「y」を「i」に変えて「es」と言うより、**「y」を「ie」に変えて「s」**をつけたと言ったほうがいいかもしれません。

ところで、play などのように「y」の前の文字が母音の場合、「y」を「i」に変えずにそのまま「-s」をつけるのでしたね。

**play → play + -s → plays**

これも、「s」をつける時点で、「y」は単語の最後の文字ではなく途中の文字になってしまうので、try と同じように **plaies** とすればいいじゃないか？という疑問もわいてくるかもしれません。

しかし、ここでポイントとなるのは、「y」の前に「母音」が来ていることです。「母音」が来ることで、「y」の後に「s」が来ても音の長さそのままキープできます。だから、このままで語尾に「-s」だけをつければよいわけです。また、**plaies** とすれば「プレイズ」自体の発音も変わってしまう可能性もあります。

非常に細かい話なのですが、文字表記のルールには、こういった重箱の隅をつつくようないきさつがあるので

以上、「y」を「i」に変えるというルールについて、「3 人称単数現在」や「動詞の過去形」、「名詞の複数形」の場合を取り上げて考えてきましたが、この「y」→「i」ルールが適用されるのはそれ以外にもたくさんあります。

「3人称単数現在」や「動詞の過去形」、「名詞の複数形」もすべて、元ある単語に別の語尾をつける変化ですが、このように単語の後につける「語尾」を「**接尾辞**（せつびじ）」と言います。英語には、ここで取り上げた以外にも、形容詞から副詞を生成したり、名詞から動詞を生成するなどの目的でつける「接尾辞」などがあります。

そういった「接尾辞」をつけるときに使われるのが、この「y」→「i」ルールというわけです。

[コラムトップに戻る](#) | [目次に戻る](#)

## コラム7：なぜ規則動詞と不規則動詞があるの？

実は、英語の動詞には strong verb (スト**rong**・**verb**) 「強い動詞」と weak verb (ウイーク・**verb**) 「弱い動詞」というのがあります。

動詞に「強い」とか「弱い」とか、なんともヘンな考え方ですよ。文章を書くときのノウハウなどで、「より意味や印象の強いものを『強い動詞』という」という考え方もあるようですが、ここでは関係ありません。

では、文法で言う「強い動詞」、「弱い動詞」とは何なのでしょう？それは、一言で言うと、活用の変化が「大きい」か「小さい」かということなのです。

つまり、ここでは、過去、過去分詞の活用が「大きい」ものが「強い」動詞となり、「小さい」ものが「弱い」動詞ということになります。そして、何をもって「大きい」とするかというと、アクセントのある部分の母音に変化すると「大きい」＝「強い」動詞となり、アクセントのある母音は変化せずに語尾の発音のみが [d] や [t] の音で終わる動詞は変化が「小さい」＝「弱い」動詞となります。

このような「強い・弱い」の動詞の区別は英語の祖先である「ゲルマン語」のときからあったようですが、「強い動詞」、「弱い動詞」という言い方を考案したのは、おなじみ『グリム童話集』の著者、「グリム兄弟」の兄のほうで文法学者でもあったヤーコブ・グリムだと言われています。

では、実際に例を挙げてみましょう。

現代の英語で例を挙げると、sing (ス**ing**) 「歌う」という動詞があります。その活用は

**sing -- sang -- sung**

となりますね。

ご覧のように、下線の母音が「i」から「a」、「u」と変化していますね。母音の変化にはいくつかパターンがありますが、このようにアクセントのある母音に変化するものを「強い動詞」と呼びます。さすがに、「母」が変身するわけですから、インパクトも強いということなのかもしれません。それに対して

**play -- played -- played**

のように「プレイド」と、過去・過去分詞の最後の発音が [d] あるいは [t] の音で終わる動詞を「弱い動詞」と呼びます。確かに、後から「付け足し」のように語尾が変化するだけでは「弱い」と言えるかもしれませ



ん（語尾の母音にはアクセントもありません）。

つまり、いわゆる「規則動詞」が「弱い動詞」ということか、と気づいた人は勘がいいですね。まさにその通りです。ところが、じゃあ、「不規則動詞」が「強い動詞？」かと言うと、そのほとんどがそうですが、かなり例外もあります。「また例外か」ということにもなりますが、これについては、後で詳しく説明します。

ここで少し歴史を見てみましょう。

最初のほうで、英語の祖先である「ゲルマン語」にも「強い・弱い」の区別があったと言いましたが、さらに「ゲルマン語」の先祖をたどると、「インド・ヨーロッパ語」という言語になります。この「インド・ヨーロッパ語」のころは「強い動詞」、「弱い動詞」という種類はありませんでした。動詞と言えば、母音が変化する「強い動詞」だけだったのです（もちろん、「強い動詞」という言葉もまだ存在していません）。

ところが、「インド・ヨーロッパ語」から「ゲルマン語」に発展する時代になると、「名詞」から新しい動詞を作ったり、従来の動詞をちょっと変えて、ニュアンスの違う新しい動詞を作ったりする「革新」が行われました。こうして、新しくできたのが「弱い動詞」なのです。

しかし、そうやって作られた「弱い動詞」には、従来の動詞のような「母音を変えて活用させる」というルールが適用できなくなったのです。「どの母音を変化させるの？」とか「適当な母音がない」などということになったのでしょう。そこで、何らかの語尾をつけて活用させるようにしたわけです。それが現在の「-ed」、「-d」のルーツです。

というわけで、「なぜ英語には規則動詞と不規則動詞があるのか？」という問いの答えは、英語の祖先であるゲルマン語になったときに、「弱い動詞」という新しい動詞が誕生したからということになります。

それまでは、「強い動詞」だけで、7つくらいのパターンに沿って機嫌よく（？）母音を変化させながら活用していました（ただし、活用形は[人称代名詞](#)によってそれぞれ異なるためかなり複雑です）。

ところが、『ランチ』する？』とか、『ちょっとタバコ』してくるよ』とか、『犬にポチと名前』したよ』のような（単なる例えです）名詞から動詞を作るような傾向が増えてきて、新しいグループの動詞ができたわけですが、これでは今までの動詞のような活用はできないので、「語尾」でもつけるしかないということになったのでしょう。

ちなみに、人間だれしも「簡単なのがいい」ですよ。それは古代人も同じで、「語尾」をつけるだけですむなら楽です。パターンなんか無視してとにかく同じ語尾をつければいいだけです。そうこうしているうちに、それまで母音変化で活用させていたいわゆる「強い動詞」もいつの間にか「弱い変化」をする規則動詞になっていた…なんてことも多々あったようです。そのうち、今の不規則動詞も規則動詞になったりするかも

しませんね。

余談ですが、高校のときの英語の先生が、「三年生ともなると慣れてくるのかマヒしてくるのか、teach -- taught -- taught などという活用をさせる者があるんだよ」と嘆いておられたのを思い出します。何を隠そう、その一瞬、「え？違ったっけ」と思った自分がいました。つい、やってしまうことのある間違いですよ。この後何世紀もすれば、teach -- taught -- taught になっているかもしれません（正しい活用は[こちら](#)）。

話を戻しましょう。

不規則動詞の中でも「弱い動詞」があるという話をしましたが、それについて説明しておきましょう。

まず、「不規則動詞で弱い動詞」である動詞には以下の2つのパターンがあります。

### 1. 昔は強い動詞だった今は弱い動詞

### 2. 昔は規則動詞だった弱い動詞

つまり、かつては「強い動詞」であり、その活用をしていたのが、活用に変化が起きたため、「弱い動詞」になってしまったもの、そして、昔から「弱い動詞」であることに変わりはないが、その活用が変化して「規則動詞」と呼べなくなったものがあるということです。

1. の「昔は強い動詞だった弱い動詞」を挙げてみると

**lose -- lost -- lost**

**sleep -- slept -- slept**

のようなものがあり、2. の「昔は規則動詞だった弱い動詞」には

**keep -- kept -- kept**

**buy -- bought -- bought**

などが挙げられます。

いずれにしろ、「強い動詞」＝「不規則動詞」、「規則動詞」＝「弱い動詞」という図式は成り立ちますが、

その逆の「不規則動詞」＝「強い動詞」、「弱い動詞」＝「規則動詞」という図式は成り立たないということです。

以上を簡単にまとめてみると、「強い動詞」、「弱い動詞」という区別ができて、それが複雑に絡み合って今のような「規則動詞」、「不規則動詞」に発展したというわけです。

[コラムトップに戻る](#) | [目次に戻る](#)

## コラム8 : なぜ be 動詞は主語によって違うの？

英語以外にドイツ語やフランス語、スペイン語などを学習したことがあればわかると思いますが、そういう言語では、主語によって動詞の形がいちいち変化します。

厳密には主語だけでなく、現在か過去かといった「時制（じせい）」によっても変化するのです。つまり、1つの動詞が、「私」、「私たち」、「あなた」、「あなたたち」、「彼」、「彼ら」、「彼女」、「彼女ら」、「それ」、「それら」の10通りの主語について、それぞれ現在、過去、未来という変化をするわけで、合計30パターンの変化があることになります。

実際には、同じ変化をするものもあるため、種類としての数はもっと少なくなります。その活用した形を見て、逆に、その主語や時制を特定できるというメリットがあるのです。よって、同じ名詞が何度も続いて登場する場合、その名詞を省いても意味が通じるわけです。

ちょっと寄り道して、スペイン語の例を挙げてみましょう。スペイン語の be 動詞に相当する動詞に ser（セール）という動詞がありますが、主語に応じて以下のように変化します（現在形だけを取り上げています）。

私／私たち	soy (ソイ) / somos (ソモス)
あなた／あなたたち	eres (エレス) / sois (ソイス)
彼・彼女・それ／彼ら・彼女ら・それら	es (エス) / son (ソン)

よって、

### Soy Carmen.

という文章の場合、soy があるので、私という主語がなくても「私はカルメンです」ということがわかります。同様に、

### Es Carmen.

というと、「彼女はカルメンです」となり、主語がなくても、その文章の近辺に登場した女性の人物が主語になっているということが推測できるのです。

be 動詞だけでなく、他の動詞も主語や時制によって変化するため、主語を省いても文章が成り立つわけです。

こういった特徴は、英語やドイツ語、フランス語、スペイン語などの多くの言語の祖先であるインド・ヨーロッパ語の特徴でもあります。つまり、主語に応じて動詞が変化するというのは、ヨーロッパ系のほとんどの言語では当たり前の特徴だということになります。

英語の場合、古英語（450年～1100年ごろ）の時代に、be 動詞のもととなる動詞が2種類ありましたが、そのうちの1つである *wesan* の活用形を見ると、以下のようになっています。

私／私たち	<b>eom</b> (エオム) / <b>sind</b> (スインド)
あなた／あなたたち	<b>eart</b> (エアルト) / <b>sind</b> (スインド)
彼・彼女・それ／彼ら・彼女ら・それら	<b>is</b> (イス) / <b>sind</b> (スインド)

なんだか、現在の *am*、*are*、*is* に似ていると言えば似ているものもありますね。現在の *be* 動詞も古英語時代の名残を残していると言えます。

以上、*be* 動詞と呼ばれる動詞が主語によって変化するのは、英語だけでなく、ヨーロッパ系の言語に共通の特徴であることがわかりました。「だからどうなの?」、「だからと言って、このややこしさが解消されるわけじゃない」ということにもなりますが、「英語だけじゃない」ということを知ることで少しは気休め(?) になればと思う次第です(笑)。

[コラムトップに戻る](#) | [目次に戻る](#)

## コラム9 : なぜ時間の言い方には o'clock をつけるの？

そもそこの o'clock とは何か？ということから始めましょう。

「o」の後に「'（アポストロフィ）」がついて clock というわけですが、これはつまり「of the clock」の略なのです。意味的にはそう、「時計では」ということになります。

つまり、「3 時です」というのは

### It is three o'clock.

となり、その意味は、「**時計では** 3 時です」というわけなのです。

「え？じゃあ時計以外に何があるの？」ということになりますが、「お腹が空いたし、そろそろおやつ時間だなと思うので 3 時」というような「腹時計」ではなく、そう、昔は現代のような機械式の「時計」（clock）はありませんね。

空にある太陽の位置で「だいたいお昼ぐらいかな」とか「夕刻に近い」といった判断をしていたわけです。それを反映したのが「日時計」（sundial：サン**ダ**イアル）です。

もちろん、日本でもそうです。寅の刻とか、丑の刻などという言い方をしている、だいたい「おやつ」というのも、「八つ時（やつどき）」に食べたから「おやつ」と呼ばれるのでしたね。

西洋では、「日時計」に合わせて教会の鐘が時を告げるのですが、太陽の動きから時を読むわけですから、時間も季節によって変わりますし、地域によってもズレができます。「こちらはもう正午だけど、あそこの町ではまだ 11 時 55 分だ」ということにも起きてきます。そんなのどかな時代だったのです。

それが 14 世紀ともなると、機械式の時計が普及してくることになります。太陽の動きに合わせた日時計は季節や地域によって時間が違ってきますが、機械式時計は一日を均等に分割した時間を使いますので、いつでもどこでも「同じ」動きをします。

そうすると、日時計と機械式時計に誤差が出てきて、「今何時だ？」という問いに対しても、「さっき鐘が鳴ったから正午だろ」という人もいれば、時計を持っている人なら「時計によると 11 時 55 分だ」などとなるわけで、どちらの時間であるかをはっきりさせる必要があったのです。

それが o'clock = of the clock をつけることになった理由です。

では、最後に o'clock を使うときの注意点を挙げておきましょう。

**1. 「〇時ちょうど」のときにのみ使う（〇時〇分のときは使わない）**

○ : It is three o'clock.

× : It is three thirty o'clock.

**2. 1～12 時の時間にのみ使う（24 時方式では使わない）**

○ : It is thirteen.

× : It is thirteen o'clock.

**3. a.m. や p.m. といつしよに使えない（morning や afternoon は可）**

○ : It is three p.m.

○ : It is three o'clock in the afternoon.

× : It is three p.m. o'clock.

[コラムトップに戻る](#) | [目次に戻る](#)

## コラム10：なぜ「o」の後に「-es」をつけるの？

たかが名詞の複数形なのに、ただ「-s」をつけるだけでは終わらない英語。ほんとに頭が痛いですね。

watch (ウォッチ)「腕時計」のように **-ch, -s, -sh, -x, -z** で終わる名詞には、語尾に「-es」をつけるか、cherry (チェリー)「チェリー」のように、**子音 + -y** で終わる名詞は「y」を「i」に変えて「-es」をつける、はたまた、boy (ボーイ)「少年」のように**母音 + -y** で終わる名詞はそのまま「-s」をつけるというようなルールをやっと覚えたと思ったら、今度は

### 子音 + -o で終わる名詞は「-es」をつける

というルールが出てくるわけです。「もういい加減にしてくれ」と言いたくなってしまいますね。でも、英語だって、「みんなを困らせよう」と思ってやっているわけではありません。確かに、これまでの歴史を通して、そのときどきでやるのが違うし一貫性がないのですが、細かいところまでしっかり考えたうえでのことなのかもしれません。

[コラム6：なぜ「y」を「i」に変えなきゃならないの？](#)で、「y」の長い音をキープするために、後に続く「s」の音と切り離す必要があったということに触れていますが、これと同じことが言えます。

potato (ポテイトウ) や tomato (トメイトウ) の最後の「-o」の「オウ」という音が、後に「-s」をつけることで「ポテイトス」、「トメイトス」にならないように、間に余分な「e」を入れて「ポテイトウズ」、「トメイトウズ」としたわけです。

冒頭に挙げた **-ch, -s, -sh, -x, -z** で終わる名詞には、語尾に「-es」をつけるというルールも理屈的には同じだと言えます。単に「s」だけでなく、その前に「e」を入れることで、スムーズにゆったり発音できる「緩衝材」のような効果を出すこともできるとも言えるでしょう。

[コラムトップに戻る](#) | [目次に戻る](#)



## コラム 11 : なぜ「-f」を「-v」に変えて「-(e)s」をつけるの？

たかが名詞の複数形なのに、ただ「-s」をつけるだけでは終わらない英語。ほんとに頭が痛いですね。

watch (ウオッチ)「腕時計」のように -ch, -s, -sh, -x, -z で終わる名詞には、語尾に「-es」をつけるか、cherry (チェリー)「チェリイ」のように子音 + -y で終わる名詞は「y」を「i」に変えて「-es」をつける、はたまた、boy (ボーイ)「少年」のように母音 + -y で終わる名詞はそのまま「-s」をつける、さらに、potato (ポテイトウ)「ジャガイモ」のように子音 + -o で終わる名詞は「-es」をつけるといったルールすらまだ完全に覚えていないのに、今度は

### -f(e) で終わる名詞は「-f」を「-v」に変えて「-es」をつける

というような不可解なルールが登場するわけです。もうイヤになっちゃいますよね。

とは言え、ここまで、めんどくさいルールを学習してきたわけだし、いっそのこと、「毒を食らわば何とやら」ですね。ということで、このミステリーに迫ってみたいと思います。

ちょっと発音の話をしてしまおう。この「f」と「v」ですが、実は、本質的に同じルーツの音なのです。

どうやって発音するかというと、下唇を上の前歯で軽く噛むようにして発音しますね。歯と唇を摩擦させることで出る音です。そのままの状態でも声を出さずに息だけを出すと「f」の音で、声を出すと「v」の音になります(よかったらやってみてください)。

ちなみに、声を出さない音を「無声音(むせいおん)」と言い、声を出す音を「有声音(ゆうせいおん)」と言います。言い換えれば、「f」は「無声音のバリエーション」で「v」は「有声音のバリエーション」とも言えます。

さて、話は、古英語と呼ばれる時代(450~1100年ごろ)に戻ります。

そのころは、まだ「v」の文字はアルファベットの中に入っていませんでした。だから、「f」の文字で表記された音であっても、時と場合によって [v] の発音で読んでいたのです。

具体的な例を挙げてみましょう。当時の wulf という名詞があります。現代英語で言えば wolf (ウルフ)「狼(オオカミ)」に該当します。この単語を複数形にするには、語尾に「-as」をつけて

**wulf -- wulfas**

(ウルフ -- ウルヴァス)

というふうに活用していました。

「フ」の音が「ヴ」の音に変わっているのがわかりますね。当時は

### **無声音である「f」の音が「有声音」に囲まれた場合、有声音の「v」に変わる**

というルールがあったのです。「f」の前の「l」の音も有声音で、後の「a」も有声音（母音はすべて有声音）なので、「v」に変化するというわけです。

もっとも、これは、「ルール」と言うより、発音しやすいので自然にこうなってしまうといったほうがいいでしょう。

こういことから、古英語の時代に、「-f」で終わる名詞は複数になると「-v」+「複数を表す語尾」という1つの流れができていたと考えることができます。そして、時代が進み、アルファベットに「v」が追加されるようになると、「f」を「v」に変えるというルールになったのだと言えるでしょう。

[コラムトップに戻る](#) | [目次に戻る](#)

## コラム12 : 「1つの～」というとき「a」+名詞と「one」+名詞はどう違うの？

日本語はあまり「数」についてこだわらない言語だと言えます。

もちろん、数は重要です。「今月の売り上げはいくらくらいでした」など、こだわるところはしっかりこだわるのは他の国民性と同じですが、たとえば、誰かが「私は犬（猫）を飼っています」というときに、「私たちは1匹の犬（猫）を飼っています」のようなまどろっこしい言い方はしませんね。ひょっとして、1匹だけかもしれませんが、3匹飼っているのかもしれませんが、とりあえず、最初の会話の文章では「数」はいつでもいいわけです。

ところが英語は違います。それが「1匹」なのかはたまた「複数匹」なのか分かるように表現しなくてはなりません。つまり

### We have a dog.

(ウィ・ハヴァ・ドッグ)

なのか

### We have dogs.

(ウィ・ハヴ・ドッグズ)

ということを言わなければならないのです。

普通に「私たち（家族）は犬を飼っている」というときは、最初の We have a dog. という文章になりますが、ペットショップなどで、「私たちの店には犬もいます」というときは We have dogs. という文章になるはずですね。

ところで、この「1匹の」というときの表現ですが、不定冠詞の「a」を使って a dog（ア・ドッグ）とすると、数詞の one（ワン）を使って one dog（ワン・ドッグ）とすると、どう違うのかという疑問が出てくるかもしれません。

前者の「a dog」の「a」は冠詞であり、厳密には「不定冠詞」というもので、後者の「one dog」の「one」は専門的には「数詞」というものです。つまり「品詞」が異なるので、その意味合いが若干違ってきます。どういう違いがあるかというと

a dog : ( 1 匹の) 犬。日本語では、普通に「犬を飼っている、犬がいる」というときの「数にはこだわらないが、まあ普通 1 匹でしょう」というくらいのニュアンスの一匹の犬。

one dog : 「 1 」という数字が非常に大事。「いえいえ、そんなにたくさん飼っていません、1 匹だけですよ」というときのニュアンスの「 1 」に近い。

つまり、不定冠詞「a (an)」を使うときは

### **具体的な数は問題にしないが、とりあえず（普通）は「 1 つ」でしょう**

ということになり、数詞 one を使うときは

### **その数が「 1 」であることが重要**

になってくると言えます。

ですから、one dog という、「犬がいて（を飼っていて）それがたまたま 1 匹」というのではなく、「**2 匹でも 3 匹でもなくあくまでも 1 匹**」ということが大事になります。

もっとわかりやすい例を挙げると、レストランなどでの注文ですね。

### **焼肉定食 1 つ**

というときの「 1 つ」に近いわけです。

「注文」するときには当然、いくつ欲しいのかをハッキリさせる必要がありますね。そういうときには「数詞」を使います。それに対して、「数」についてはあまり問題にしないが、名詞に何もつけないわけにはいかないのも、あるいは、複数ではないので、「 1 つ」であるということをおこうというときに使うのが不定冠詞「a」です。

[コラムトップに戻る](#) | [目次に戻る](#)

## コラム13 : いろんな時間の言い方

be 動詞の「[時間を言うときの表現](#)」で数字をそのまま使った単純な時間の表現を学びましたが、英語にはそれ以外にも時間を表す方法があります。

ここでは、ざっとその方法について紹介しておきましょう。まとめると次のようになります。

1. 30分を過ぎるまでは「〇時過ぎ何分」
2. 30分を過ぎたら「〇+1 時前何分」
3. 「30分」は half を使う
4. 「15分」と「45分」は quarter を使う

まず、頭の中で大きなアナログ時計を思い浮かべていただくとわかりやすいと思いますが、たとえば

**9時10分**

であれば、「9時を10分過ぎている」と考え

**It is ten (minutes) past (after) nine.**

(イティイズ・テン (ミニッツ)・パースト (アフター)・ナイン)

となります。「分」を意味する minutes (ミニッツ) は入れなくてもかまいませんが、入れるとより正式な言い方になります。また、past (パースト) は「～を過ぎた」という意味の[前置詞](#)ですが、その代わりに after (アフター) 「～の後に」という意味の前置詞を使ってもかまいません。

同様に

**9時29分**

も30分を過ぎていないため

**It is twenty-nine (minutes) past (after) nine.**

(イティイズ・トゥ**エ**ンティ・**ナ**イン (ミニッツ)・**パ**ースト (アフター)・**ナ**イン)「9時29分過ぎです。」

ですね。ところが

### 9時31分

となると、たとえ1分であっても、30分を過ぎているので、「9 + 1 時前 2 9 分」という表現になり

## It is twenty-nine (minutes) to ten.

(イティイズ・トゥ**エ**ンティ・**ナ**イン (ミニッツ)・トゥー・**テ**ン)「10時29分前です。」

となります。

以上の基本を押さえたうえで、30分には half (**ハ**ーフ)「半分」、15分には quarter (**ク**ォーター)「4分の1」という単語を使います。

たとえば

### 9時30分

であれば、「9時を半分過ぎた」というふうに表現し

## It is half past nine.

(イティイズ・**ハ**ーフ・**パ**ースト・**ナ**イン)「9時半です。」

となります。さらに

### 9時15分

という場合は「9時を4分の1過ぎた」とし

## It is a quarter past nine.

(イティイズ・(ア)・**ク**ォーター・**パ**ースト・**ナ**イン)「9時15分過ぎです。」

となります。そして

## 9時45分

という場合ですが、数字に強い人ならもうわかりますね。そうです、「次の時間の15分前」というわけです。

## It is a quarter to ten.

(**イ**ティイズ・(ア)・**ク**ォーター・トゥー・**テ**ン)「10時15分前です。」

[コラムトップに戻る](#) | [目次に戻る](#)

# 付録

[英語の不規則動詞リスト](#)

[「子音 + -o」で終わる名詞：「-es」をつけるもの vs 「-s」をつけるものリスト](#)

[「-f\(e\)」で終わる名詞：「f + -s」になるもの vs 「v + -es」になるものリスト](#)

[日付や曜日に関する単語リスト](#)

[天気・天候に関する単語リスト](#)

[数えられない名詞の数量表現リスト](#)

[集合名詞リスト](#)

[目次に戻る](#)



## 英語の不規則動詞リスト

単語／意味／過去／過去分詞

### B

**begin** (ビギン) / 始める (まる) / **began** (ビギャン) / **begun** (ビガン)

**bet** (ベット) / 賭ける / **bet** (ベット) / **bet** (ベット)

**break** (ブレイク) / 壊す、破る / **broke** (ブロウク) / **broken** (ブロウクン)

**bring** (ブリング) / 持ってくる / **brought** (ブroot) / **brought** (ブroot)

**build** (ビルド) / 建てる / **built** (ビルト) / **built** (ビルト)

**burst** (バースト) / 破裂する / **burst** (バースト) / **burst** (バースト)

**buy** (バイ) / 買う / **bought** (ボート) / **bought** (ボート)

### C

**cast** (キャスト) / 投じる / **cast** (キャスト) / **cast** (キャスト)

**catch** (キャッチ) / 捕まえる / **caught** (コート) / **caught** (コート)

**choose** (チューズ) / 捕まえる / **chose** (チョウズ) / **chosen** (チョウズン)

**come** (カム) / 来る / **came** (ケイム) / **come** (カム)

**cut** (カット) / 切る / **cut** (カット) / **cut** (カット)

### D

**do** (ドゥ) / する、行う / **did** (ディド) / **done** (ダン)

**draw** (ドロー) / 引き出す / **drew** (ドロー) / **drawn** (ドローン)

**drink** (ドリンク) / 飲む / **drank** (ドリンク) / **drunk** (ドリンク)

**drive** (ドライブ) / 運転する / **drove** (ドライブ) / **driven** (ドリヴン)

## E

**eat** (イート) / 食べる / **ate** (エイト) / **eaten** (イートン)

## F

**fall** (フォール) / 落ちる / **fell** (フェル) / **fallen** (フォールン)

**feel** (フィール) / 感じる / **felt** (フェルト) / **felt** (フェルト)

**fight** (ファイト) / ケンカする / **fought** (フォート) / **fought** (フォート)

**find** (ファインド) / 見つける / **found** (ファウンド) / **found** (ファウンド)

**fly** (フライ) / 飛ぶ / **flew** (フルー) / **flown** (フロウン)

**forget** (フォゲット) / 忘れる / **forgot** (フォゴット) / **forgotten** (フォゴットン)

**freeze** (フリーズ) / 凍る / **froze** (フローズ) / **frozen** (フロズン)

## G

**get** (ゲット) / 手に入れる / **got** (ゴット) / **gotten** (ゴットン)

**go** (ゴウ) / 行く / **went** (ウェント) / **gone** (ゴーン)

## H

**have** (ハヴ) / 持つ / **had** (ハド) / **had** (ハド)

**hear** (ヒア) / 聞く / **heard** (ハード) / **heard** (ハード)

**help** (ヘルプ) / 助ける / **helped** (ヘルプト) / **helped** (ヘルプト)

**hold** (ホウルド) / 保持する / **held** (ヘルド) / **held** (ヘルド)

**hit** (ヒット) / 打つ / **hit** (ヒット) / **hit** (ヒット)

**hurt** (ハート) / 傷つける / **hurt** (ハート) / **hurt** (ハート)

## K

**keep** (キープ) / 維持する / **kept** (ケプト) / **kept** (ケプト)

**know** (ノウ) / 知っている / **knew** (ニュー) / **known** (ノウン)

## L

**leave** (リーヴ) / 去る / **left** (レフト) / **left** (レフト)

**lead** (リード) / 先導する / **led** (レッド) / **led** (レッド)

**let** (レット) / ~させておく / **let** (レット) / **let** (レット)

**lie** (ライ) / 横たわる / **lay** (レイ) / **lain** (レイン)

**lose** (ルーズ) / 失う / **lost** (ロスト) / **lost** (ロスト)

## M

**make** (メイク) / 作る / **made** (メイド) / **made** (メイド)

mean (ミーン) / 意味する / meant (メント) / meant (メント)

meet (ミート) / 会う / met (メット) / met (メット)

## P

pay (ペイ) / 払う / paid (ペイド) / paid (ペイド)

put (プット) / 置く / put (プット) / put (プット)

## Q

quit (クイット) / 止める / quit (クイット) / quit (クイット)

## R

read (リード) / 読む / read (レッド) / read (レッド)

ride (ライド) / 乗る / rode (ロウド) / ridden (リドン)

run (ラン) / 走る / ran (ラン) / run (ラン)

## S

say (セイ) / 言う / said (セッド) / said (セッド)

see (スイー) / 見る / saw (ソー) / seen (スイーン)

sell (セル) / 売る / sold (ソウルド) / sold (ソウルド)

send (センド) / 送る / sent (セント) / sent (セント)

set (セツト) / セットする / set (セツト) / set (セツト)

shed (シェッド) / 落とす、流す / shed (シェッド) / shed (シェッド)

shut (シャット) / 閉める / shut (シャット) / shut (シャット)

sing (シング) / 歌う / sang (サング) / sung (サング)

sit (スイット) / 座る / sat (サット) / sat (サット)

sleep (スリープ) / 眠る / slept (スレプト) / slept (スレプト)

slit (スリット) / 切込みを入れる / slit (スリット) / slit (スリット)

speak (スピーク) / 話す / spoke (スポウク) / spoken (スポウクン)

spend (スペンド) / 費やす / spent (スペント) / spent (スペント)

split (スプリット) / 分割する / split (スプリット) / split (スプリット)

spread (スプレッド) / 広げる / spread (スプレッド) / spread (スプレッド)

stand (スタンド) / 立つ / stood (ストウッド) / stood (ストウッド)

steal (スティール) / 盗む / stole (ストウル) / stolen (ストウルン)

swim (スウィム) / 泳ぐ / swam (スウァム) / swum (スウム)

## T

take (テイク) / 取る / took (トゥック) / taken (テイクン)

teach (ティーチ) / 教える / taught (トート) / taught (トート)

tell (テル) / 言う / told (トウルド) / told (トウルド)

think (シンク) / 考える / thought (ソート) / thought (ソート)

## U

**understand** (アンダース**タ**ンド) / 理解する / **understood** (アンダース**トウ**ッド) / **understood** (アンダース**トウ**ッド)

## W

**wake** (**ウ**ェイク) / 目覚める / **woke** (**ウ**ォウク) / **woken** (**ウ**ォウクン)

**wear** (**ウ**ェア) / 身に付ける / **wore** (**ウ**ォア) / **worn** (**ウ**ォーン)

**win** (**ウ**ィン) / 勝つ / **won** (**ウ**ォン) / **won** (**ウ**ォン)

**write** (**ラ**イト) / 書く / **wrote** (**ロ**ウト) / **written** (**リ**トン)

[付録トップに戻る](#) | [目次に戻る](#)

## 「子音+ -o」で終わる名詞：「-es」をつけるもの vs 「-s」をつけるものリスト

「-s」と「-es」の2通り表記しているものは、両方どちらでも使われるという意味です。

名詞	意味	-es / -s	複数形
<b>buffalo</b> (バファロウ)	バッファロー	-s -es	<b>buffal<u>o</u>s</b> (バファロウズ) <b>buffal<u>o</u>es</b> (バファロウズ)
<b>echo</b> (エコウ)	こだま	-es	<b>echo<u>e</u>s</b> (エコウズ)
<b>hero</b> (ヒーロウ)	英雄	-es	<b>hero<u>e</u>s</b> (ヒーロウズ)
<b>kilo</b> (キーロウ)	キロ	-s	<b>kilo<u>s</u></b> (キーロウズ)
<b>kimono</b> (キモノウ)	着物	-s	<b>kimono<u>s</u></b> (キモノウズ)
<b>memo</b> (メモウ)	メモ	-s	<b>memo<u>s</u></b> (メモウズ)
<b>mosquito</b> (モスキートウ)	蚊	-s -es	<b>mosquito<u>s</u></b> (モスキートウズ) <b>mosquito<u>e</u>s</b> (モスキートウズ)
<b>motto</b> (モトウ)	モットー	-s -es	<b>motto<u>s</u></b> (モトウズ) <b>motto<u>e</u>s</b> (モトウズ)

<b>piano</b> (ピ <b>ア</b> ノウ)	ピアノ	-s	<b>pianos</b> <u>̄</u> (ピ <b>ア</b> ノウズ)
<b>photo</b> (フ <b>ォ</b> ウトウ)	写真	-s	<b>photos</b> <u>̄</u> (フ <b>ォ</b> ウトウズ)
<b>potato</b> (ポ <b>テ</b> イトウ)	ジャガイモ	-es	<b>potatoes</b> (ポ <b>テ</b> イトウズ)
<b>pro</b> (プ <b>ロ</b> ウ)	プロ、賛成者	-s	<b>pros</b> <u>̄</u> (プ <b>ロ</b> ウズ)
<b>tomato</b> (ト <b>メ</b> イトウ)	トマト	-es	<b>tomatoes</b> (ト <b>メ</b> イトウズ)
<b>volcano</b> (ヴォル <b>ケ</b> イノウ)	火山	-s -es	<b>volcanos</b> <u>̄</u> (ヴォル <b>ケ</b> イノウズ) <b>volcanoes</b> <u>̄</u> (ヴォル <b>ケ</b> イノウズ)
<b>zero</b> (ズィ <b>ア</b> ろウ)	ゼロ	-s -es	<b>zeros</b> <u>̄</u> (ズィ <b>ア</b> ろウズ) <b>zeroes</b> <u>̄</u> (ズィ <b>ア</b> ろウズ)

[付録トップに戻る](#) | [目次に戻る](#)



## 「-f(e)」で終わる名詞：「f + -s」になるもの vs 「v + -es」になるものリスト

「-fs」と「-ves」の2通り表記しているものは、両方どちらでも使われるという意味です。

名詞	意味	-fs / -ves	複数形
<b>elf</b> (エルフ)	妖精	-ves	<b>elves</b> (エルヴズ)
<b>dwarf</b> (ドゥォーフ)	小人	-fs -ves	<b>dwarfs</b> (ドゥォーフス) <b>dwarves</b> (ドゥォーフズ)
<b>hoof</b> (フーフ)	ひづめ	-fs -ves	<b>hoofs</b> (フーフス) <b>hooves</b> (フーフズ)
<b>knife</b> (ナイフ)	ナイフ	-ves	<b>knives</b> (ナイヴズ)
<b>leaf</b> (リーフ)	葉	-ves	<b>leaves</b> (リーヴズ)
<b>life</b> (ライフ)	命	-ves	<b>lives</b> (ライヴズ)
<b>roof</b> (るーフ)	屋根	-s	<b>roofs</b> * (るーフス、るーフズ)
<b>self</b> (セルフ)	自身	-ves	<b>selves</b> (セルヴズ)
<b>thief</b> (しーフ)	泥棒	-ves	<b>thieves</b> (しーヴズ)
<b>wife</b> (ワイフ)	妻	-ves	<b>wives</b> (ワイヴズ)

\* 一部 rooves でも可とする考え方もある。

[付録トップに戻る](#) | [目次に戻る](#)

## 日付や曜日に関する単語リスト

[英語の曜日](#) | [英語の昨日・今日・明日など](#) | [英語の月の名前](#) | [英語の日](#)

英語の曜日	
日曜日	<b>Sunday</b> (サンデイ) / 省略形 : <b>Sun.</b>
月曜日	<b>Monday</b> (マンデイ) / 省略形 : <b>Mon.</b>
火曜日	<b>Tuesday</b> (テューズデイ) / 省略形 : <b>Tues.</b>
水曜日	<b>Wednesday</b> (ウェンズデイ) / 省略形 : <b>Wed.</b>
木曜日	<b>Thursday</b> (さーズデイ) / 省略形 : <b>Thurs.</b>
金曜日	<b>Friday</b> (フライデイ) / 省略形 : <b>Fri.</b>
土曜日	<b>Saturday</b> (サタデイ) / 省略形 : <b>Sat.</b>

英語の昨日・今日・明日など

今日	<b>today</b> (トゥ <b>デ</b> イ)
明日	<b>tomorrow</b> (トゥ <b>モ</b> ロウ)
昨日	<b>yesterday</b> (イ <b>エ</b> スタデイ)
明後日	<b>the day after tomorrow</b> (ざ・ <b>デ</b> イ・アフター・トゥ <b>モ</b> ロウ)
一昨日	<b>the day before yesterday</b> (ざ・ <b>デ</b> イ・ビフォー・イ <b>エ</b> スタデイ)
月	<b>month</b> ( <b>マン</b> す)
先月	<b>last month</b> ( <b>ラスト</b> ・ <b>マン</b> す)
来月	<b>next month</b> ( <b>ネクスト</b> ・ <b>マン</b> す)
日	<b>day</b> ( <b>デ</b> イ)
曜日	<b>day of the week</b> ( <b>デ</b> イ・オヴ・ざ・ <b>ウ</b> ィーク)
週	<b>week</b> ( <b>ウ</b> ィーク)
先週	<b>last week</b> ( <b>ラスト</b> ・ <b>ウ</b> ィーク)
来週	<b>next week</b> ( <b>ネクスト</b> ・ <b>ウ</b> ィーク)

英語の月の名前

1月	<b>January</b> (ジャニユアリィ) /省略形 : <b>Jan.</b>
2月	<b>February</b> (フェブるアリィ) /省略形 : <b>Feb.</b>
3月	<b>March</b> (マーチ) /省略形 : <b>Mar.</b>
4月	<b>April</b> (エイプリル) /省略形 : <b>Apr.</b>
5月	<b>May</b> (メイ) /省略形 : <b>May</b>
6月	<b>June</b> (ジューン) /省略形 : <b>Jun.</b>
7月	<b>July</b> (ジュライ) /省略形 : <b>Jul.</b>
8月	<b>August</b> (オーガスト) /省略形 : <b>Aug.</b>
9月	<b>September</b> (セプテンバー) /省略形 : <b>Sept.</b>
10月	<b>October</b> (オクトウバー) /省略形 : <b>Oct.</b>
11月	<b>November</b> (ノウヴェンバー) /省略形 : <b>Nov.</b>
12月	<b>December</b> (ディセンバー) /省略形 : <b>Dec.</b>



## 英語の日

1日	<b>1st</b> (フ <b>ァ</b> ースト)	17日	<b>17th</b> (セヴ <b>ン</b> ティーンズ)
2日	<b>2nd</b> (セ <b>カ</b> ンド)	18日	<b>18th</b> (エイ <b>ティ</b> ーンズ)
3日	<b>3rd</b> (さ <b>ー</b> ド)	19日	<b>19th</b> (ナイン <b>ティ</b> ーンズ)
4日	<b>4th</b> (フ <b>ォ</b> ース)	20日	<b>20th</b> (トゥ <b>エン</b> ティエ)
5日	<b>5th</b> (フ <b>ィ</b> フ)	21日	<b>21st</b> (トゥ <b>エン</b> ティ・フ <b>ァ</b> ースト)
6日	<b>6th</b> (ス <b>ィ</b> ックス)	22日	<b>22nd</b> (トゥ <b>エン</b> ティ・セ <b>カ</b> ンド)
7日	<b>7th</b> (セ <b>ヴ</b> ン)	23日	<b>23rd</b> (トゥ <b>エン</b> ティ・さ <b>ー</b> ド)
8日	<b>8th</b> (エ <b>ィ</b> ト)	24日	<b>24th</b> (トゥ <b>エン</b> ティ・フ <b>ォ</b> ース)
9日	<b>9th</b> (ナ <b>ィ</b> ン)	25日	<b>25th</b> (トゥ <b>エン</b> ティ・フ <b>ィ</b> フ)
10日	<b>10th</b> (テ <b>ン</b> )	26日	<b>26th</b> (トゥ <b>エン</b> ティ・ス <b>ィ</b> ックス)
11日	<b>11th</b> (イレ <b>ヴ</b> ン)	27日	<b>27th</b> (トゥ <b>エン</b> ティ・セ <b>ヴ</b> ン)
12日	<b>12th</b> (トゥ <b>エル</b> フ)	28日	<b>28th</b> (トゥ <b>エン</b> ティ・エ <b>ィ</b> )
13日	<b>13th</b> (さ <b>ー</b> ティーンズ)	29日	<b>29th</b> (トゥ <b>エン</b> ティ・ナ <b>ィ</b> ン)
14日	<b>14th</b> (フ <b>ォ</b> ティーンズ)	30日	<b>30th</b> (さ <b>ー</b> ティエ)
15日	<b>15th</b> (フ <b>ィ</b> フ <b>ティ</b> ーンズ)	31日	<b>31st</b> (さ <b>ー</b> ティ・フ <b>ァ</b> ースト)

[付録トップに戻る](#) | [目次に戻る](#)



## 天気・気候に関する単語リスト

### 英語の天気・天候に関する単語

寒い	<b>cold</b> (コールド)
暑い	<b>hot</b> (ホット)
暖かい	<b>warm</b> (ウォーム)
涼しい	<b>cool</b> (クール)
肌寒い	<b>chilly</b> (チリィ)
晴れた	<b>sunny</b> (サニィ) / <b>fine</b> (ファイン)
曇った	<b>cloudy</b> (クラウディ)
雨の (が降っている)	<b>rainy</b> (レイニィ) / <b>raining</b> (レイニング)
雪の (が降っている)	<b>snowy</b> (スノウィ) / <b>snowing</b> (スノウイング)

[付録トップに戻る](#) | [目次に戻る](#)

## 数えられない名詞の数量表現リスト

### 不可算名詞の数量表現

日本語	英語	表現
ケーキ	cake (ケイク)	<u>a slice of cake</u> (ア・スライソヴ・ケイク)
紅茶	tea (ティー)	<u>a cup of tea</u> (ア・カッポヴ・ティー)
ごはん	rice (ライス)	<u>a bowl of rice</u> (ア・ボウロヴ・ライス) (bowl: 「お椀」)
コーヒー	coffee (コフィー)	<u>a cup of coffee</u> (ア・カッポヴ・コフィー)
砂糖	sugar (シュガー)	<u>a spoon of sugar</u> (ア・スプーノヴ・シュガー) (spoon: 「スプーン」)
パン	bread (ブレッド)	<u>a loaf of bread</u> (ア・ロウフォヴ・ブレッド) (loaf: 「塊」)
ビール	beer (ビア)	<u>a glass of beer</u> (ア・グラソヴ・ビア)
水	water (ウォーター)	<u>a glass of water</u> (ア・グラソヴ・ウォーター)
ミルク	milk (ミルク)	<u>a glass of milk</u> (ア・グラソヴ・ミルク)
ワイン	wine (ワイン)	<u>a glass of wine</u> (ア・グラソヴ・ワイン)

## 集合名詞リスト

集合名詞のリスト

<b>army</b> (ア-ミー)	陸軍、軍隊
<b>audience</b> (オーディエンス)	聴衆、観客
<b>class</b> (クラス)	学級、クラス
<b>crew</b> (クルー)	乗組員
<b>crowd</b> (クラウド)	群衆、人の群れ
<b>family</b> (ファミリー)	家族
<b>flock</b> (フロック)	鳥の群れ
<b>gang</b> (ギャング)	ギャング、犯罪者のグループ
<b>group</b> (グループ)	グループ
<b>herd</b> (ハード)	動物の群れ
<b>orchestra</b> (オーケストラ)	オーケストラ
<b>staff</b> (スタッフ)	スタッフ
<b>series</b> (シリーズ)	シリーズ
<b>set</b> (セット)	セット、一式
<b>team</b> (チーム)	チーム